755

増補 謡曲通解 全

大和田建樹編

東京 博文館藏版

増補謡曲通解自序

名所古跡の地を踏む毎に先づ誦し出でらるゝものは謡の文句なり。清水に花見る春の夜は雪も降る夜嵐の聲を思ひ。須磨に月見る秋の夕は沖に小さき漁舟の影を思ひ。富士を仰げば天つみそらの霞にまぎれし乙女の舞の名殘戀しく。高砂を過ぐれば木の下蔭の落葉かきし翁嫗の昔問はまほしくなるは。是ぞ其妙文妙句の反響として發し來れる聲。謡曲いかでか唯謡ふと舞ふとの美術たるのみに止まらんや。世人あるひは謡曲を以て文學とし味ふ價なきものと誤解するあり。もとより伊勢源氏の中古文をのみ正格と偏愛する眼より見ば。語法の違へるもあらん雅文俗言の混淆せる

もあらん。然れども足利文學の妙趣妙味は自在豊富。たゞ此拘泥せざる處にありと思はゞ。却りて境域の廣大なるを見るべきなり。春の日秋の夜。友とそして交はれば交はるまにまに無限の情をかはすものはさても此種の文にあるか。常に自ら感ずる所を述べて增補謠曲通解の序とす。

明治二十九年の秋嵐寒き窓にて

編者しるす

凡例

一　流義によりて文句の異同を一々に擧げんはわづらはしければ其行はるゝ廣きによりて觀世流の謠本を主とす。但し文句はあながち今本のみにはよらず

二　次第。道行。詞。一聲。サシ。歌。クリ。クセ。ロンギ。ワカ。等は謠ひ方の名稱なり。文章としては必用なきに似たれども。謠曲に通じたる讀者の便をはかりて其まゝ除かず。

三　シテ。ワキ。ツレ。トモ。子方。狂言等は役の名なり。地は地謠として記者の文章をうたふものを云ふ。是等も元のまゝにして名稱を替へず。

四　同じ文句を二度うたふを返しと稱ふ。これには意味に必用のものと。節だけに必用のものとあり。節だけのものは皆はぶく。

五　狂言の詞を入れたるとシカ〳〵として略したるとあり。謠本によるのみ。シカ〳〵の處は能ならば狂言の文句あるものと知るべし。

六　傍の假名は。讀みにくきものと二樣に讀まるゝものとに附く。

七　同じ詞の註釋は。一度出でたるものは。二度いはぬもあり。二度も三度も同じ樣に云ひたるもあり。また實盛に云ふよりも忠度に云ふが分りよしと思ふ時は。初度に云はず後に註する類も少からず。便宜に從ふのみ。

八　いひかけとは。一つの詞に二つの意味を含ましむるものを云ふ。之をば本文の傍に細字もて記せるもあり。記しがたきは註に云ふもあり。

九　枕詞とは。五言の句に置きて次の詞を呼び出だすものを云ふ。是は古例を學びて用ふるのみなれば。由來のわからぬが多し。故にたゞ枕詞とのみ註す。

十　序とは。次の詞を呼び起すために。殊更に同じ詞を重ね。又は二つの意味ある詞にいひかけなどして。用ふる詞を云ふ。是は本文の傍註に讓るもあり。二重に釋きたるもあり。之を釋く事くどきに過ぐるも厭はぬに似たるは。謠曲の文句を粧ふ主點は多く。此手際に見ゆればなり。

十一　本書の初板を出だしたるは明治廿五年にあり。此度更に總論を改め更に鵺羽以下二十番を加へて第九卷となし增補謠曲通解と名づく。

增補

謠曲通解總目次

首卷

總論

其一　歌舞の起原……一
其二　猿樂の起原……三
其三　能の大成……七
其四　能の作者……八
其五　明和の改正……一一
其六　能と謠の組織……一二
其七　能の役者……一五
其八　謠の文學上價値（上）……一六
其九　謠の文學上價値（下）……一八

第一卷

○高砂……一
○田村……八
×東北……一六
道成寺……二一
○鶴龜……二七
實盛……二八
×熊野……三八
卒都婆小町……四八
×羽衣……五五
○竹生島……六一
○景清……六七
班女……七五
○小袖曾我……八一
右近……八七
邯鄲……九四
千手……一〇一
遊行柳……一〇八
室君……一一五
張良……一二一

朝長……百二十五
野宮……百三十五
仲光……百四十一
土蜘蛛……百五十一
小鹽……百五十六
小督……百六十二
道成寺……二十一
鶴龜……二十七
大原御幸……百六十九
百萬……百七十九
船辨慶……百八十五
岩船……百九十四

第二卷

老松……一
八島……六
江口……十五
望月……二十二
紅葉狩……三十三
葛城……三十八
知章……四
玉葛……
鞍馬天狗……
海士……
大蛇……
夜討曾我……
三山……八十九
熊坂……九十六
安達原……百四
咸陽宮……百十一
忠度……百十八
隅田川……百二十五
鉢木……百三十五
藤榮……百四十九
吳服……百五十八
花月……百六十四
花筐……百七十
弱法師……百七十九
七騎落……百八十七
金札……百九十七

目次

第三卷

白樂天……一
箙……七
楊貴妃……十三
俊寬……二十
壇風……二十七
難波……四十四
放下僧……五十
松風……五十九
安宅……六十八
攝待……八十一
雨月……九十三
經政……九十八
求塚……百四
天皷……百十二
羅生門……百二十
氷室……百二十五
正尊……百三十二
富士太皷……百三十九
鐵輪……百四十六
唐船……百五十二
西王母……百六十
巴……百六十四
杜若……百七十
藤戶……百七十八
山姥……百八十五
嵐山……百九十四

第四卷

養老……一
敦盛……七
井筒……十四
關寺小町……十八
石橋……二十二
加茂……二十九
木賊……三十九
蟬丸……四十四
蘆刈……五十二
殺生……五十三

第五卷

善界……六十九
松虫……七十五
三井寺……八十二
木賊……九十一
融……九十九
鵜飼……百　八
賴政……百十四
夕顏……百二十二
鳥追舟……百二十八
雷電……百三十七
志賀……百四十三
清經……百四十九
砧……百五十七
阿漕……百六十五
大江山……百七十二
春日龍神……百七十九
西行櫻……百八十五
大瓶猩々……百九十二
源氏供養……八十六
錦木……九十三
大會……百　二
皇帝……百　六
春榮……百十一
範太皷……百二十四
一角仙人……百三十
自然居士……百三十五

第六卷

龍田……一
兼平……七
哲願寺……十　五
葵上……二十二
禪師曾我……二十八
佐保山……三十二
通盛……三十九
祇王……四十六
高野物狂……五十一
放生川……百四十六
生田敦盛……百五十二
胡蝶……百五十八
柏崎……百六十四
通小町……百七十四
當麻……百七十九
調伏曾我……百八十六
元服曾我……百九十二
合浦……二百一
龍田……一
兼平……七
哲願寺……十　五
葵上……二十二
禪師曾我……二十八
佐保山……三十二
通盛……三十九
祇王……四十六
高野物狂……五十一
須磨源氏……六
卷絹……六十六
關原與市……七十二
藤……七十八
鸚鵡小町……八十四
松山鏡……八十九
枕慈童……九十五
忠信……九十九
吉野靜……百　三
二人靜……百　七
歌占……百十三
第六天……百二十三
船橋……百二十七
身延……百三十三
現在七面……百三十八
鷺……百四十四
東方朔……百四十七
俊成忠度……百五十一
梅枝……百五十六
加茂物狂……百六十二

車僧……百六十八
御裳濯……百七十二
碇潜……百七十九
浮船……百八十六
千引……百九十一
小鍛冶……百九十八

第七卷

玉井……一
橋辨慶……七
枪垣……十一
東岸居士……十八
國栖……二十二
江島……三十
鱗形……三十九
佛原……四十二
葛城天狗……五十八
和布刈……六十一
土車……六十六
櫻川……七十三
飛鳥川……八十三
舍利……八十八
道明寺……九十四
泔海……百二
住吉詣……百六
谷行……百十二
龍虎……百二十一
寢覺……百二十七
空蟬……百三十二
六浦……百三十六
水無月祓……百四十二
昭君……百四十九
大社……百五十六
淡路……百六十二
雲雀山……百六十八
戀重荷……百七十五
花軍……百八十一
水無瀨……百八十五
吉野天人……百八十九

第八卷

錦戸……百九十三
野守……二百
蟻通……一
佛供養……七
女郎花……十三
定家……二十一
鐘馗……二十九
繪馬……三十三
泰山府君……三十八
半蔀……四十二
墨染櫻……四十七
飛雲……五十一
伏見……五十四
雪……六十一
善知鳥……六十四
愛宕空也……七十二
九世戸……七十七
松尾……八十三
落葉……八十八
藍染川……九十五
松山天狗……百七
鵜祭……百十二
源太夫……百十八
雲林院……百二十四
綾鼓……百三十
輪蔵……百三十六
代主……百四十一
盛久……百四十七
梅……百五十六
草薙……百六十三
逆矛……百六十八
切兼曾我……百七十三
采女……百八十
舞車……百八十七
常陸帶……百九十五
浦島……二百一
猩々……二百七

第九卷

目次

鵜羽……一
惡源太……七
朝顏……十六
佐々木……二十二
鐘引……二十八
紅葉……三十二
鶴岡……三十八
丹後物狂……四十二
粉川寺……五十二
正儀世守……六十一
初雪……六十九
辨內侍……七十二
碁……七十八
皷瀧……八十五
伏木曾我……九十
芳野……九十六
隱岐院……百一
苅萱……百九
二度掛……百十八
富士山……百二十一

大和田建樹編

總論

其一　歌舞の起原

喜べば笑み哀しめば泣く。是れ人情なり。我上ならでも人の喜ぶを見て笑み。哀しむを聞きに泣く。是れまた人情なり。歌舞の起れるはこれに外ならず。我國の上古事に觸れて起る人々の感情を簡單なる樂器に合はせて謠ひ。之に應じを手拍子木の枝を持ちて歌ふ事などは。早くよりありき。かくて其譜も精密に定まり歌の詞も調ひたるは奈良朝の末。平安京のはじめ頃なるべし。是は專ら朝廷の上に行はれて神事儀式の用具となり。唐土韓の樂曲とも親しく和合して大成せしに因るなり。然れども其詞はと云へば。

笹の葉に雪ふりつもる冬の夜に豐の遊をするが樂しさ

又は。

あな尊と今日の尊とさや。いにしへもかくやありけん。今日の尊とさ。

又やゝ降りては。

蓬萊山には千年ふる。萬歳千秋かさなれり。松の枝には鶴巢ぐひ。巖が

そばには龜遊ぶ。

などの如く。極めて簡單にして短き感情を述ぶるに過ぎざれば。太古質朴の遺風としては餘韻けだかく十分愛し味ふに足るべけれど。世態繁忙に移り人情複雜に趣くまゝに。これのみにては自らも滿足し他をも滿足せしめざるに至れり。よりて足利の頃に曲舞といふもの起る。曲舞には或は忠臣孝子の事蹟を作り。或は名所舊跡の景色を寫しなどして。感情やゝ長く思想やゝ密なれば。歌も舞も一時さかんに行はれたり。今の謠曲のクセといふ部分に就きて其一斑を見るべし。

然れども食を得て衣を望むは人情の免かれがたき所なれば。室町の頃に至りて此曲

舞の詞に前を加へ後を繼ぎ足して。終に古來の歌舞を一變し。當時武士の人情に適して。永久不滅の猿樂といふものを作り始めたり。此前にも盲人の琵琶もて語る平家物語あり。其外白拍子の舞。幸若の舞。田樂の能などを始めとして。種々のものも起りしかど。或は曲ありて舞の無き爲め。或は舞曲ともに不精密なりしため。此猿樂に壓倒せられて謂はゆる優勝劣敗せしにぞ因るべき。全く人情と時好とが此猿樂に忠なりしにこそ因るなれ。人情時好を忠ならしめしは。とりもなほさず猿樂の天下に覇たるべき威望ありしにこそ因るなれ。

其二　猿樂の起原

猿樂は猿樂の能とも。略してはたゞ能とも稱ふ。之に用ふる歌曲を謠または謠曲と稱ふるなり。さても此猿樂の發達せし樣は如何にと云ふに。伊勢ゴは和屋。勝田。主内の三座ありて太神宮に奉仕し。近江には山階。下坂。比叡の三座ありて日吉の社ゴ奉仕し。丹波には本座。河内には新座。攝津には法成寺の三座有りて加茂住吉の

社に奉仕し。奈良には圓滿井（今の金春）結崎（今の觀世）外山（今の寶生）坂戸（今の金剛）の四座ありて春日の社に奉仕し。おの〳〵我社の神事に猿樂を奏して神慮をすゞしむるを業とせしと云へり。此時の猿樂は世俗ゝ行はるゝ神樂の類にて。品よきものなりしならん。今も猿樂太夫の神秘とする翁千歳三番叟の舞は尤も古き曲にて。翁は太神宮を表し。千歳は戸隱大明神。三番叟は住吉明神を表したりとも云ひ傳ふるなり。此外には岩戸びらき。大蛇退治。などの如く神代紀に基づくもの。又は社々の緣起を作れるもの出でゝおひ〳〵に行はれしならんとぞ思はるゝ。之を第一期すなはち神事能の起原とす。

室町將軍の時かの結崎家に次郎（觀阿彌清次）と云ふありて。此藝のため將軍に抱へられ。其子左衛門太夫（世阿彌元清）も繼いで寵を承く。是より古作を增補し。新作を擴張して猿樂の進歩を圖る針路を得しかば。節定まり舞整ひて世に行はるゝ事も著しく。遂に將軍家の音樂と爲りて儀式に用ひらるゝ事。かの神樂催馬樂の朝廷に用ひられし如き勢をぞ成したる。前は既に神事に用ひられたり。神前ゝ祈るには天下泰平武運長久を主とす。後は更に將軍家に用ひられたり。將軍家は。君のため國のため世のため民のために。之を祈り之を祝ふ心を儀式に表はさゞるべからず。されば松竹梅鶴龜に寄せ神佛仙人に寄せて祝言を奏する曲起る。之を第二期すなはち祝言能の起原とす。

節と舞との作こそ悉く其專門家の手には出でたれ。文句の作者は多く當時の文人歌人なりし事疑ふ可からず。其文人歌人と云ふも過半は佛門の人か。さなくても佛法の信徒たりしには相違なければ。其腦裏にはたゞ佛あるのみ。されば花も紅葉も悉皆成佛の緣となが め。風聲水音も御法の響と聞きなすのみかは。親子の愛を述べても觀音の大慈悲を說き。英雄の末路を語りても因果應報の理を說くを主とするは自然の勢なり。其うへ當時文學の權は全く僧徒の手に歸しはてたりしかば。學問する者皆これを師として怪しまず。況んや殺伐を事とし爭鬪を業とせし亂世の餘風とて。武人はすべて粗暴殘酷なるやうに見ゆれど。深更夢さめて靜に思はゞ。或は無益の殺生を悔ゆるもあるべく。却りて反動の女々しき感情に制せられて佛門に歸依する

例すくなからず。能と謠とは之を慰めつゝ引導する事の上手なるものなり。よりて佛法を主とせし作おこる。之を第三期すなはち幽靈能精靈能の起原とす。上の神事祝言佛法の三種は爲にする處ありて起れるなれば。見る人聞く人をまだ十分に滿足せしめ難き場合もあるべし。よりて勸懲の意を含める人情ものゝ作おこる。之を第四期すなはち現在物の起原とす。

さはいへど此四期かならずしも斯かる順序にのみ成り立ちたるとは定めがたく。たゞ當時人心の向ひし處。能の人心と共に發達せし樣を謂へるのみ。中にも幽靈能等の佛法を主とせし精神は能の全躰をほとんど蓋ふほどにて。つひに能と佛法とは離れざる如き感あらしめしは。是また他の美術とも伴なひて當時の時勢を代表せしに依るなり。それを明治今日の心もて非難する輩は。保元平治の軍に甲冑弓矢を用ひしを笑ふに似て。歷史の時代をも辨へぬ論とぞ云はまし。まして能と謠との趣味佳境は全くこゝに在る事。かの佛畵佛像が美術の主點を占むるを見ても曉るべきなり。

其三　能の大成

能のはじめて完備せしは室町將軍の時に在る事すでに云へり。東山將軍の頃より至りてます〳〵隆盛を極め。かの春日の四座は觀世(結崎)保生(外山。後よは寶生)金春(圓滿井)金剛(坂戸)と改姓しておの〳〵流儀を分ち。此道に從事して四座の太夫と呼ばれたり。かくて尤も將軍家に用ひられたるは觀世なりけり。

然れどもおの〳〵分れて一流を爲す毎に。觀世の作に出でたるものも文句を改め節を替へなどして互に異同を生じたり。之を大別して觀世寶生を上掛謠と稱へ。金春金剛を下掛謠と稱へて。謠本を別つに至れり。今も其文句と節とを比較して見れば。觀世寶生の相似よりたるは金春金剛の相似よりたるが如き親密の關係あるを見いだすべし。

豐臣秀吉はいたく此道を好みて自身も常にせられしかば。芳野詣。高野參詣。明智討。柴田。北條など云ふ新作も出來たる程なりき。其頃喜多七太夫と云ふもの。金剛の弟子なりしが。上手なりとて秀吉の氣に入り。抱へられて家を興せり。是より

喜多流下掛りに加はりて五座と爲りぬ。

德川氏の時に至りても。ますゝ將軍家に用ひられて。正月三日の謠初式を始めとし。將軍宣下の祝と云ひ勅使饗應と云ひ。重き式樂と爲りて品格を高め。むしろ美術として味ふよりも。武士のすべき一藝として幼稚の時より習はせたる有樣なりき。されば之を呼ぶにも御能と云ひ御謠と云ひて。他の遊藝などゝひとしなみに考へざりしも故あるなり。

其四　能の作者

能の水上なる曲舞は。もと芭蕉東北源氏供養錦木以下十六番ありて。圓滿井座に出でたりとは傳ふれど。たしかに其作者を知りがたし。今の一番完備の謠曲を組み立てたるは實に結崎清次父子に始まれるなり。但し此作者と云ふは。文句に節を附けて謠ふべく舞ふべき樣に作れる人の事にて。歌詞の作者には非ざれど。ろの節附の時代は。やがて歌詞の成れる時代に遠からぬを知るべければ。こゝに擧げて本文の參

考に備へん。名のみ傳はりて生死傳記の欠けたるもあるは遺憾なれどせん方なし。

結崎治部秦清次　幼名は觀世丸。のち三郎と稱す。落髮して觀阿彌宗音と號す。應永十三年五月十五日沒す。歲五十二。

結崎左衛門太夫秦元清　清次の長男なり。幼名は藤若丸。のち三郎。落髮して世阿彌宗全と號す。康正元年七月二日沒す。歲八十一。

金春式部太夫秦氏信　元清の聟なり。始の名は彌三郎。落髮して禪竹と號す。

結崎十郎秦元雅　元清の長男なり。長祿三年十月九日沒す。歲六十五。

日吉四郎次郎安清　佐阿彌と號す。長祿二年八月四日沒す。歲七十六。

金春八郎秦元安　氏信の孫なり。禪鳳と號す。

觀世小次郎秦信光　清次の孫。元清の甥なり。父は觀世音阿彌元重。永正十三年七月七日沒す。歲八十餘。

觀世彌次郎秦長俊　信光の長男なり。天文十年沒す。歲五十三。

外山又五郎吉廣　以下傳記不詳。
宮增某　脇師なりと云ふ。
龜阿彌
與江元久
江波左衛門　五郎と稱す。
内藤左衛門　のち河内守と稱す。
井阿彌
竹田法印宗盛
福來某
小田切能登
觀世左近太夫元章　清次より十五代目なり。始は三十郎と稱し。名を清溫と云へり。安永三年正月十八日沒す。歳五十三。

其五　明和の改正

十五代觀世太夫元章は學識あり此道に執心ふかき人なりしかば。從來の謠曲を改正して明和年間に上木せり。世に之を明和の改正とも改正本とも云ふ。一例を示さば。從來の草紙洗には大伴黒主を惡人の如く作れるを嫌ひて。かの萬葉集に入筆せしは全く一時の戯れなれば。實は小町が歌なる事を裏書して。洗ひたる後に顯はさんとの意に作り直したる類もあり。そも〳〵此明和の頃は恰も國學の興りたる時にて。萬葉調の古文流行し古實考證の學問爭ひ開けたる折なれば。其風潮が謠曲をも刺激せしものならん。加茂眞淵の萬葉考をはじめ唯いよしへに泥みて。今本は誤謬なり後世の詞は古意と合はずと私に改正する事が行はれし影響を蒙りたるならん。萬葉古事記は上古の物なれば上古に復して改め讀まんもよかるべけれど。謠曲は近古の物なれば。謂はゆる俗意俗調なるが却つて眞の雅意雅調にかなへる價値のある處なり。そのうへ既に成り立ちたる物をこゝかしこ削り改むるは。到底原文に勝らずして止むが習なり。さればにや元章一代にて又もとにかへり。改正本の行はるゝ時は

終に無かりしなり。然れども字句の誤れるを正し。謠ひ訛れるを直しなどして。文學上に親密の關係をつけしは。改正本の功もつとも多きに居る。明和改正本の業敗れしとて其功を傷つくるに足らず。

其六　能と謠の組織

能は謠の意を所作にあらはすものなり。謠は歌もしくは文章に節を附けて聲に發するものなり。同じく聲に發するものにして或時は對話獨語の詞と爲り。或時は叙情的叙事的の歌と爲る。是れ謠曲に語る部分と歌ふ部分との兩立せる所以なり。試に見よ。正尊の

判官「いかに土佐坊めづらしや。扨何の爲めに上りてあるぞ。鎌倉殿よりの御文は無きか。土佐坊「さん候ふさしたる御事も御座なく候ふ間。御文は參らず候ふ。言葉に申せと候ひしは。都に別の子細なく候ふ事。偏に御渡り候ふ故と思召し候ふ。かまへてよく守護させ給へところ御諚候ひつれ。判官「よもさはあらじ。

義經討ち上りたる御使とこそ覺えたれ。

は語る部分にして。

地「もとより虚言とは思へども。文をふるうて書いたる。器用を感じ思召し。御盃を下さるゝ。折節おん前に。磯の禪師が娘に。靜といへる白拍子。今樣を謠ひつゝ。お酌に立ちて花かづら。かゝる姿ぞたぐひなき舞の袖。

は即ち歌ふ部分なるを。然れども語る部分より直に歌ふ部分に轉じ。歌ふ部分より忽ち語る部分に移りて其間に著るしき隔ての無き事も多きは。同じく正尊の

辨慶「いかに申上候ふ。唯今土佐が宿所を見せに遣はし候ふ處に。幕の内には矢を負ひ弓を張り。つはものども皆物の具し。唯今打つ立つ氣色見えて。更に物詣の氣色は見えぬ由申し候ふ。判官「もとより覺悟の前なれば。何程の事のあるべきぞと。(此と文字より歌ふべき部分となる)辨慶「そのまゝやがて御座を立ち。靜は着せながら參らする。地「義經之を召されつゝ。おん佩刀を取つてしづ〳〵と。中門の廊に出で給ひ。門を開かせ諸共に。寄せくる勢を待ち給ふ。

を見て其一斑を知るべし。

人或は曰く。義經みづから「あるべきぞと」と記者の語なると文字までを發言し。靜みづから「靜は着せなが參らする」と謠ふなどは笑ふべきに非ずやと。然り實際ならばさる事もあらん。然れども能は實際を寫す芝居にあらず。謠の文句を役者おの〳〵分業して朗吟するまでのものと思はゞ其疑はおのづから晴るべし。曾たゞに疑の晴るゝのみならんや。却りて其間に情味の湧き來るを覺ゆるにぞ至るべき。

之に次ぎて心得べきは歌意之が主となる處と歌意之が從となる處との別なり。歌意之が主となる處はいはでも知れなん。歌意之が從となるとは。たとへば安達原にさてそも五條わたりにて。夕顏の宿を尋ねしは。日蔭の糸の冠着し。それは名高き人やらん。加茂のみあれに飾りしは。糸毛の車とこそ聞け。糸櫻。色もさかりに咲く頃は。くる人多き春の暮。穗に出づる秋の糸ずゝき。月によるをや待ちぬらん。

と糸に緣ある文句を集めたるは。老女の糸繰る間を見せたるまでにて。前後の意味

に直接の連絡なきものゝ如きを指していへども決して餘計にあらず。作者の深き注意はこゝらに籠りたるをこそ見るべきなれ。何となれば。鹽を汲み薪を採り糸を繰り鐘を聞きなど。能には所作なくして實際ならば所作多かるべき處に之を用ひて。其所作のしば〳〵繰りかへされたる心をあらはし。又は演藝中の舞曲として殊更に連絡あるが如く無きが如き文句を挿み入るゝ手段を用ふる事もあり。又は思ひ戀ひ憂ひ泣くなどの時に之を用ひて綿々たる情緒を直接に言はざる間に感ぜしむる場合なども多ければぞかし。

其七　能の役者

能一番の主人公たる役者をシテといひ其副たる役をツレ（又はシテヅレ）といふ。高砂の老翁はシテにして老女はツレなるが如し。シテの客と爲りて之を助くる役をワキといひ其副たる役をワキヅレといふ。高砂の友成はワキにして他の官人はワキヅレなるが如し。其ほか從者の役をばトモといひ少年にてする役を子方といふ。角田

川の梅若丸。舟辨慶の義經の如し。此外狂言師より出でゝする役をアヒともいひ又はヲカシともいふ。アヒとは能役者のする間に立ちて演ずるの意。ヲカシとは可笑しきわざをするをもて狂言の本分とすればなるべし。

人やゝもすれば子方に就きて難じて曰く。角田川の梅若丸は少年なればもとより子方なるが適當なれど。舟辨慶の義經を子方にするとは如何なる事ぞ。妾の靜は現に大人をして演ぜしむるにと。然り然れども能は必ずしも寫實的のものなるまじきは前にもいへり。舟辨慶は義經と靜との別離をあはれに感ぜしむるを以て主となし。夫婦といふ直接の觀念は寧ろ忘れたるが如し。是れ他の芝居などゝ替りて面白き所ならずや。安宅の義經も同じく子方なるは一見以てかはゆそうなりといふ同情を引き起さしむるの手段に外ならじと思はるゝなり。味へば味ふほど奥あるは能と謠の作意なるかな。

其八　謠の文學上價値（上）

文學者は誰も曰ふ。奈良朝文學の代表者は萬葉集。王朝文學の代表者は源氏物語なりと。余はこれに繼ぎて。近古文學の代表者は謠曲なりとぞ曰ふ。そも〳〵思想自由にして言語に富み。漢文和文相しみて極端に走らず。言文の隔いちじるしからずして活潑壯大の氣みちゝたりしは。全く此時代にあり。かくて謠曲はこれを代表したるものなり。

漢語は漢學と共に早く入り込みて居たりしかど。伊勢源氏の時代よりは。さほど和文と親密ならざりしに。これに反して明治の今日を見れば。或は漢語のために和文の領分をも蓋はれんとする傾きあり。今人はいづれにかよるべき。古へに癖すれば弱きに失し。今に從へば亂雜に流る。これが中庸を得て標準を示すものは近古の名文。殊には謠曲の文章にぞあるべき。これ優れたる一つ。

世に言文一致の論者あり。ひたすら文章鄙猥の俗語にまで引き下さんとす。是は實際行ひやすく便利なるには似たれど。日本語の保存に對して好ましき事なるか。文學上の文字に對して喜ばしき事なるか。輕々しくは信じがたし。世に又古文偏信の

論者あり。一心に文章を言語多からざりし古代に引き上さんとす。是は迂遠取るに足らざる論なれど。純粹日本語に對しては忠なるに似たり。されど是も好古專門家の外には學びて益なし。さらば如何すべきと云ふに。言語をば文章に近づけ。文章をば言語に近づけんとつとむべし。然せば言語はおのづから位を高め。文章はおのづから平易にならん。謠曲の用語は此目的を示したるものとぞ信ずる。これ優れたる二つ。

日本の文章には句讀法なしと人も云ひ我も思へり。祝詞宣命は眞淵宣長兩大家の註。源氏枕の草紙は季吟の抄によりて行はるれども。實は當時學者の句讀法は如何ありけん知るべからず。然るに謠曲はひとり其法を傳へて作者意中の對話を聞くべく。後來文を學ぶ者の摸範たらしむるは。言語の化石たる歌舞にともなへばなり。これ優れたる三つ。

其九　謠の文學上價値(下)

謠は美文なり。美文に貴ぶべき性質は三つありて。曰く上品なるべし。曰く美くしかるべし。曰く壯大なるべし。是なり。今もし試に謠本を取りて羽衣の一曲を讀まば。心おのづから上品になりて野鄙の念に遠ざかるべく。富士の高嶺三保の松原。いつしか眼前に浮び出づる心地して美しき事たとふるに物なからん。而して「それは天人の羽衣とて。たやすく人間に與ふべきものにあらず」「いや疑は人間にあり。天に偽りなきものを」の聲を聞くに至りては。身ははや汚濁の人間界を脫せしかの思を爲すに至れるは何ぞや。いはゆる壯大なる筆もて威嚴侵すべからざる天女を寫し出だせるに因るのみ。謠は殊に是等の性質もて充たされたるものなること讀みてのち味ひ知るべきなり。是れ更に美文として優れたる一つ。

美文には非情の物を有情の人間に比して用ふること支那にも西洋にも少なからぬよ。我國には餘り多からずとの論あり。然れども謠は殊にしば〳〵之を用ふる事を忘るべからず。砧に曰く。

故郷の軒端の松も心せよ。おのが枝々に。嵐の音を殘すなよ。今の砧の聲添へ

て君がそなたに吹けや風。あまりに吹きて我心。かよひて人に見ゆならば。其夢を破るな。破れて後は此衣。誰かきても訪ふべき。

是は松を人間に比して問答する文句にあらずや。其他松の高砂に於ける。柳の遊行柳に於ける。櫻の西行櫻に於ける。夕顔の半部に於ける。紅葉の六浦に於ける。藤といひ杜若といひ芭蕉といひ。無情の草木を有情の人間に比したるもの、著るしきが多きを見るべし。是れ美文として優れたる二つ。

謠には次第と稱へて七言五言の二句を二つ重ねたる文あり。是は旅行の趣意などを述べて。

今をはじめの旅衣。日も行末ぞ久しき。(高砂)

其名も高き富士の嶺の。御狩にいざや出でうよ。(夜討曾我)

憂しとはいひて捨つる身の。ゆくへいづくと定むらん。(熊坂)

の如く簡單なるが常なれども。中には意趣深くして一種特別の妙味いふばかりなきものあり。かの

花の跡とふ松風や。雪にも恨なるらん。(朝長)

釣瓶の水に影おちて。袂を月やのぼるらん。(檜垣)

曉ごとの閼伽の水。月もこゝろや澄ますらん。(井筒)

散らぬ先にと尋ねゆく。花をや風のさそふらん。(春榮)

の如きを見ば。餘情おのづから言外に溢るゝを覺えん。是れ美文として優れたる三つ。

又道行と稱へて。數十里の路程を僅々三行四行五六行の內に縮め千里も一歩の旅情を寫し出だす文句あり。その旅行者の感情と經過する山川の風景を挾み歌へる手際は謠曲獨得の妙處といはんも誣言ならざるべしとぞ思ふ。見よ〳〵鉢木の

信濃なる。淺間の嶽に立つ煙。遠近人の袖寒く。吹くや嵐の大井山。拾つる身

になき友の里。今ぞうき世を離れ坂。墨の衣の碓氷川。くだす筏の板鼻や。佐

野の渡に着にけり。

道明寺の

捨てゝはや。久しかりつる世の中を。又思ひ立つ旅衣。昨日の山を跡に見て。猶行く方は白雲の。海も見えたる西の空。夕日がくれの霧間より。流れも是や河内なる。土師の里にも着きにけり。

の如きを。是れ美文として優れたる四つ。

なほ字句の間には。枕詞序詞言掛縁語の類を自由自在に用ひて面白くつゞけなしたるあり。「かみはかもがはしもはしらかは」「いせいはしみづかもかすが」の如く頭に同音を重ねて用ひたるあり。「雲かと見えて八重一重。咲く九重の花ざかり」「月は一つ影は二つみつ汐のよるの車に」の如く數字を集めていへるあり。「鹽曇にかきまぎれて。跡も見えずなりにけり跡をも見せずなりにけり」の如く返しの詞をいさゝか替へて用ひたるあり。是等はわづかに一斑を擧ぐるに過ぎざれども。其美文として韻文として味ふべく研究すべく。取つて以て將來文學上の參考に供すべき材料は隨分少なかるまじきを信ずるなり。謠本あにたゞ吟ずる人と舞ふ人との座右にのみ弄ばれて止むものならんや。特に文學界の親友たらしめん事こそ余が切望する處なれ。

增補謠曲通解第一卷

大和田建樹編

高砂

たかさご

古名相生元清作

ワキ次第「今をはじめの旅衣。日もゆくすゑぞ久しき。詞「そもゝ〳〵是ハ九州肥後の國。阿蘇の宮の神主友成とはわが事なり。われいまだ都を見ず候ふほどよ。此度れもひたち都に上り候ふ。又よき次なれば。播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候ふ。道行「旅衣。末はるゝ〳〵の都路を。けふ思ひたつ浦の波。舟路のどけき春風も。いく日來ぬらん跡末も。いさ白雲のはるゝ〳〵と。さゝテツレ一聲「高砂の松の春風ふき暮れて。尾上の鐘もひゞくなり。高砂の浦に着きにけり。

前シテ 翁
後シテ 住吉明神
ワキ 阿蘇の神主
摂磨

古今集の序に依りて高砂住吉の松のいはれを說き。其松ヽ歌道の學に取りて君が代と祝ひ奉るとを主とせり。されば此曲と以てすべての能の始に置き。徳川氏の論初の式にも先づ四海波の章と謠はしめ。其外祝言には必これと用ふるが古實なり。

うもく　前文を承けて後文を起す詞。謠には常に雜語に用ゐ。

高砂　播磨の國加古郡にあり。見物に同じ。

一見　旅衣などの詞を置けり。衣を張る。

旅衣　裁つ。また裏の袋にいひかけたるなり。波といふ故に下に春風の字をいだす。

さやうにも　謠

さしもにもひし　に思ひしの意。

ふれもひたつ　いくか來ぬらんの三句に著きにけり　ら み合ひて道行の首尾全し。

尾上の鐘　高砂尾上寺の鐘。

波は霞の立ちこめたる　霞の立ちこめたるを。

暁の陰なれば波は見えず。唯音のみにて潮の滿干を知るの意。誰とかも知る人にせん高砂の松も古今集の歌。友ならなくに。意は我は年老いて知る人は皆没せり。松とても昔よりの友なれば過ぎ來し方の話し合手にはならずさなり。

過ぎ來し世々は云々　久しき事は皆忘れたり。たゞ老のみ積りて曉の寐覺がちなれば。國にさし殘る有明の月も。巻の篇も。沼にかけたる我島の上によろづへらるゝ夜毎の起居にも。松風の外は音なふものなければ。我心ひとりと友として思ふ浦風の。落葉のみこそなり。思ふ。遥ぶるは歌の事を歌ふ口開き。老の繰ごとつづけたる故に國とれぐらさいひ。筆の綠にさきさのひ。心と友と爲と皆庭に掛けて遥ぶるの序させり。

むさづれは云々　浦風より落葉。落葉より落葉衣。衣より袖。袖ろへより掻かうよさ連關なく續けたり。落葉衣とは身に木の葉の散りかゝるを云ふ。

尾上の松も　松の上を云ひ。忽わか身にたとへて老の波もさつゞけたり。老の波とは老のひまなく寄り來ると波に對へて云ふ。さて又よりくると落葉に續けて。いつまでも生くると新く筑前の名所に掛けて。其生の松さいふも此高砂さ共に久しき名所よさ結びたり。方然るべしさ古來歌あり。祝の主意にはさもあるべし。老と戀

ツレ「波は霞の磯がくれ。二人「音ころ〳〵ほの。滿干なれ。シテサシ「誰とかも知る人にせん高砂の松も古今集の歌。友ならなくに。意は我は年老いて知る人は皆没せり。松とても昔よりの友なれば過ぎ來し方の話し合手にはならずさなり。

過ぎ來し世々は云々　久しき事は皆忘れたり。たゞ老のみ積りて曉の寐覺がちなれば。國にさし殘る有明の月も。巻の篇も。沼にかけたる我島の上によろづへらるゝ夜毎の起居にも。松風の外は音なふものなければ。我心ひとりと友として思ふ浦風の。落葉のみこそなり。思ふ。遥ぶるは歌の事を歌ふ口開き。老の繰ごとつづけたる故に國とれぐらさいひ。筆の綠にさきさのひ。心と友と爲と皆庭に掛けて遥ぶるの序させり。

むさづれは云々　浦風より落葉。落葉より落葉衣。衣より袖。袖ろへより掻かうよさ連關なく續けたり。落葉衣とは身に木の葉の散りかゝるを云ふ。

尾上の松も　松の上を云ひ。忽わか身にたとへて老の波もさつゞけたり。老の波とは老のひまなく寄り來ると波に對へて云ふ。さて又よりくると落葉に續けて。いつまでも生くると新く筑前の名所に掛けて。其生の松さいふも此高砂さ共に久しき名所よさ結びたり。方然るべしさ古來歌あり。祝の主意にはさもあるべし。老と戀

く方よりすればやはりいつまでか方へ捨てがたし。までは心中を老人夫婦來れりかゝるより老人に問ふ。

住の江　住吉の古名。住吉は攝津住吉郡にあり。

相生　相生は相老さ種々說もあれご相共にならび生ひたる松さ心得べし。

古今の序に　古今集の略語。醍醐天皇の延喜年中に紀貫之等の勅を奉じて撰べる歌書なり。序は貫之がきたり。

尉姥　老翁に同じ。老嫗に同じ。

申し給へに同じ。

たての仰せ　興なき仰せさいふほどの意。

夫婦の道に同じ。

旅脊の道　これはめでたき世のためしなり。

萬葉集　萬葉集は奈良の朝に橘諸兄公の撰ばれたる歌集。上代さは延喜に對して奈良の朝をさす。にしへのぎさは此萬葉集に撰ばれたる古の聖代を高砂に比したる義ぞさなり。

松とハ申し候ふぞ。シテ「仰せの如く古今の序よ。高砂住の江の松も。相生のやうよ覺えとありさりながら。此尉は津の國住吉のもの。是なる姥こそ當所の人なれ。知る事あらば申させ給へ。ツキ「ふーさや見れば老人の。夫婦一所よありながら。遠き住の江高砂の。浦山國をへだてゝ住むと。いふはいかなる事やらん。ツレ「うたての仰せ候ふや。山川万里を隔つれども。たゞひに通ふ心づかひの。妹脊の道は遠からず。シテ「まづ案じても御覽ぜよ。シテツレ「高砂住の江の。松は非情のものだよも。相生の名はあるぞかし。まーてや生ある人とーて。年久しくも住吉より。通ひ馴れたる尉と姥とは。松もろともよ此年まで。相生の夫婦となるものを。ツキ「いはれを聞けばほれもーろや。さてゝさきよ聞えつる。相生の松の物語を。所にいひれくいはれはなきか。シテ「昔の人の申しよハ。是はめでたき世のためーなり。ツレ「高砂といふは上代の。萬葉集の

住吉と申すは　住吉は今の延喜の御代を比したるぞどなり。
古今相同じ　代さに應ず。　上の上代と今此御

時つ風　潮時の風と云ふ。治まる時と續けたり。
枝となら　太平の世には五日一風十日一雨。風ねだを鳴らさず雨つちくれを破らず。などと云ふ古語に基づけり。
あふぎても　仰ぎても仰ぐにあまりあるの意。

花實時　たがへずと云ふ。花咲き實なる時節を違へぬと云ふ。無名抄に曰く。中頃古今の時花實ともに備はりて云々と。されば暗に古今集の事を含む。
南枝花始開　朗詠集の句。

いよ〳〵のさ。シテ「住吉と申すは。いま此御代ヨ住み給ふ延喜の御事。ツレ「松とは盡きぬ言の葉の。シテ「榮えは古今あひ同じと。シテツレ「御代をあがむるたとへなり。ワキ「よく〳〵聞けばありがたや。今こう不審春の日の。シテ「光やはらぐ西の海の。ワキ「かーこは住の江。シテ「こゝは高砂。ワキ「松も色そひ。シテ「春もワキ「のどかヨ。地「四海波ーづかヨて。國も治まる時つ風。枝を鳴らさぬ御代なれや。あひヨ相生の。松こそめでたかりけれ。げヨや仰ぎても。言もれろかや斯かる世ヨ。住める民とてゆたかなる。君のめぐみぞありがたき。
ワキ詞「なほ〳〵高砂の松のめでたきいはれくはーく御ものがたり候へ。地クリ「それ草木こゝろなーとは申せども。花實の時をたがへず。陽春の德をうなへて。南枝花はじめて開く。シテサシ「然れども此松は、そのけーきとこーなへヨして。花葉時を分かず。地「四つの時至りても。一千年のいろ雪のうちヨ深く。又は松花のいろ十かへりとも云へり。シテ「かゝるたよりを松が枝の。地「言の葉草の露の玉。心をみがく種となりて。シテ「生きとーし生けるもの毎ヨ。地「敷島のかげヨよるとかや。クセ「ーかるヨ長能が言葉ヨも。有情非情のその聲。みな歌ヨもるヨ事なーし。草木土砂風聲水音まで。萬物のこもる心あり。春の林の東風ヨうごき。秋の虫の北露ヨなくも。みな和歌の姿ならずや。中ヨも此松は萬木ヨすぐれて。十八公のよそほひ。千秋の綠を爲して古今の色を見ず。始皇の御爵ヨあづかるほどの木なりとて。異國ヨも本朝ヨも萬民これを賞翫す。シテ「高砂の尾上の鐘の音すなり。地「曉かけて霜はれけども松が枝の。葉色は同じ深みどり。立ちよる陰の朝夕ヨ。かけども落葉の盡きせぬは。まことなり松の葉の。散りうせずして色は尚ほ。正木のかづら長き世の。た

四つの時　春夏秋冬。
一千年色　唐中深。　遍照の詩の句。
松花之色　本朝文粹の詩。
松の花は　千年に一度さくといへばこれを十返くりかへす意。

言の葉草　歌の事。草より露を出だし。露と玉につゞけて研くの序とす。
敷島の　敷島はもと大和の枕詞なるがうつりて歌の事に用ふ。島の陰に舟などの寄るやうに言ひつけて誰も歌に心をよする事を云ふ。
長能　一條天皇の頃の歌人。たしか長能が調と云ふ事は出處だれと。古今集雅抄または和歌初心抄の序などに次の語氣に似たる文あり。
有情非情　は動物と草木國土とを分けて云ふ。昔歌を聲に發せぬものなしとなり。
萬物のこもる心あり　萬物みな歌のこもる心と含めり。
十八公　松の字の解剖。常に要る色な
きを云ふ。
始皇の御爵　薬の始皇が雨を樹下に避けたるより。其木を封ずて五大夫と爲すといふ古事を用ふ。爵は位なり。
高砂の尾上のかねの音すなり　晩鐘（やにくらん）
歌　霜夜のさえわたる時は鐘にのづから鳴るといふ事あればかくよめり。
松の葉の散り失せずして　正木のかづら（くつたはり）松の葉のは散り失せずの詞。

と へなりける常磐木の。中よも名は高砂の。松末代のためしよも。
相生の松ぞめでたき。
ロンギ地「げよ名を得たる松が枝の。老木の昔あらはーて。その名を名のり給へや。シテツレ「今は何をかつゝむべき。是は高砂住の江の。相生の松の精。地「夫婦と現じ來りたり。地「ふーさやさて
は名どころの。松の奇特をあらはーて。シテツレ「草木こゝろなけれども。地「かーこき世とて。シテツレ「草も木も。地「わが大君の國なれば。いつまでも君が代よ。住吉にまづ行きて。あれにて待ち
申さんと。夕波のみさはなる。海人の小舟よういち乘りて。追風よまかせつゝ。沖の方よ出でにけりや。沖の方よいてよけり。
ワキ歌「高砂や。此浦舟よ帆をあげて。月もろともに出でしほの。波の淡路の島陰や。遠くなるをの沖すさて。はや住の江よ着きにけり。

舟の出づると月の出づると疑れて出潮に言ひ拔く出潮は月の出時の滿潮。波の淡々しきに掛けたり。

松の奇特　奇特は不思議に同じ。

序。正木のかづらは葛の名にて長くの序。色ばなほまさると正木にいひかけたり。

われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いくよへぬらん　伊勢物語に一昔みかど住吉に行幸し給ひけり」と前書して此歌あり。其次に「御神現形し給ひて」とありて。左の歌あり。

むつまじき君は知らすや瑞籬の久しき世よりいはひそめてき　意は我は久しき古より朝廷と親ひ守りて在ると睦しき我なりと天息は知ろしめさぬにやとなり。瑞籬は久しきの枕詞。

すゝしめ　神官と云ふ。

宮つこ　西の海やあときが原の潮路よりあられ出でし（住吉の神）　懐古今集の歌。おとき。昔は日向にて住吉の神の生れ給ひし土地。潮路よりさは海中なれば云ふ。たゞしこれには波間よりさして引きたり。

殘雪に同じ。

のこんの雪　住吉の邊にあり。

あさ潟　千年之緑滿レ掬。

倚二松根一而摩レ腰。千年之緑滿レ手。折二梅花一而挿レ頭。二月之雪落レ衣。

本朝文粹にある文。

影向　神のあらはれ給ふと云ふ。

御影と拜む　月の緣にて實は神の影向と拜む意。

盤渉調の樂名。

青海波　太食調の樂名。

還城樂　還城の字と都に歸る意に取れり。

小忌衣　神事にあづかる公卿の祭服。

さすかひな　さすは舞の手の名。かひなは腕。

とさむろ手　これも舞の手の名。

後シテ「われ見ても久しくなりぬ住吉の。岸の姫松いくよ經ぬらん。むつまじと君は知らずや瑞籬の。久しき世々の神かぐら。夜の鼓の拍子を揃へて。すゞしめ給へ宮つこたち。地「西の海。あをきが原の波間より。シテ「あらはれ出でし神松の。春なれやのこんの雪の朝香がた。地「玉藻かるなる岸陰の。シテ「松根によつて腰をすれば。地「千年の緑手よ滿てり。シテ「梅花を折つて頭にさせば。地「二月の雪ころも よ落つ。

ロンギ地「ありがたの影向や。月すみよーの神遊。御影を拜むあらたさよ。シテ「げにさまゞの舞姫の。聲もすむなり住の江の。松影もうつるなる。青海波とはこれやらん。地「神と君との道すぐく。都の春よゆくべくは。シテ「それぞ還城樂の舞。地「さて萬歳のシテ「小忌衣。地「さすかひにては惡魔を拂ひ。をさむる手よは壽福をいだき。千秋樂は民を撫で。萬歳樂にはいのちを延ぶ。相生の松風。

千秋樂　盤渉調の樂。
萬歲樂　平調の樂。
颯々　風の吹く音。

前シテ　童子
後シテ　田村丸
ワキ　廷臣　京都

清水寺にて田村丸の幽靈旅宿にあひて觀音の佛德をのべ。わが軍功の樣と物語る事を作れり。田村丸と八島と組との三曲は勝軍の物語なれば。修羅さて祝言の能に用ふ。修羅さは合戰の意なり。

鄙の都路　國毎の府中を云ふ。古註にあり。府中は國府の略のあり。し土地を云へば。うの國府府を指つも過ぎ來りての意。

九重　京都の意。內裏を云ふ。こゝにては東國方　關東のこと方云ふに同じ。

彌生　三月の古名。

影もの　ぞかに云々　のぞかに東より四に廻る日影の殿むうなた方が音羽山ならん。其音羽の靜なるさいひて山より瀧の響も聞し。清水の序さしたろなり。音羽山は外にも同名あれどこゝは清水の山を云ふ。瀧も同處にあり。

清水寺　せいすゐともきよみづでらとも云ふ。京都東山にあり。

たのづから　春の手向と　自然に地主權現への手向と花盛の爲にるを云ふ。手向とは神佛に手づから物を供ふるを云ふなり。清水寺の願守の神を地主權現

颯々の聲ぞたのしむ。

田村　たむら

元清作

ワキ次第「鄙の都路へだてきて。九重の春もいうかん。詞「是は東國方より出でたる僧にて候ふ。我いまだ都を見ず候ふほどに。此春れもひたちて候ふ。道行「頃もはや。彌生なかばの春の空。かげものどかにめぐる日の。霞むうなたや音羽山。たきの響も一づかかる。清水寺にも着きにけり。詞「急さ候ふほどに。是は都清水寺とかや申すげに候ふ。是なる櫻の盛とみえて候ふ。人を待ちてくはーく尋ねばやとれもひ候ふ。

シテ一聲「れのづから。春の手向とかりにけり。地主權現の花盛。

サシ「それ花の名どころ多ーといへども。大悲のひかり色そふ故か。この寺の地主の櫻に若くはなし。さればにや大慈大悲の春

大悲の光。守内に社あり。觀音の垂迹を救ふ大慈悲を云ふ。

大慈大悲の春の花　この大慈悲の萬物を榮ねしむるを春にたとへて春の花さは續けたり。

十惡の里　十惡は殺生。偸盜。邪淫。妄語。綺語。惡口。兩舌。貪欲。瞋恚。愚癡。これら罪を犯したる里をも觀音は助け給ふさいふ。春の花の香りわたるに譬へたり。

三十三身の秋の月　三十三身は觀音の身を三十三種に現ずるを云ふ。其光の明なるを秋の月にたとへて春の花の對句さす。

五濁の水にる五濁さ云ふ。うの濁れる水にも濁らで月影のすむを觀音の德に譬へたり。

千早振　神の枕詞。

八重一重一重げに九重の　花の八重櫻もあるを云ひて。九重の都さ櫛けたるがあやなり。

山々に同じ。今が花の時節ぞと見ゆるの意。

玉椿　玉をもて飾れる椿を云ふ。木にてこゝはた椿をほむる詞。

花守　花の番人を云ふ。

みやつこ　拾遺集の歌に「殿もりの伴のみやつこ心あらば此春ばかり朝ざよめすな」とある心を取りて云へり。延喜の御時南殿に散り積みたる花を見て公忠朝臣のよめるなれば。其落花を拂ふ役のみやつこと申しても然らんかとなり。みやつこは御奴に

の花。十惡の里よかうぼーく。三十三身の秋の月。五濁の水よ影きよー。詞「千早振。神の御庭の雪なれや。白妙よ。雲も霞もうづもれて。いづれ櫻の梢ぞと。見ねたせば八重ひとへ。げよ九重の春の空。四方の山なみれのづから。時ぞと見ゆる氣色かな。

ワキ詞「いかよ是なる人よ尋ね申すべきことの候ふ。シテ詞「こなたの事よて候ふか何事よて候ふぞ。ワキ「見申せばうつくーき玉簪をもち。木陰をきよめ給ひ候ふは。若ー花守よて御入り候ふか。シテ「さん候ふ是はこの地主權現よ仕へ申す者なり。いつも花の頃は木陰を清め候ふほどよ。花守とや申さん。又みやつことや申すべき。いづれよよーある者と御らん候へ。ワキ「げにげによよーありげよ見えて候ふ。先々當寺の御來歷。くはーく語り給ふべー。シテ「そも〳〵當寺清水寺と申すは。大同二年の御草

て禁庭の掃除とつかさごる役。大同二年の御草創。草創ははじめて大略に造るの意。高市郡にあり。

子島寺　法師に同ト。

沙門　正身の觀世音のおん姿さいふに同ト。

こつがは　今木津川といふ川なり。山城相樂郡にあり。

いつば　いふはに同ト。

檀那　梵語なり施主と譯す。財を施す意にて田村丸をさす。

伽藍　精舍と譯す。寺の事なり。

今もろの云々　今も名高きさいふべきと名に流れたるさして流れの緑より浩水と凸し水の緑にて深きさつゞけたり。野は觀音の衆生と救はんさの誓約あると云ふ。千手は千手觀音さて自在力をあらはしたる形。手せいふより取りんへと續く。うれしく樂にさいふ位の意。安樂世界は極樂の事。娑婆は此世界の事。示現はあらはるゝに同ト。我等と救ふ爲にあらはれ給へるなれば仰ぐべしさは今更いふもおろか愚なりさの意には非ず。仰ぐは

創。坂上の田村丸の御願なり。昔大和の國子島寺といふ所に。賢心といへる沙門。正身の觀世音を拜まんと誓ひしに。ある時こつゞはの川上より金色の光さしを。尋ね登つて見れば一人の老翁あり。かの翁かたつていはく。我は是れ行叡居士といへり。汝一人の檀那をまち。大伽藍を建立すべしとて。東をさしてと又檀那をまてとありしは。是れ坂の上の田村丸。他「今もその。名よ流れたる清水の。深き誓ひの數々よ。千手の御手のとりどりたるは皆名所よてぞ候ふらん御教へ候へ。シテ詞「さん候ふみな影ぞありがたき。げよや安樂世界より。今この娑婆に示現して。我らが爲の觀世音。あふぐも愚なるべしや。

ツキ詞「近頃れもーろき人よ參りあひて候ふ物かな。又みえわたりたるは皆名所よてぞ候ふらん御教へ候へ。シテ詞「さん候ふみな

塔婆　佛骨と埋む所と塔婆と名つくと佛處にあれば。ここは高倉天皇の陵とさすならん。陵は清閑寺本堂の北にあり。

上見ぬ鷲の尾の寺　上見ぬは鷲の序なり。鷲は虚空に高くのぼりつゞめて我上に見る處なければ云ふ。鷲の尾の寺は靈山寺さいひしがありし。これならんさ古說に云へり。

や御覽候へ　いさゝ惜しけれ　やは驚きの壁。衆色の好きためにの時と惜しむ心。

春雪一刻云々　蘇東坡の詩に春宵一刻値千金。花有二清香一月有レ陰さ云へり。

夜嵐にさうはるゝ花さ共に心もうかれて散るならんさなり。

さやうに花さいふ名にしおふ　さぞな名にしおはゞ持ちたるの意。

時めく粧ひ　時めくは時に合うて榮ゆると云ひ。粧ひは景色の美しきと云ふ。

青楊に同ト。　音羽の音に云ひ掛く。

名所よて候ふ。つて塔婆のみえて候ふは。御尋ね候へ教へ申し候ふべし。ツキ「まづ南よ當る月のかゝやきて。この地主の櫻にうつる景色。まづ〳〵これこそ御覽じごとなれ。ツキ「げよ〳〵是こそいとま惜しけれ。こと心なき春の一時。シテ「げにをしむべしや。ツキ「をしむべしや。シテツキ「春雪一刻價千金。花に清香月に陰。シテ「げよ千金よもかへじとはいま此時かや。地「あら〳〵面白の地主の花の景色やな。櫻の木のまにもる月の。雪もふる夜嵐の。さそふ花とつれて。ちるや心なるらん。シテ「さそな名にしおふ。花の都の春の空。げに時めける粧ひ。青楊の陰みどりにて。風のどかなる。音羽の瀧

白糸のくりかへしの序。糸はたゞ細めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらんかぎりは古今集に出でし「清水観音の御歌となんいひつたへたる」と見ゆ。初句はなほたのめさもあり。意はわれ世の中にありて救はんかぎりはひたすら我を頼めとなり。しめぢが原は下総にてさしも草の産地。さしも草は蓬なれば恩ひ取らずもたゞ頼めとの示現なるべしと古註に云へり。

にとらすとものと　云ひて清水

枯れたる木なりとも　枯木も観音の慈悲にあへば花咲くと云ふを枠に掛けたり。

たしなべて　総じてに同じ。

のごとき影は　有ると云ふを有明に掛く。

天も花に酔へりや　天までも花春べのみいふに同じ。

いさや　知らずといふ時につかふ。

白雪の踏みつけたる跡の意なり。

跡と惜しまば　わが立ち去る跡を惜しみ給はゞの意。

蘆垣の　蘆にて作りたる垣は透間の密なるとて間近きに掛けて序とす。

道近のたづきも知らぬ山中にたほつかなくも（呼子鳥かな）　古今集の歌なり。たづきはたよりに同じ。たほつかなくもは不安心にもの意。

坂の上の　下らすして坂の上なるとを云ふ意と含む。

田村堂　清水寺の内にあり。

月のむら戸　むら戸は編み戸の事とも云ひ。妻戸のあきたるを云ふとも説けり。今つまびらかならず。月のむら〳〵と軒より洩り来ると云ひ掛けたり。

内陣に居て　社寺の奥殿を云ふ。

影に居て　ばゞ訓するの句に掛かる。

花も妙なる法の場　妙法華と云ふ文字と隠して用ひたり。妙法華は経文の名。

遅ほね月の　経文読誦の力にて迷の暗るゝを月に譬へて夜につづけたり。

終夜に同じ。

清水寺の瀧つ波　一河の流れの序。

一河の流れと汲んで　同じ河の流れを汲むも離れぬ他人の縁ぞと云ふ事あれば。うの縁ある旅人になり。

観音擁護の結縁たり　旅人の護経する事がすなはち観音の護り給ふ縁の成就ぞとなり。

人皇　神武天皇以来の天皇と云ふ。

御字　御代に同じ。

宣旨　天皇のおほせ。

けり。内陣に入らせ給ひけり。

ツキ歌「夜もすがら。ちるや櫻の影ょ居て。花も妙なる法の場。迷はぬ月の夜とともょ。此御經を讀誦する。

後シテ「あら有難の御經やな。清水寺の瀧つ波。まこと一河の流れを汲んで。他生の縁ある旅人に。言葉をかはす夜聲の讀誦。これぞすなはち大慈大悲の。觀音擁護の結緣たり。

ツキ「ふーさやかなる花の光ょかゝやきて。男体の人の見え給ふは。いかなる人よてまーますぞ。シテ「今は何をかつゝむべき。人皇五十一代。平城天皇の御宇ょ有りー。坂の上の田村丸。東夷を平げ惡魔をーづめ。天下泰平の忠勤たりーも。すなはち當寺の佛力なり。地サシ「然るょ君の宣旨ょは勢州鈴鹿の惡魔をーづめ。都鄙安全ょなすべーとの。仰せによつて軍兵をとゝのへ。すでょ趣く時節に至りて。此觀音の佛前ょ參り。祈念をいたーし立願せ

瑞験　歓喜微笑　めでたきしるし。よろこびて少しゑむの意。微笑の瑞験あらたなれば。地「歓喜微笑の瑞験あらたなれば。
の意。親音の霊験に見ねたる悲の笑顔を頼む意なるべし。
悩徒　鈴鹿の悪鬼を云ふ。
普天の下　詩経に普天之下莫レ非二王土一。卒土之浜莫レ非二王臣一と云ふと取れり。天下海内すべての意。
やがて　やがては間の戸さゝずの句に掛かる。直に間の意。名にしおふ逢坂の関と云ひかけたる故
浦波の　枕詞。粟津の森のかげろふの陰ろふと云ひかけて受けたり。
これも清水の一佛と　同下観音さきかけんと云へば。花のみならず弓馬の道もさきかけんと云へばなり。
あらかれの　土の枕詞。上よりはたけき心は有らさ掛かる。
ますらを　大丈夫と云へど。こは鹿を捕る猟師の事。
待つとはしらで　鹿の来るを待ち居るとは知らずしてにて。猟師を田村丸にたとへ。鹿を悪覚にたとふ。
さとしかの　牡鹿と云ふ。鈴鹿の字に懸れたり。
すゞかの御厩　むかし鈴鹿の伊勢に下り給ふ時。鈴鹿に仮宮を設くる事ありと云へば。みうぎも其時の式ならん。みうぎさは

テ「不思議の瑞験あらたなれば。地「歓喜微笑の瑞験あらたなれば。
んで。急ぎ凶徒にうつたちけり。クセ「普天の下。卒土の内。い
づく王地にあらざるや。やがて名にしおふ。関の戸さゝて逢坂
の。山をこゆれば浦波の。粟津の森やかげろふの。石山寺をふ
ーをがみ。是も清水の一佛と。頼みはあひに近江路や。勢田の
長橋ふみならし。駒も足なみやいさむらん。シテ「すでに伊勢路
の山ちかく。地「弓馬の道もさきかけんと。勝つ色みせたる梅が
枝の。花も紅葉も色めきて。たけき心はあらかねの。土も木も
わが大君の神國に。もとより観音の御誓ひ。佛力といひ神力も。
猶かずくにまそらをが。待つとはあらでさをーかの。鈴鹿の
みそぎせーせ世々までも。思へば佳例なるべし。
地「さるほどよ山河を動かす鬼神の聲。天にひゞき地にみちて。
萬木青山動揺せり。シテ詞「いかに鬼神もたーかにきけ。昔もさ

河水にて身を清むると云ふ。
千方　天智天皇の時の反臣。
あのく松原　鈴鹿より六里東にあり。松原の村立つを鬼神の群集するに云ひかけて序とす。
身を変じて　異術にて一身を数千騎に変ずると云ふ。
大悲の弓　大悲もて悪覚を降伏するを弓に譬ふ。これも同じく観音の大智悪の矢に譬ふ。
呪咀云々　法華経の普門品に曰く。呪咀諸毒薬。念彼観音力。還着於本人と。此私は人とのろひ又毒薬もて害せんとする者ありとも。其人の観音の力に新念せば。其禍は還つて本人に及ぶべしとなり。於本人の下の文字は本人といふ二字より受けて本人なる敵はといふ意につゞかせたり。

るため〳〵あり。千方といひ〳〵逆臣と仕へ〳〵鬼も。王位をそむく天
罰にて。千方をすつれば忽ち亡びうせーぞかー。まーてやまち
かき鈴鹿山。地「ふりさけ見れば伊勢の海。あの〳〵松原むらだち
来つて。鬼神は。黒雲鐵火をふらーつ〳〵。數千騎に身を變じて。
山の如くに見えたる所に。シテ「あれをみよ不思議やな。地「あれを
見よ不思議やな。味方の軍兵の旗の上に。千手観音の。光をはなつ
て虚空に飛行ー。千の御手ごと〳〵。大悲の弓〳〵は智恵の矢をは
めて。一度はなせば千の矢先。雨霰とふりかゝつて　鬼神の上
に亂れかゝれば。こと〴〵く矢先〳〵かゝつて。鬼神は殘らず討
たれにけり。ありがたーゝや。誠に咒咀諸毒薬念彼。観音の
力をあはせて。すなはち還着於本人の。かたきは亡びにけりこ
れ観音の佛力なり。

東北 とうほく

古名 軒端梅 元清作

ワキ次第「年立ちかへる春なれや。花の都へ急がん。詞「これは東國方より出でたる僧にて候ふ。我いまだ都を見ず候ふほどに。此春れもひたち都にのぼり候ふ。道行「春立つや。霞の關を今朝越えて。はてはありけり武藏野を。分け暮らしつゝ跡とほき。山また山の雲を經て。都の空も近づくや。旅までのどけかるらん。詞「急ぎ候ふ程に。是ハはや都へ着きて候ふ。又これなる梅を見候へば。今を盛と見えて候ふ。いかさま名のなき事は候ふまじ。此あたりの人に尋ねばやと思ひ候ふ。狂言「シカ〳〵。ワキ詞「さては此梅は和泉式部と申し候ふかや。暫くながめばやと思ひ候ふ。

シテ詞「のう〳〵あれなる御僧 其梅を人に御尋ね候へば。何と教へ參らせて候ふぞ。ワキ詞「さん候ふ人に尋ねて候へば。和泉式部とこそ教へ候ひつれ。シテ「いやさやうにはいふべからず。梅の名は好文木。又は鶯宿梅などゝこそ申すべけれ。知らぬ人の申せばとて用ひ給ふべからず。此寺いまだ上東門院の御時。和泉式部此梅を植ゑれき。軒端の梅と名づけつゝ。目がれせずながめ給ひしとなり。かほどに妙なる花の縁に。御經をも讀誦し給はゞ。逆縁の御利益ともなるべきなり。是こそ和泉式部の植ゑ給ひし軒端の梅にて候へ。ワキ「さては和泉式部の植ゑ給ひし軒端の梅にて候ふかや。又あの方丈は。和泉式部の御休所よ。シテ「中々の事和泉式部のふしどなりしを。作りもかへず其まゝにて。今は絶えせぬ詠めぞかし。ワキ「ふしさや扨は古への。名を殘しくれく形見とて。シテ「花も主を慕ふかと。年々色香もいやまさる。ワキ「さもみやびたる御氣色。シテ「猶もむかし

前シテ 女
後シテ 和泉式部
ワキ 僧
ワキツレ 京都

東北院の名木につきて和泉式部の古へを語る事と作れり。梅の故事なれば。初春の謡初式にも德川兵はこれと用ひたり。

霞の關 武藏なり。東京に霞が關とて今もある處。春立つやさは霞と云ふ文字につきて云ひかけたるなり。

はてはありけり 新古今集に「武藏野や行けども秋の果ぞなき」とよめるに依りてさしもに廣き武藏野も行けば果ありてつひに都にも着きぬと云へるなり。

好文木 習の哀帝梅を讃めしより此號ありて梅の花四時に咲けりし故事に依り。文學すきの木なりとて好文木と名づけしと云ふ。

鶯宿梅 紀貫之のむすめの家に紅梅のありしを内裏より堀りにつかはされしに。鶯の巢ぐひ居たりしかば「勅なればいかゞ答へん」とよみ奉りしにより其事止みぬと云ふ。事拾遺集大鏡などに見ゆ。後この梅を鶯宿梅と名づけしと云ふ。

上東門院 一條天皇の皇后。東北院は其御建立なり。目ヾ離さでの意。

めがれせず 卒都婆小町に云ふべし。

方丈 層の住む家。もと一丈四方に作るべき物なれば云ふ。

みやびたる 宮中めきたるさま云ふ意にて常に優美風雅なる事を云ふ。

天ぎる雪 空も烟るほどに降り來る雪。

古今集に「梅の花うれしき春のしるしとてもとめて折れば袖ぞにほへる」とあるを取りてなべて折れば袖ぞにほふ」なべてには總べての意。

古今集の歌に「月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとりはもとの身にして」

して」とあるを取る。意は。月は昔の月ならぬか春は昔の春ならぬかと見るに月も昔と変はる事なし。さて我身はさかへりみれば我身はもとの身にしてふれも昔さかはらぬに。去年ありし女の無きのみがかなしきさを含めたるなり。

知らずと云ふ意に用ふる詞。

古目と同ほんと云ふ意と和泉式部の古事に掛けて云ふ。

道芝の道に生ひたる芝と云ふ。狭衣の歌に「尋ぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はましとあるを取りて露の世に頼りたり。露の世とは露の如くはかなき意にて此現世を云ふ。今は世になき我なれど此花に住みて有るぞとなり。

さぶさ 木の梢と云ふ。

花と鳥と。

同ト道に 「花は根に鳥は古巣に帰るなり」と云ふ古歌もあれば我も花鳥と同ト道にいざ踏らんとなり。

先だつあさか 我は先だちて歌り花はあさに散り残ると云ふ。

夜もすがら 此一章田村に同ト。

譬喩品 法華経の巻の名。第二番目なり。

閻浮 此世界と云ふ。

御堂の関白 藤原道長と云ふ。上東門院の御父。

門の外 歌の意は。門外と通る車の音と聞けば我も共に法の車に乗りて火宅と出でたる心地すとなり。火宅は人間界の事。譬喩品の文句を引きて其譬喩の功徳を述ぶるを主とす。法の車下に出づ。

歌舞の菩薩 音楽をする菩薩と云ふ。式部がよみおく歌と和歌の事にかけて云ふ。

三界無安の 譬喩品に三界無レ安猶如二火宅一。衆苦充満甚可レ怖畏一と云ふ文あり。三界とは欲界色界無色界と三つの世界に別けて云ふ仏説。すなはち此世の事。かくあぶなき世界と去りて仏の園に行きたると云ふ。

三つの車に 羊車鹿車牛車と云ふ。

成等正覚 成長者の家に火事いで来たれば早くにげよと子供に云へども。はかなき遊に心を染めて出でんともせざれば。長者は方便もて。さらば羊鹿牛車を作りて與ふべしと云へば。うれしく心ひかれてやう〳〵此火宅と出でたりき。仏の如き此世の苦しみを救ひ出だすと云ふなり。法の車とは此三の車をさして云ふ。迷を去りて悟に就く事。

たま〳〵後世に 古今集の序にあり。歌人の名と後世に残す事を云ふ。

天地と動かし 鬼神を感ぜしむるこわざ。これも同ト序に見る詞。ことわざは事業と云ふ事。詮にはあらず。

冥感に至る 冥感は神仏の感ずると云ふ。すなはち神明仏陀を感ぜしむるに至るの意。

時ある花の部 時と得て栄ゆるーを。ワキ「思ふかと。地「年月を。経古き軒端の梅の花。あるじを知れば久方の。天さる雪のなべて世よ。聞えたる名残かや。和泉式部の花ごよろ。

ロンギ地「げよや古へを。聞くよつけても思ひでの。春や昔の春なら奴。我身ひとりぞ心なき。シヤ「ひとりとも。いさ白雪の古言を。誰よ問はま〳〵道芝の。露の世よなけれども。此花に住むものを。地「そも此花よ住むぞとは。シテ「同じ道よと歸るさの。すらふと見〳〵まよに。我こう花の主よと。夕ぐれなゐの花の陰よ。木がくれて見えざりき。木がくれて見えずなりよけり。

ワキ歌「夜もすがら。軒端の梅の陰に居て。花も妙なる法の道。迷は奴月の夜と共に。此御経を讀誦する。

後シテ「あらありがたの御経やな。あらありがたの御経やな。唯今讀誦〳〵給ふは譬喩品よのう。思ひ出でたり閻浮のありさま。此寺いまだ上東門院の御時。御堂の関白この門前を通り給ひ〳〵が。御車の内よて法華経の譬喩品を高らかよ讀み給ひ〳〵を。式部これの門の内にて聞き。門の外法の車の音きけば。我も火宅を出でよけるかなと。ワキ詞「げよ〳〵此歌は。和泉式部の詠歌ぞと。田舎までも聞き及び〳〵なり。扨は詠歌の心の如く。火宅をばはや出で給へりや。シテ「中々の事火宅は出でぬさりなおら。よみおく歌舞の菩薩と爲りて。ワキ「なほ此寺よ澄む月の。シテ「出づるは火宅。ワキ「いまぞ乗シテ「すてよ。地「三界無安の内を去りて。三つの車よ法の道。すはや火宅の門を今ぞ。和泉式部は成等正覚を得るぞ有り難き。

地クリ「それ和歌といやば。発心説法の妙文たり。たま〳〵後世よ

王城　内裏の事。これより東北院の風景を述ぶ。

東北の方角には靈鷲の住む鬼門を此寺が其役し入るべき門に當りて守るの意。姫路を見るべし。

靈水　靈鷲と雲に譬へて靈水と雲水とを呼び起す。雲水の身と掛けて水の字を取れたり。

常樂の縁　風聲水音の食慾を離れてあればと法文の樂しみと云ふ。

鳥宿池中樹。僧敲月下門　唐の賈島の詩。この門の字より出でて入るか字と呼び起す。

見佛聞法の供々　佛と見たり法文を聞いたりする數々の意。

順逆の縁　卒都婆小町にあり。

九夏三伏　夏九十日を云ふ。夏至と云ふ節の後。第三の庚の日を初伏と云ひ。第四の庚を中伏とし。立秋の後第一の庚を末伏とす。此三つの庚の日なりとて之と三伏と稱ふ。

泗底の松の風　谷の底の松風が秋の聲と做して空に吹きのぼるを云ふ。これは次の上求菩提の聲。

上求菩提の機と見せ　菩提はさとりを得る事。上に菩提を求むべき機會は今ぞと松風が其儘を示すの意。

遇水にうつる月影は　次の下化衆生の相を得たり　下には衆生を化して善道に趣かしむる有樣を。月が低き水に映じて例と見せたりとの意。北は陰なれば云ふ。東は陽。北は陰なれば陰なれば。又のぼるは陽くだるは陰なれば。前の上求下化の句と受けて。其志を述すべき時節も春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ古今集の歌。意は。春の闇はわけのわからぬものかな。梅の花の色とばかくすとすれど。香までかくす事のかなはぬ物なれや。かくさればものならば色だけかくしてもの意。

げにや色にうみ字を受けて云ふ。意とば受けたり。

遠近人にまで昔を戀ふる心を語るも恥かしの意。近の字は輕く見るべし。

踊るぞとて　入ると見にしの句につゞく。

火宅とや猶　燈の緑に火宅の文字を出だす。人は方丈のさもしこそ即ち花の蕊よとなり。

花の蕊　梅の花を極樂の蓮盤の事にかけて云ふ。蕊に出づるとは火宅を出でゝ蕊に入るの意。

白拍子　前シテ　後シテ　ワキ　ツレ　能力　狂言　道成寺の門同　能力　紀伊　道成寺の鐘に恨ありのこしたる女。ちかきあたりの白拍子とあらはれて供養に詣で。舞をまうて見ばやとて當國の眠れる間に鐘魔

知らるゝ者はたゞ。和歌の友なりと。貫之もこれを書きたるなり。シテサシ「かるが故ゝ天地を動かし鬼神を感ぜしむることわさ。地「神明佛陀の冥感ゝ至る。殊ゝ時ある花の都。雲井の春の空までも。のどけき心を種とゝて。天道ゝかなふ詠吟たり。クセ「所は九重の。東北の靈地ゝて。王城の鬼門を守りつゝ。惡魔を拂ふ雲水の。水上は山陰の鴨河や。すゑ白河の波風も。いさゝよき響きは。常樂の緣をなすとかや。庭にいけ池水をたゝへつゝ。鳥は宿す池中の樹。僧は敲く月下の門。出で入る人跡かずゝ〳〵の。泗底の松の風。谷の底の松風が秋の聲と做して空に吹きのぼるを云ふ。これは次の上求菩提の聲。

上求菩提の機と見せ　菩提はさとりを得る事。上に菩提を求むべき機會は今ぞと松風が其儘を示すの意。

遇水にうつる月影は　次の下化衆生の相を得たり　下には衆生を化して善道に趣かしむる有樣を。月が低き水に映じて例と見せたりとの意。北は陰なれば云ふ。東は陽。北は陰なれば陰なれば。又のぼるは陽くだるは陰なれば。前の上求下化の句と受けて。其志を述すべき時節も春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ古今集の歌。意は。春の闇はわけのわからぬものかな。梅の花の色とばかくすとすれど。香までかくす事のかなはぬ物なれや。かくさればものならば色だけかくしてもの意。

げにや色にうみ字を受けて云ふ。意とば受けたり。

遠近人にまで昔を戀ふる心を語るも恥かしの意。近の字は輕く見るべし。

踊るぞとて　入ると見にしの句につゞく。

火宅とや猶　燈の緑に火宅の文字を出だす。人は方丈のさもしこそ即ち花の蕊よとなり。

花の蕊　梅の花を極樂の蓮盤の事にかけて云ふ。蕊に出づるとは火宅を出でゝ蕊に入るの意。

白拍子　前シテ　後シテ　ワキ　ツレ　能力　狂言　道成寺の門同　能力　紀伊　道成寺の鐘に恨ありのこしたる女。ちかきあたりの白拍子とあらはれて供養に詣で。舞をまうて見ばやとて當國の眠れる間に鐘魔

ゝと知られたり。シテツカ「春の夜の闇をなやなゝ梅の花。地「色こそ見えね香やかくるゝ。シテ「げゝや色ゝ染み香にめでゝ昔を。地「よゝなや今更に。思ひ出づれば我ながらなつかゝく。戀ゝき涙を遠近人ゝ。浅らさんも恥かゝ。いとま申さん。シテ「これまでぞ花は根に。地「今は是までぞ花は根に。鳥は舊巢に歸るぞとて。方丈のともゝゝ火を。火宅とや猶人は見ん。こゝこそ花の蕊ゝ。和泉式部が〳〵夢はさめてゝ方丈の室に入ると見えゝ。夢はさめてゝ失せにけり。見ふゝどよとて。

道成寺

だうじやうじ

清次作

ワキ詞「是は紀州道成寺の住僧ゝて候ふ。扨も當寺ゝれいてさる子細有つて。久ゝく撞鐘退轉仕りて候ふを。此程再興ゝ鐘を鑄さ

にのぼりて鐘と引きかづきしにしけるが。つひに法力によりて蛇体と顕ㇾ失せける事と作れり。實事と彫にして亡執の執心と残せる事にしたるが能の眞味なり。

撞鐘退轉　撞くのとば撞鐘と云ふ。退轉は中絶の意。供養佛の祭とする事。こゝは鐘の出來たるによりての供養なり。

かれには打つのもあれば

能力　力役する僧の下人。

鐘楸　鐘つき堂と云ふ。

女人禁制　女人の入ると禁ずる事。

白拍子　人に招かれて歌舞すると聞ㇾ業とせる女。

月はほどなく入汐の　道行なり。月の入ると入汐とを娘ぬ。

また暮れぬから日が高はち道成寺の事。　また暮れぬと云ふと寺の名に掛く。すな

とゞませて賜はり候へ　このわざに狂言。女人禁制なれども舞とまうて見せなば内々にて許すべしの意と述ぶ。

遥分の外には　これより舞になる。

道成の廟　傳記詳ならず。

二十二

せて候ふ。今日吉日にて候ふ程ㇾ。かねの供養をいたさばやと存じ候ふ。いかゞ能力。はや鐘をば鐘楼へ上げて有るか。狂言「さん候ふはや鐘楼へ上げて候ふ御覧候へ。ツキ「今日鐘の供養をいたさうずるゾて有るぞ。かまひて一人も入れ候ふな。其分心得候へ。狂言「畏つて候ふ。

シテ次第「つくり〳〵罪も消えぬべし。鐘の供養ㇾ参らん。ツシ「是は此國のかたはらㇾ住む白拍子ㇾて候ふ。詞「扨も道成寺と申す御寺ㇾ。鐘の供養の御入り候ふ由申〳〵候ふ程ㇾ。唯今参らばやと思ひ候ふ。歌「月は程なく入り〳〵ほの。煙みちくる小松原。急ぐ心かまだ暮れねね。日高の寺に着きㇾけり。詞「急ぎ候ふ程ㇾ。日高の寺に着きて候ふ。やがて供養を拝まうずるㇾて候ふ。

伽藍　田村にあり。

山寺の春の夕暮きて見れば入相の鐘に花ぞ散りける　古今集の歌。山寺の春の夕の新古今集の歌。山寺の春の夕のあはれなるまゝとのべたり。

月落烏啼霜滿天。江村漁火對愁眠　唐詩選の詩。但し烏と鳥にかへて用ひたり。江村は通例の本に紅楓とあれどこゝには異本を用ふ。

龍頭　鐘の綱を通す處。

ひきかづきてぞ失せにける　ここに女に拝ませたる山と白狀して鐘の落ちたる事を告ぐる狂言の詞あり。

二十三

狂言「シカ〳〵。シテ「是は此國のかたはらㇾすむ白拍子ㇾて候ふ。鐘の供養にそと舞をまひ候ふべ〳〵。狂言「シカ〳〵。シテ「荒うれ〳〵や涯分舞をまひ候ふべ〳〵。うれ〳〵やさらば舞はんとて。あれㇾまㇾます宮人の。烏帽子をゑばし假に着て。既に拍子をすゝめけり。ツカ「道成の卿承り。始めて伽藍立ㇾ。暮れそめて鐘や響くらん。次第「花の外ㇾは松ばかりの。道なり興行の寺なればとて。道成寺とは名付けたりや。地「山寺のや。シテ「春の夕ぐれきてみれば。地「入相の鐘ㇾ花ぞ散りける。シテ「さるほどㇾ寺々のかね。地「月落ち烏鳴いて霜雪天ㇾ。みちしほほどなくひたかの寺の。江村の漁火愁ㇾ對〳〵て。人々眠ればよき障ぞと。立ち舞ふ様ㇾてねらひよりて。つかんとせ〳〵が。思へば此鐘恨めゝやとて。龍頭ㇾ手をかけ飛ぶとぞみえ〳〵。ひきかづきてぞ失せㇾける。

曲事　罪すべき事その意。
皆々かうわたり候へ　主個の他の個に云ふ岡。

まなごの庄司　まなごは愛子の意なれば我子を甚だ愛するに依て此名を得たるならん。
奥より　陸奥よりの意。

狂言「シカ〳〵ワキ詞「言語同断。かやうの義を存じてこそ。固く女人禁制のよ〳〵申〳〵て候ふに。曲事ぢて有るぞ。のう〳〵皆々かう渡り候へ。此鐘ぢ付て女人禁制と申〳つるいはれの候ふを御存じ候ふか。ッレ「いや何とも存ぜず候ふ。ワキ「さらば其謂を語つて聞かせ申〳候ふべ〳。ッレ「懇ぢ御物語り候へ。ワキ「むか〳此所ぢ。まなごの庄司と云ふ者あり。彼者一人の息女をもつ。又其頃奥より熊野へ参詣する山伏の有り〳が。庄司がもとを宿坊と定め。いつも彼所ぢきたりぬ。庄司娘を寵愛の餘りに。あの客僧こそ汝がつまよ夫よなんどゝ戯れ〳を。をさな心に誠とれもひ年月を送る。又或とき彼客僧庄司がもとに來り〳に。彼女夜更け人〳づまつて後。客僧の閨にゆき。いつまでわらはをばかくて置き給ふぞ。急さむかへ給へと申〳ぢかば。客僧大きにさわぎ。さあらぬよ〳ぢもてなし。夜ぢまされ忍びいで此寺ぢきたり。

日高川　寺に近き川の名。

山伏とさりとはんぬ　殺しとはれりに同ど。
なんぼう恐しき　なんと恐しきに同ど。

水へつて　鐘の焼げたる爲に水も却つて干ると云ふを日高に眞砂の數は小さき石と云ふ。川原にある小石の數はかぞへてもかぞへつくされねば法力の盛きぬに喩ふ。

ひらぢ頼むよ〳申〳〵かば。隱すべき所なければ。つき鐘をれとて追つかくる。此客僧を隱〳れく。扨彼女は山伏を。のがすまじ上〳もをかなたこなたへはし〳りまはり〳ぐ。一念の毒蛇と爲つて。河を易々とおよぎこ〳此てらにきたり。こゝかし〳てを尋ねしが。鐘のれりたるをあや〳め。龍頭をくはへ七まとひ纏ひ。焔を出だし〳尾を以てたゝけば。鐘はすなはち湯となつて山伏をとりをはんぬ。なんぼう恐〳き物がたりにて候ふぞ。ッレ「言語同斷。かゝる恐〳きれん物語こそ候はね。ワキ「其時の女の執心殘つて。また此鐘ぢ障碍をなすと存じ候ふ。我人の行功も。かやうのためにてこそ候へ。涯分祈つて此鐘を二度鐘樓へ上げうずるにて候ふ。ッレ「尤〳かるべう候ふ。

ワキ「水かへつて日高川原の眞砂のかずはつくるとも。行者の法

東方に降三世明王　以下南西北中の明王と併せて五大明王と云ふ。悪霊悪鬼などを降伏する時に祈る本尊。

うごかうごかのか　不動と云ふ文字より此聞を出だして鐘の動不動と云ふ。

さつく　案の字。なはなり。不動明王は悪鬼を縛らん爲になはを持てり。

なまくさまんだ　以下祈の詞。

何のうらみか　何の恨もあるまじの意。

もつとも有明に掛く。有明の月をつきがねに云ひかく。

すはく　てんでに手毎になり。此手の字より千手といだす。千手観音の陀羅尼なり。陀羅尼は梵語にて神呪と云ふ。

てんでに　千手の陀羅尼なり。陀羅尼は梵語にて神呪と云ふ。

りやく　りやくの意。

慈救の偈文　慈悲もて救ふ爲の偈文。偈文とは佛徳を賛する詩の如きもの。すなはち上の悪鬼三曼陀をさす。

明王の火焔の　不動明王の背負ひたる火焔と黒烟にかけて云ふ。黒烟を立つるさは頭より烟と立つるほど精神こらして祈る意。

護請東方　以下は有らゆる龍王に祈る詞。

恒沙の龍王　天竺に恒河と云ふ河あり。その河の沙の意。數の多き形容に用ふ。無數の龍王の意。

哀愍納受　すべての龍王わが祈とあはれみうけ給への意。

とぎんのみざん　自謹はみづからつゝしむ事。みざんは時節に同じ。同音を重ねてあやまて。

本坊　わが住む僧坊を云ふ。

シテ　皇帝
ツキ　唐土大臣

これは鰐鼈と長壽の動物とて勅儀の材料に用ふる習慣あるによりたる火焔と黒烟にかけて作れるなり。例と唐土に假りて作れるなり。龍の眞味は專ら佛法くさきものに在れば。說言などには目も起れるなるべし。

青陽節會　春の異名。

定時に行はるゝ朝廷の儀式。

てうの儀式　てうの儀式はじめを不老門にてせらるゝさなり。

踵とつゐで　踵はかくとの事。足と足とを相接して群集すると云ふ。

拝をすくむる萬戸の聲　萬戸は萬民の家。こゝは萬人の意に用ふ。拝禮を進むる萬人の聲はさなり。

寝の妙　これより禁庭の壯麗なるを述べてつひに靈龜を出だす。

玉を敷くと云ふも敷妙の妙は織物の名なれば敷物の意。

カつくべきかと。ツレ「みな一同に聲をあげ。ツキ「東方より降三世明王。ツレ「南方に軍荼利夜叉明王。ツキ「西方に大威徳明王。ツレ「北方より金剛夜叉明王。ツキ「中央より大日大聖不動。地「うごくかうごかぬかさつくの。

曼謨三曼多嚩日羅赧。旋多摩訶嚕遮那娑婆多耶吽多羅吒干焰。聽我說者得大智慧。知我身者即身成佛と。

ツキ「何のうらみかあり明の。月

つきがねは〳〵動くぞ祈れたゞ。ひけやてんでより千手の陀羅尼の慈救の偈。明王の火焔の。黒烟を立てくぞ祈りけるとぞみえし。程なく鐘楼に引きあげたり。あれみよ蛇体は顯はれたり。地「謹請東方青龍清淨。謹請西方白体白龍。謹請中央黄体黄龍。一大三千大千世界の。恒沙の龍王あいみん納受。哀愍自謹のみざんなれば。いづくに大蛇のあるべきぞと。祈りいのられかつぱとまろぶが。又れきあがつて忽に。かねより向つてつく息は。猛火と爲つてうの身をやく。日高の川浪深淵より。飛んでぞ入りけける。

鶴龜　つるかめ　一名　月宮殿　作者未詳

シテサシ「夫青陽の春となれば。四季の節會の事はじめ。地「不老門にて日月の。ひかりを天子の叡覽にて。シテ「百官卿相より至るまで。袖をつらねつゐで。地「其數一億百余人。シテ「拝をすゝむる萬戸の聲。地「一同に拝する其音は。シテ「天に響きて。地「れひたく〳〵。庭の砂は金銀の。玉をつらねて敷妙の。五百重の錦や瑠璃の扉。硨磲の行桁瑪瑙の橋。池の汀の鴛鴦は。蓬萊山もよそならず。君のめぐみぞ有り難き。

五百重の錦　錦を重ねたると云ふ。

瑠璃の硯　瑠璃も玉作れる硯。

次の碑碣も瑪瑙も貴石の類。

行き渡せる桁の意。ここは橋桁と云ふ。

瑠璃の橋　橋より池の汀さゝや蓬萊山　仙人の住む山。

何とひかまし　例に引くと云ふと小松に掛けたり。正月子の日に小松と引きて祝ふ事あればなり。

姫小松　小さき女松と云ふ。緑の字を呼び出だして鶴につづけたり。

丹頂の鶴　頭の上の赤き鶴。

秋は時雨の　秋の色々うつくしき形容。羽袖と云ふ詞を紅葉よりぶりに云ひかく。羽袖さは鳥の羽と袖にたとへて云へるより起る詞なり。常に舞の袖に用ふ。

うすむらさきの　衣の濃きに薄きを又むらさきの雲とつゞけたり。

雲の上人　前文の百官廻相と云ふ。

羅羽衣の曲　楽曲の名。楊貴妃にあり。

宮人　供奉の官人。

鴛鴦丁　御輿を昇く人。

長生殿　皇帝の御殿の名。鮮と長生の文字に云ひ掛く。

（ヲ）シテ　老翁

後シテ　實盛

ワキ　僧

ツレ　同前

ハ　越前

實盛

さねもり

元清作

ワキ詞「いかに奏聞申すべき事の候ふ。毎年の嘉例の如く。鶴龜を舞はせられ。其後月宮殿にて舞樂を奏せられうずるにて候ふ。シテ詞「ともかくもはからひ候へ。地「龜は萬年の齡を經。鶴も千代をやかさぬらん。千代のためしの數々に。何をひかまし姫小松の。緑の龜も舞ひ遊べば。丹頂の鶴も一千年の。齡を君に授け奉り。庭上に參向申しければ。君も御感の餘りとや。舞樂を奏して舞ひ給ふ。月宮殿の白衣の袂の。色々妙なる花の袖。秋は時雨の紅葉の羽袖。冬はさえ行く雪の袂を。ひるがへす衣も薄紫の。雲の上人の舞樂の聲々に。霓裳羽衣の曲をなせば。山河草木國土ゆたかなり。千代萬代と舞ひ給へば。官人鴛鴦丁御輿をはやめ。君のよはひも長生殿に。還御なるこうめでたけれ。

佛法を訪かんとて實盛の幽靈を現ず。これとして軍功を語らしむる作意の趣向なり。時宗縁起に。他阿彌上人巡國して實盛の菊跡を過ぎしに。幽魂來つて上人に見ゆ。七日逗留して則時の大念佛を施行せし事見ゆ。これを本として作れるなるべし。

西方極樂の事。

十萬億土　阿彌陀經に從ひ是西方過二十萬億土一有二世界一名曰二極樂一とあり。

遠く生るゝ　極樂遠からず彌陀は已心にあり。十萬億土と云ふ佛語に因る。遠くはあれど彌陀は已が心に在りと說けば。こゝもやがて彌陀の國ぞとなり。

佛事と行ふ場所。

法の場　攝取不捨　忠度に註すべし。

攝取不捨のびしたれかと云ふ。殘るべきは洩るゝべきに同じ。

ひとりなほ佛の御名を尊れ見んにの〳〵かへる法の庭人　古歌。人々は立ち去りたるに獨のこりて佛の御名をなほ尊れ見んとの意。

暫の網　暫と以て調れたると救ふ事の譬。引くも洩るゝも網の縁語。

しる人もしらぬ人をも　誰彼の別なくすべて彼彌陀の國へ法の船に乘せて渡さばやとなり。

笙歌遙聞孤雲上。聖衆來迎落日前。大江定基入寂服綬終時作れる詩。笙歌のめでたう聲くもの上に聞えて夕日の空にも菩薩たちの來り迎ふると云ふ。孤雲は

ワキサシ「それ西方は十萬億土。遠く生るゝ道ながら。こゝも已心の彌陀の國。貴賤群集の稱名の聲。ツレ「日々夜々の法の場。ワキ「殘るべき。二人歌「一人なほ。佛の御名を尋ね見ん。れの〳〵歸る法の場。知るもしらぬも心ひく。誓ひの網にもるべきや。〳〵る人もしらぬ人をも渡さばや。彼國へゆく法の船。浮ぶも安き道とかや。

シテサシ「笙歌遙よきこゆ孤雲の上。聖衆來迎す落日の前。あら尊とや今日も又紫雲の立ちて候ふぞや。詞「鐘の音念佛の聲のきこえ候ふ。さては聽聞も今なるべし。さなきだにたち居くるしきもつかずは法の場ぞ。ようながらもや聽聞せん。老の波の。よりもつかずは法の場ぞ。ようながらもや聽聞せん。老眼の通路一念稱名の聲の内には。攝取の光明くもらねども。老眼の通路なほ以て明かならず。よ〳〵少しはれそくとも。こゝを去る事遠かるまじや。南無阿彌陀佛。

一件の僧。
紫雲の立ちて
棚に立つもの。紫の雲は彌陀の
老の波
高砂に云へり。こゝは
寄るに云ひかく。
一念稱名
念佛に同じ。
こゝと去る事
上に出でたる佛
語に因る。

天ざかる　鄙より空遠ざかる意
にて鄙の枕詞。

百龜の浮木うどんげの
事の喩。目くらの龜が大海に流
るゝ浮木を探りあてる事と。三
千年に一度さくと云ふ優曇華の
花にあふ事と。共に容易ならぬ
を云ふ。其容易ならぬ時節にあ
ひて歡喜たぐひなからぬの意。但し
謂は源氏物語に「うどんげの花
まち得たる心地してみやき櫻に
目こうつられ一さとある歌の如
く取れり。

輪廻妄執の閻浮の名
輪廻は車輪の如く生死のめぐり來ると云
ふ。妄執は執心深くして盡きざ
ると云ふ。閻浮は此世界を云ふ
梵語。こゝろは輪廻妄執の多き
此世界にて呼ばれし姓名を今更
あらためて名のりにくしとな
りと。

觀悔の廻心　罪と覺ち悔いて罪
を思ひつゝしむ心。

ツキ詞「いかに翁。さても毎日の稱名に怠る事なし。されば志の者と見る所よ。れ事の實盛の姿餘人の見る事なし。誰よ向つて何事を申すぞと。皆人不審しあへり。今日はれ事の名をなのり候へ。シテ詞「是は思ひもよらぬ仰せかな。もとより所は天ざかる。鄙人なれば人がましやな。名もあらばこそ名のりもせめ。只上人の御下向。ひとへに彌陀の來迎なれば。かうぞ長生して。此稱名の時節よあふ事。盲龜の浮木うどんげの。花待ちにたる心地して。老の幸身にこえ。悦びの涙たもとよあまる。されば此身ながら。安樂國よ生るゝかと。無比の歡喜をなす所よ。輪廻妄執の閻浮の名を。又あらためてなのらん事。口惜しうこそ候へとよ。ツキ「げにく翁の申す所ことわり至極せりさりながら。ひとつは懺悔の廻心ともなるべし。たゞれ事が名を名のり候へ。シテ「さてはなのらでは叶ひ候ふまじきか。ツキ「中々のこと急い

長井　武藏の長井殿に住みたれ
篠原　加賀の地名。
みやま木の其梢とは見ねざりし櫻
は花にあらはれにけり　閻花集
の歌。

で名のり候へ。シテ「さらば御前なる人をのけられ候へ。近う參りて名のり候ふべし。ツキ「もとより翁の姿餘人の見る事はなけれども。所望ならば人をばのくべし。近うよりて名のり候へ。シテ「昔し長井の齋藤別當實盛は。此篠原の合戰よ討たれぬ。きこしめし及ばれてこう候ふらめ。ツキ「うれは平家の侍。弓取つての名將。其軍物語は無益。唯れ事の名をおのり候へ。シテ「いやされば是こそ其實盛は。此御前なる池水よて髮鬚をも洗はれしとなり。さればその執心殘りたるか。今も此あたりの人にはまぼろしの如く見ゆると申し候ふ。ツキ「さて今も人にみえ候ふか。シテ「みやま木の其梢とはみえざりし。櫻は花よ顯れたる。老木をうれと御覽ぜよ。ツキ「ふしぎやさては實盛の。昔をきゝつる物語。人の上ぞと思ひしよ。身の上なりけるふしぎさよ。さてはれ事は實盛の。其幽靈よてまします。シテ「われ實盛が幽靈

なるが。魂は冥途よありながら。魄は此世よとゞまりて。ワキ「なほ熱心の閻浮の世よ。シテ詞「二百餘歳のほどはふれども。ワキ「浮びもやらで篠原の。シテ「池のあだ波よるとなく。ワキ「ひるともなく別かで心の闇の。シテ「夢ともなく。ワキ「現ともおき。シテ「思ひをのみ。歌「篠原の。草葉の霜の翁さび。地「草葉の霜のれきなさび。人なとがめう假初に。あらはれ出でたる實盛が。名を洩ー給ふなよ。亡き世語も恥かーとて。御前を立ち去りて。行くかとみれば篠原の。池の邊よりて姿は。まぼろーと爲りて失せよけり。

ワキ「いさや別時の稱名にて。彼幽靈を吊はんと。ワキツレ歌「篠原の。池のほとりの法の水。ふかくぞ賴む稱名の。聲すみわたる吊ひの。初夜より後夜に至るまで。心も西へ行く月の。光と共よ曇りなき。鐘をならーて夜もすがら。ワキ「南無阿彌陀佛なむ

魂はめいどにたるたましひ。魂は父より受けたるたましひ。魄はこのよにたるたましひ。

翁さび人なとがめう狩衣　伊勢物語の歌の上の句。めき古びても人とがむなよの意。この狩衣を假初に著下て用よ。

別時の稱名　臨時特別の念佛。

法の水　淨土を洗ふ意にて法を水に喩ふ。

初夜　今の夜八時。

後夜　今の夜二時。

所は不退の同じ。不退は退轉せずに我ふる事なき意。極樂をさす。

命は無量壽佛　命は無量とてはかる事も出來ざる壽なりと云ふを阿彌陀と掛けたり。無量壽佛と云ふ。

念々相續する人は　念佛を常に懈くる人は一念佛毎に一度の往生を得る價値ありとの意。往生は極樂に生ろゝ事。

言二南無一者即是歸命。（中略）言二阿彌陀一者即是其行。以二斯義一故必得二往生一　善導支義と云ふ。

大意の語。大意は南無とは助け給へと云ふ事。阿彌陀とは助くる事と實地に行ひ給ふべき本願の名號。かゝるわけなればうたがひなく往生せらるべしとなり。

甲冑　甲は鎧。冑は兜。

心の濁りの池の　心の濁りたる事あれば云ふ。この池に譬ふる事あれば云ふ。これと又ふかき譬にして苦患に擬けたり。但し詞の上にては池の械とかけたるにや。械は猶よりも水を通す穴。

修羅の苦患　あの世にても修羅道と云ふ所に墮ちて常に合戰をする苦しみ有ると云ふ。

あみだぶ。

後シテ「極樂世界に行きぬれば。長く苦界を越え過さて。輪廻の古郷隔たりぬ。歡喜の心いくばくぞや。所は不退のところ。命は無量壽佛のう。賴もーや念々相續する人は。地「念々ごとよ往生す。シテ「南無といつば。地「即是歸命。シテ「阿彌陀といつば。地「其行此義を以ての故よ。シテ「必往生を得べーとなり。地「あ

くらかちぬ夜の錦の光の爲に暗からぬと云ふ事と夜の錦と云ふ古語あれば云ひかけたり。夜の錦はこゝには必用の錦にあらず。

萌黄にほひ　萌黄の糸もて作れる鎧。

金作の　金もて飾れる太刀。

何か寶の　いろ〳〵の珍重の太刀や鎧も今は何か寶とすべきの意と寶の池に云ひかけたり。寶の池ば觀無量壽經にある詞。

蓮の座　極樂に生るれば蓮華の上に座すると云ふ。

金の色葉多くせば　佛語を多くなどかは玉らざるべきなどかは玉らざるべきの意。

至る事を得べしの意。

一念彌陀佛即滅無量罪　一度あみだ佛と念ずれば即座に無量の罪と滅すと云ふ事。

心中に廻向して極樂に生れん事と願ふと云ふ。

此世に心を殘すなごりとなり。

ざんぎさんげ　身の責と耻ち悔ゆる事。

草の陰　草の陰と陰野に云ひ掛く。陰野は山陰などに爲りたる野と云ふ。

夜なれど　夜なれどと云ふ事と夜の錦とに掛けたり。夜の錦にはこゝには必用の錦にあらず。

萌黄にほひ　萌黄の糸もて作れる鎧。

金作の　金もて飾れる太刀。

何か寶の　いろ〳〵の珍重の太刀や鎧も今は何か寶とすべきの意と寶の池に云ひかけたり。寶の池ば觀無量壽經にある詞。

蓮の座　極樂に生るれば蓮華の上に座すると云ふ。

金の色葉多くせば　佛語を多くなどかは玉らざるべきの意。

至る事を得べしの意。

一念彌陀佛即滅無量罪　一度あみだ佛と念ずれば即座に無量の罪と滅すと云ふ事。

心中に廻向して極樂に生れん事と願ふと云ふ。

此世に心を殘すなごりとなり。

ざんぎさんげ　身の責と耻ち悔ゆる事。

草の陰　草の陰と陰野に云ひ掛く。陰野は山陰などに爲りたる野と云ふ。

なれども。ツキ「其出立も花やかなる。シテ「粧ひことに曇りなき。ツキ「月の光。シテ「ともしひの影。地「闇からぬ。よるのにしきの直垂よ。萌黄よほひの鎧きて。金作の太刀かたな。今の身よてはうれとても。何か寶の池の蓮の。臺こう寶なるべけれ。げにやうたがはぬ。法の教へは朽ちもせぬ。金の言葉多くせば。などころを殘す事なかれ。シテサシ「時至つてこよひあひ難き御法を一念彌陀佛即滅無量罪。地「すなはち廻向發願心。シテ詞「さうけ。地「慚愧懺悔の物語。猶も昔を忘れかねて。忍ぶは似たる篠原の。草の陰野の露ときえしを。有樣かたり申すべし。シテ詞「さても篠原の合戰破れしかば。源氏の方よ手塚の太郎光盛。木曾殿の御前よ參りて申すやう。光盛ぁう奇異の曲者と組んで首取つて候へ。大將かと見れば つゝく勢もなし。又侍かと思へば錦

組ざる風情三新抄聞書。氷消波舊苔屋一曰。謡集の詞。こゝろはあきらかなるべし。

の直垂を着たり。なのれ〳〵と責むれども終よ名のらず。聲は坂東聲よて候ふと申す。木曾殿。天晴長井の齋藤別當實盛よてやあるらん。然らば爪髪の白髪たるべきが。黒きこそ不審なれ。樋口の次郎はみしりたるらんとて召されしかば。樋口參り唯一目みて。あなむざんやな。齋藤別當よて候ひけるぞや。實盛つねに申しよは。六十に餘りて軍をせば。若殿原のあらうひて。先をかけんも大人氣なし。又老武者とて人々よ。あなづられんも口惜しかるべし。ひんひげを墨よ染め。わかやぎ討死すべきよし。常々申しもあへず首を持ち。地「御前を立つてあたりなる。此池波の岸に臨みて。水のみどりも影うつる。柳の糸の枝たれて。歌「氣はれては風新柳の髪を梳り。氷消えては波舊苔の。ひげを洗ひて見れば。墨は流れ落ちて。もとの白髪と爲りにけり。げよ名を

弓取　武士の事。

もみぢ葉と分けつゝ行けば錦着て家に帰ると人や見るらん　後撰集の歌。

朱買臣　前漢の人。窮貧にして會稽の太守と爲れると云ふ。

惜〳〵む弓取は。誰もかくこそあるべけれや。あらやさ〳〵やとて皆感涙をぞ流〳〵ける。ワキ「又實盛が。錦の直垂を着る事。私ならぬ望なり。實盛都をいで〳〵時。宗盛公より申すやう。故郷へは錦を着て歸るといへる本文あり。實盛生國は。越前の者にて候ひ〳〵が。近年御領よつけられて。武藏の長井に居住仕り候ひき。此度北國より。まかり下りて候はゞ。定めて討死仕るべし。老後の思出これにすぎじ。御免あれと望み〳〵かば。赤地の錦の直垂を下〳〵賜はりぬ。ヲテ「然れば古歌にももみぢ葉を。地「分けつゝ行けば錦きて。家に歸ると人や見るらんと。讀み〳〵も此本文の心なり。されば古への朱買臣は。錦の袂を會稽山に飜へし〳〵。今の實盛は名を北國の岐よあげ。かくれなかり〳〵弓取の。名ゐ末代に有明の。月の夜すがら懺悔物語申さん。ロンギ地「げにや懺悔の物語。心の水の底清く。よごりを殘し給ふなよ。シテ「其執心の修羅の道。めぐり〳〵て又こゝよ。木曾と組まんとたくみしを。手塚めよ隔てられし〳〵。無念も今よあり。地「つゞく兵誰々と。名のる中よも先すゝむ。シテ「手塚の太郎光盛。地「郎等は主を討たせじと。ヲテ「かけ隔たりて實盛と。地「押並べて組む所を。シテ「あつぱれよき敵ぞとて。鞍の前輪よ押〳〵つけて。首かき切つて捨てけり。地「其後手塚の太郎。實盛が弓手よまはりて。草摺をたくみあげて。二刀さす所を。むずと組んで二疋があひだよ。どうと落ちけるが。シテ「老武者の悲〳〵さは。地「軍よは爲疲れたり。風にちゞめる枯木の力も折れて。手塚が下よなる所を。郎等は落ちあひて。終よ首をばかきれとされて。篠原の土と爲つて。影も形もなき跡の。かげもかたちも南無阿彌陀佛。吊ひてたび給へ。あとともむらひてたび給へ。

あつぱれよき敵ぞとて　にのれは敵の卽等と指し。日本一の剛の者とは自身と指す。くんでうづよ　くんぢようずよと讀む。古來諸戰ありて或は軍上手よの惡と云ひ。或は組んで落つよの惡と云ひ。或は組んで遁はすべしの惡とも云へご叶へりとも思はれず。これは組んで失すよにて汝は剛の者と組んで討死するこう名譽なれの惡と見るべし。

鞍の前輪　鞍の前に丸く立ちたるしきりの板。

弓手　左の手と云ふ。

草摺　草摺は鎧よりまはりに垂れたる物。

ふりと腰のまはりにたゝみあげて　ふりと云ふ。わが上に落ち重なつての意。

熊野 ゆや

元清作

シテ 熊野
ツレ 朝顔
ワキ 平宗盛
トモ 太刀持
ハ 京都

平宗盛に熊野と云へる愛妾あり。老母の病氣とて遊野は暇と願へど中々ゆるさゝ〳〵けしきもなく。強て花見に伴はれ行きしが。落花の和歌より主人の心にはかに解けて東に歸さゝ〳〵と作れり。心ならずも花見の供する途中。みる物事につけて無常を感ト母を氣づかふさま。讀む人として愛にす落涙せしむ。

夢の間としき　春は好き時節なれば夢の間も惜しきの意。

ワキ詞「是は平の宗盛なり。さても遠江の國池田の宿の長をば熊野と申〳候ふ。久〳〵く都にとゞめおきて候ふが。老母のいたはりとて度々いとまを乞ひ候へども。此春ばかりの花見の友とれもひ留めおきてあらば此方へ申〳候へ。トモ詞「御前に候ふ。ワキ「熊野きたりてあらば此方へ申〳候へ。トモ「畏つて候ふ。

ツレ次第「夢の間をゝき春なれや。咲く頃花を尋ねん。サシ「是は遠江の國池田の宿。長者の御内に仕へ申す。朝顔と申す女にて候ふ。詞「さても熊野ひさ〳〵く都に御入り候ふが。此程老母の御いたはりとて。度々人を御のぼせ候へども。更に御下りもなく候ふほどに。此度は朝顔が御むかへにのぼり候ふ。道行「此程の。旅の衣の日もそひて。いく夕ぐれの宿ならん。夢もかずそふか

草木は雨露のめぐみ。雨露の恩に依りて草木のそだつと云ふ。養得自爲二花父母一　劉詠集の詩。春雨が花を養ひだてゝ其父母と爲ると云ふ。況んや入間にても母の恩は深きものをまして何とかおん入り候ふらんまでは熊野の心中を遠よ。

みうするにて候ふ　見候ふべしに同ト。
あら笑止や　困つた事かなの意。
此ふみとも御目にかけて　袋人に對して云ふ故たん文と御の字を用ひず。

り枕。あか〳〵くらし〳〵て程もなく。都は早く着きにけり。詞「急ぎ候ふ程に。是ハはや都に着きて候ふ。是なる御内が熊野の御入り候ふ所にてありげに候ふ。まづ案内を申さばやと思ひ候ふ。いかに案内申〳候ふ。池田の宿より朝顔が參りて候ふそれ〳〵御申〳候へ。

シテサシ「草木は雨露のめぐみ。養ひえては花の父母たり。況んや人間に於てをや。あら御心もとなや何とか御入り候ふらん。ツレ詞「池田の宿より朝顔がまゐりて候ふ。シテ詞「なに朝顔と申すか。あらめづらしや。さて御いたはりは何と御入りあるぞ。ツレ「以ての外に御入り候ふ。是に御文の候ふ御らん候へ。シテ「あらうれしや先々御ふみをみうずるにて候ふ。あら笑止や。此御ふみのやうも頼みずくなう見にて候ふ。ツレ「左樣に御入りて候ふ。シテ「此上は朝顔をもつれて參り。又此ふみをも御目にかけて。御暇

を申さうずるにてあるぞこなた〳〵來り候〳〵。誰か渡り候ふ。トモ詞「誰〳〵て渡り候ふぞ。や。熊野の御まゐり〳〵て候ふ。シテ「わらはが參りたる由御申〳〵候〳〵。トモ「心得申〳〵候ふ。いかゞ申〳〵上げ候ふ。ゆやの御參り〳〵て候ふ。トモ「畏つて候ふ。候へ。此方〳〵御參り候〳〵。シテ「いかに申〳〵上げ候ふ。老母のいたはり以ての外〳〵候ふとて。此度は朝顏ゆふみをのほせて候ふ。びんなう候〳〵どもうと見參にいれ候ふべ〳〵。ワキ「なゝと故郷よりのふみと候ふや。見るまでもなく〳〵それ〳〵てたからかによみ候へ。シテ「甘泉殿の春の夜の夢。心をくだくはー〳〵となり。驪山宮の秋の夜の月。をはりなきよ〳〵ーもあらばぞ。末世一代教主の如來も。生死の掟をば遁れ給はずと。過ぎよ〳〵二月の頃申〳〵如く。何とやらん此春は。年ふりまさる朽木櫻。ことばかりの花をだよ。

甘泉殿　漢の武帝の寵姬李夫人の住みたる宮。これより文の文句。

心をくだく　甘泉殿の桑花の夢が心をくだく始めぞとなり。覺めたる後に悔ゆべきと云ふ。

驪山宮　唐の玄宗皇帝の寵姬楊貴妃の住みたる宮。

終なきにしもあらず　驪山宮を照す秋の月もつひに光を失ふべき時ありとなり。

びんなう候へども　不都合ながらの意。失禮ながらの意。ちよいと位の意。御覽に同じ。

待ちもやせじと心よわき。老の鶯あふ事も。涙にむせぶばかりなり。たゞ然るべくはよきやうに申〳〵。あばーの御いとまを賜はりて。今一度まみえれはーませ。さなきだに親子は一世のなかなるよ。れなじ世よだにそひ給はずは。孝行よもはづれ給ふべー。唯かへすゞも命の内よいまひと度。見まゐらせたくこそ候へとよ。老いぬればさらぬ別れのありといへば。いよゝゝ見まくほーき君かなと。ふることまでも思ひ出の涙ながら書きとゞむ。地「そも此歌と申すは。在原の業平の。其身は朝よひまなきを。長岡よ住み給ふ。老母のよめる歌なり。さてこそ業平も。さらぬ別れのなくもがなと。千代もといのる子の爲と。よみー事こそあはれなれ。シテ詞「今はかやうよ候へば。御暇を賜はり。東に下り候ふべー。ワキ詞「老母のいたはりはさる事なれどもさりながら。この春ばかりの花見の友。いかでか見すて給ふべき。

末世一代教主の如來と云ふ。末世に出でゝ現世一代と教化する意。この釋迦如來でも生死の規則をばのがるゝ能はず。つひに入滅し給へり。ましてや凡夫のわれらなればいつ死なんも知れぬ命ぞとなり。

朽木の櫻に比す。　老の身をこそしばかりの今年の春だけの花もたぼつかなし。多分其頃とも得待ちたほせとの意。

親子は一世の中　此世だけの縁。

老いぬれば去らぬ別れのありといへば去らぬ別れのありといへばいよゝゝ見まくほしき君かな　古今集の歌。年とれば死別さいふ事のつひにあるべき世なればいよゝゝ子の顏の常に見て居たきとなり。よみたる時のわけは下に云へり。

かきとゞむ　これにて文とぢれり。

朝にひまなき　朝廷の出仕にいとまなきなり。

（世の中に）さらぬわかれのなくもがな千代もと祈る人の子のため　業平の母におくりし返歌。これも古今集。

シテ「御詞をかへせばそれなれども。花は春あらば今より限るべからず。是はあだなる玉の緒の。ながき別れとなりやせん。唯御暇を賜はり候へ。

かなふまじ。いかにも心をなぐさまんと。地「牛飼車よせよとて。是も思ひの家の車の。力なき花見なりけり。

シテ「名も清き。水のまに〳〵とめくれば。地「河は音羽の山櫻。

シテ「東路とても東山。せめて其方のなつかしや。地「春前に雨あつて花の開くる事早し。秋後に霜なうして落葉遅し。山外に山有つて山盡きず。路中に道れほうして道きはまりなし。シテ「山

青く山白くして雲來去す 地「人樂しみ人愁ふ。是れ皆世上の有

なり。誰かいつまで春のひまゆく駒の。

牛飼車よせよとて　牛飼は車を引かする牛を飼ふ男。牛かひよこれもひの車を持て來れの此世と隣郷に火宅と云へば。むもひの末の文字と火に取りてつけたり。

足よわ車　輪のひよわきと云ふ。こゝは心の進まぬ譬。

名も清き水のまに〳〵　清水の文字といひかく。詞は古今集の「花ちれる水のまにまにとめ來れば」といふ歌より取る。水の流れのまゝに留れ來ればの意。

河は音羽の山にかけ。ろの山櫻のふと音羽山にかけ。ろの山櫻のこの音羽は清水の山を云よ。

東路とても　東路も東の方なれば。東山と聞くにつけてうなたの方角がなつかしきなり。東路は關東に行く路。逢江は東海道筋なれば東路と云ふ。東山は清水寺のある山の大名。

春前に雨降早。秋後無し霜葉落遲。　前句抄解の詩。たゞし原文には葉の落つる承れうしと

自ろと此詩に落葉にうしとかへたるは。前の花の開くる事はやしといふに句調ひさなりてわづらはしければなるらん。詩にはかゝる事つねにありて作者はわざと注意したるを。近ごろの批評家が草文に遊へりなど物知りがほにいひうしろは如何にぞや。

山外有レ山山不盡。路中多レ路路無レ窮。　これも百聯抄解の詩。

山青山白雲來去。人樂人愁一字とのこして是皆世上のさかへたる。味ふかし。

誰言春色從レ東到　東さいふ文字と東山につゞけたり。

四條五條の　宗盛の邸は六條なれば河原にいでゝ先づなかめわたしたるけしきをのぶ。

いろめく花衣　花見の人々の色つやある衣と云ふ。花衣は花の如く美しき衣の意。

八重一重さまゝ〳〵ある　花の八重一重さまゝ〳〵ある九重の意。

と云ひて九重につゞけたり。九重は部の事。

名に負ふ　名高きの意。

河原にもてと　これより川を渡りて清水の方に行く順路をのぶ。

車大路　五條橋を渡りて真直に行く道。

六波羅の　六波羅密寺は道より左手にあり。此境内に昔地藏堂のありたれば云ふ。

觀音も同座あり　地藏堂の内に觀音ともならべ置きたれば云

の上。老若男女貴賤都鄙　いろめく花衣　袖をつらねてゆくにぎの。雲かと見えて八重一重。　さく九重の花ざかり。名に負ふ春のけーきかな。

ロンギ地「河原れもてを過ぎゆけば。いろぐこゝろの程もなく。車大路や六波羅の。地藏堂よとふーをがむ。シテ「觀音も同座あり。

闡提救世の方便あらたに。たらちねをまもり給へや。地「げにや守りの末すぐに。頼む命はゐら玉の。愛宕の寺もうちすさぬ。

六道の辻とかや。シテ「實よれろーや此道は。冥途に通ふなるものを。心ほう鳥部山。地「煙のすゑもうす霞む。聲も旅雁のよこたはる。シテ「北斗の星のくもりなき。地「御法の花も開くなる。

シテ「經書堂は是かとよ。地「其たらちねを尋ぬなる。子安の塔をの。シテ「春のひま行く駒の道。地「はや程もなく是ぞこり。地「馬留め。こゝより花車。れりなの衣はりま

ふ。　閻提救世の方便信の徒と云ふ佛語。閻提は大悪不信の徒にても觀音の慈悲にて救ひ給ふと救世と云ふ。救ふ爲に種種の手段をめぐらすを方便と云ふ。

たらちねと　母と云ふ。大悪不信の徒へ救ひ給ふ觀音なれば母の身と安全に守り給へと拜むげにや守りの　熊野が心をこめて佛の守りを一節に頼むも尤なり。げにも人の一命は知られぬものなれば。地の詞にて云ふ。げにも知られぬ玉の緒の意。末すぐにげに守る事の行末まで眞直にの意。頼むは守りに依頼すると命と心頼みに思ふと二つの意を兼ぬ。しら玉の緒と云ふ意にてただきのに言ひかけたり　愛宕の寺　珍皇寺さいひ一寺なりと云ふ。

六道の辻　右の寺の邊なるべし。冥途に通ふ道なりと云ひ傳へし處と見ゆ。

鳥部山　阿彌陀峰さいふ山なり。こゝには火葬場のある處なれば心ほうと云ひ。又遠の末とつゞけたり。

聲も旅雁の　音聲に呂律さいふ事あれば聲も呂と言ひ掛け。呂は低き音なれば哀しみと帶びたる旅雁は故鄉と離れて旅なる雁。

北斗の星の　春の雁は歸雁として北方に行くものなれば北斗の星の蜜なきと御法を受け。北斗星前橫二旅雁一の詩より取る。北斗は星の名。

御法の花も　法花さいふ事を云ひて下文の經の字につゞく。法花經の意。

經曼荼　清水坂の左側にあり。

聖德太子の經を養き給ひし處と言ひ傳ふ。されば經文の意に非ざる故。きやうしよ堂と稱へずして。きやうかう堂ご稱ふるなるべし。是は俗稱にて本名は來迎院と云へり。

門に入る　清水の右側に今も子安の觀音としてあり。

ひまゆく駒　史記に人生二一世間一如二白駒過一レ隙耳といへるより出でて人生の早く過ぐるを云ふ。こゝには駒の行く街道さいふに掛けてはやほざしなくの序させり。白駒は日影の事なりとも馬の事なりとも云ふ。何にもせよ速力つよきものが過ぐる譬なるべし。

車宿り　馬留め共に清水にあり。車と待たせむき馬を留めむく處。

花車　花見車に同じ。

花はりぬの衣はりまがた　車を下りて徒歩する路を云ふ。

衣つゞけ　衣に張るに掛けて云ふ事あれば播磨潟さいひかけ。播磨潟の飾磨郡より出だすを以て染物の飾磨さいひ呼び出だしたるなり。

ちんは稱　ちんは車よりかちの詞を云ふ。

黄黒き色　かちは徒歩する人を云ふ。

念誦　佛に祈念して經文を誦すがた。　右かまのかちの路清水の。佛の御前に念誦して。母の祈誓を申さん。

ワキ詞「いかに誰かある。トモ詞「御前に候ふ。ワキ詞「熊野はいづくにあるぞ。トモ「いだま御堂に御座候ふ。ワキ「何とて遲なはりたるぞ。急いでこなたへと申し候へ。トモ「畏つて候ふ。いかに朝顔に申し候ふ。はや花の本の御酒宴の始まりて候ふ。急いで御參りあれとの御事にて候ふ。いかに申し候ふ。急いで御參りあれとの御事にて候ふ。はや花の本の御酒宴の始まりて候ふ。ツレ「心得申し候ふ。シテ「何とはや御酒宴の始まりたると申すか。ツレ「さん候ふ。シテ「さらば參らうずるにて候ふよ。なにとて御當座などをもあうはされ

候はぬぞ。クリ「實よや思ひうちよあれば。色ほかよあらはる。地「よーやよーなき世のならひ。歎きてもまた餘りあり。シテサシ「花前よ蝶舞ふ紛々たる雪。地「柳上に鶯飛ぶ片々たる金。花は流水に隨つて香の來る事と。鐘は寒雲を隔てゝ聲の至る事遲ー。シテ「清水寺の鐘の聲。祇園精舍をあらはー。諸行無常の聲やらん。地主權現の花の色。娑羅双樹のことわりなり。生者必滅の世のならひ。實よや思ひうちよあれば。色ほかよあらはる。

「花前よ蝶舞ふ紛々たる雪。地「柳上に鶯飛ぶ片々たる金。花は流水に隨つて香の來る事と。鐘は寒雲を隔てゝ聲の至る事遲ー。シテ「清水寺の鐘の聲。祇園精舍をあらはー。諸行無常の聲やらん。地主權現の花の色。娑羅双樹のことわりなり。生者必滅の世のならひ。實よや思ひうちよあれば。色ほかよあらはる。

「よーやよーなき世のならひ。歎きてもまた餘りあり。シテサシ

ると云ふ。

いまだ御堂に盛は花の本にあり。御堂は本堂。宗龍にあり。熊野はまだ佛

のうく苔々ちかう前と離れて花とながめたり。始めて佛座とは即席に歌よむ事。熊野は此時すでに歌よむ心あり。宗盛などの事ゆゑにも思はず。

げにや思うちにあれば心中の思を言葉にあらはすと云ふ意にて歌の事を受け。やがてわが歌もよしやせんかたなしとつゝしたり。

世のならひと云ふ。生者必滅の世のことわりと云ふ。

花情樹舞紛々翠。御上落飛片々金百鳥珍歌の詩。

花随二流水一香去遠。鐘隔二雲聲一古詩の句なるべし。

紙園精舎 紙園精舎をあらはし 紙園精舎は天竺の寺の名。ここに名のみき鐘あり。

行無常等と説くと云へり。

諸行無常 世はすべて無常なりといふ意。

地主權現 田村に出づ。寺内の社。

娑羅雙樹 天竺にある木の名。釋迦は此木の下にて入滅せしに其樹皆悉く白色に變じたりと佛書にあり。こゝは花の色に盛衰の實例を示す事娑羅雙樹にかぎるべし。

たゞ盛衰の實例を示す事娑羅雙樹にかぎるべし。

ためしある粧ひ 紙ひさは盛なる時の樣を云ふ。

は例ある事ぞの意。 れかゝる衰ふるすべて一世の中の字につゞけて世の中と掛けたり。

なかば〳〵雲にかくれて上の見ゆるを空の形容に掛けたり。空は虚空に高くあがりて上には見るべき物所なければ云ふ。

桂橋寺の山號と霊鷲山と云ひしなるべし。

霊鷲山と云ひしなるべし。

桂橋寺 桂橋寺にて下河原にあるを桂に言ひかけ。桂は立つもの故たちいでゝこの序とす。

花やあらぬ 峯の雲は花かあらぬ初櫻なるべしの意。梢の林と云ふを祇園林に言ひかく。

祇園の社の森と云ふ。

祇園林 祇園の社の下の方の土地。

下河原 大悲擁護 觀音の大慈悲もて世をまもると云ふ。長門本平家ものがたりに「大悲擁護の霊は熊野山の峯にうひき」と云へり。此歌を取りて熊野權現の形容とす。

熊野權現 紀伊の熊野を云ふ。熊野には三社ありて其内那智は本地千手觀音なりと傳へたれば大悲と云へり。

今熊野 今水より南の方にあり。今熊野と同じ方角。

稲荷の山 伏見の稲荷なり。

古今著聞集に「時雨する稲荷の山のもみぢ葉は肖かりしより思ひろめてき」といふ歌あり。此歌を取る。

青かりし葉の たゞ青かりし葉の色今著聞集に「時雨する稲荷の山のもみぢ葉は肖かりしより思ひろめてき」といふ歌あり。此歌を取る。

たゞのめ 觀音示現の歌の句。田村にあり。

千々の 紅葉の事と云ひ來りし故。

山の名のごとく音は有らじ花の霊なればと云ふ事と。音羽にかけ嵐山にかけて落花の風情させり。嵐山はこゝに縁なれど花の名所なるを以て引きかけたり。

雪の字より深きをつゞく。わが世にもふ心の深さを誰か知るべきなり。

一節と云ふ意。

一節と云ふ意。 一節かさくら花ちるを惜しまぬ人(しなければ)

春雨の降るは涙かさくら花ちるを惜しまぬ人(しなければ)

いかにせん 熊野の歌なり。都の花盛と見捨つるも悟しけれど。東の花に心の引かされてこゝには心も留まらずの意。母と東の花に歸へてまた散まと。

やと病氣と絆づかふ心と含む。

いかにも位の意。

中々の事 中々の事。

これ觀音の御利生なり 母の斷習と申さんと上に言へるに應ず。

むかし鹿島に木綿四手をつけて都の四境に放つ斷綺あり。

ゆふつけの鳥。

あづまの枕詞。

鳥が鳴く 鳥が鳴くし 關の戸も我爲に心して明けてくるゝと云ふを明けゆくに言ひ掛く。

關の戸ざしも心して

飛がれ もとは雁の音と云ふ事なれど。うつりてはた〳〵雁の事に用ふ。

うれは越路 雁は越路の方に行き我は東に行く。方角は東北さかはれど都を別るゝ名殘は同じとなり。共に故郷に歸るうれしさと含む。越とは越前越中越後加賀能登邊方の總名。

御酌にまゐり候ふべー。ワキ詞「いかに熊野。一さー舞ひ候へ。

地「深き情を。人やしるべー。

シテ詞「のうく俄に村雨のー。

にく村雨のふり來つて花を散らー候ふよ。シテ「あら心なの村雨やな春雨の。地「ふるは涙か櫻花。ちるを惜ーまぬ人やある。

ワキ詞「よーありげかかることばの種とりあげみれば。いかにせん都の春もをーけれど。シテ「なれーゆづまの花や散るらん。ワキ詞「げに道理なりあはれなり。早々暇とらするぞ東に下り候へ。シテ「何御いとまと候ふや。ワキ詞「中々の事。とくく下り給ふべー。シテ「あらうれしやなー。地「是までなりやうれーやな。かくて都にでなりやうれーやな。

御供せば。またもや御意のかはるべき。たゞこのまゝに御いとまと。ゆふつけの鳥がなく。あづま路さーて行く道の。やがてやす

卒都婆小町　そとばこまち　古名　小町物狂　清次作

シテ　小野小町
ツキ　僧
ツレ　同　採津
ハ　處

小野の小町の年老い零落せる様を玉造と云ふ僧により作れり。北づ卒都婆に腰かけたるより問答と起して歌よむに至り。扨ち少將の靈につかれて物狂となり。終に佛果を得ると結びたり。能にては老女ものと文もろの事とす。

心して見るべし。淺き山にかくれても隠るゝ心は深きの意。暗に弘法大師なる高野山より示す。

前佛後佛　釋迦如來と云ふ。彌勒出世は五十六億七千萬歳之後とあり。

夢の中間　今生を指す。儚き心の事一なるをひとへなるをひとへの衣に言ひ掛く。

身は浮草と　今古集に「わびぬれば身を浮草の根を絶えてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ」とあり。是は文屋康秀が筌河の様になりて下る時さもに行かぬかさいはれて小町のよめる歌な

シテ次第「山は淺きよかくれがの。深きや心なるらん。詞「これは高野山より出でたる僧にて候ふ。我このたび都にのぼらばやと思ひ候ふ。サシ「うれ前佛は既よ去り。後佛はいまだ世よ出でず。ツキッレ「夢の中間に生れ來て。何を現と思ふべき。たまゝ受けとりの種なると。思ふ心もひとへおる。墨の衣に身をなして。難き人身を受け。逢ひ難き如來の佛教よ逢ひ奉る事。これぞさ我ためよ。心を留むる子もなし。千里を行くも遠からず。野よ臥し山よ泊る身の。これぞ誠のすみかなる。

シテ次第「身は浮草をさそふ水。なきころ悲しかりけれ。サシ「あはれやげよいよ〳〵はかなき身を知れば。憐むべき親もなし。親のなければ舌の囀りは。露を含める糸萩の。かごとばかりよ散りうむる。花よりもなほめづらしや。今は民間しづのめよさへ穢なまれ。諸人に恥をさらし。うれしからぬ月日身よ積つて。百年の姥と爲りて候ふ。歌「都は人目つゝましや。もしもうれとか夕まぐれ。楊柳の春の風になびくが如し。また鶯の囀るが如し。雲井百敷や。大内山の山守も。かゝる憂き身はよもとがめじ。木がくれてよしなや。鳥羽の戀塚秋の山。月の桂の河瀬舟。こさゆく人は誰やらん。

シテ詞「あまりに苦しう候ふほどよ。これなる朽木よ腰を懸けて休まばやと思ひ候ふ。ツキ詞「のうはや日の暮れて候ふ道を急がうずるよて候ふ。や。これなる乞食の腰かけたるは。正しく卒都婆よて候ふ。教化しのけうずるにて候ふ。いかにこれなる乞丐人。れ事の腰かけたるは。かたじけなくも佛体色性の卒都

り。世に住みわびて空さ身なればば浮草の根も無き如くいづこにても水のまゝに誘はれ行かんとの意。こゝはすでに年老いて其誘ふ人もなきが悲しきと云へり。

悟慢　心のたかぶる事。

翡翠　鳥の名。其羽の形に作れる簪。

婀娜　たとやかなる意。之を註するに「たとやかにしてさ下品に做く。

綺舌の轉　物言ひの美しきと云ふ。

かごとばかり　言ひわけほどわしづのめ　賤しき女。

都は人目　都は人目多しと言ひあらはされてはと月さ共に都と立ち出づるさなり。

雲井百敷　内裏の事。また内裏の事を大内とも云へば山の名につけたり。

大内山の山守も　類政集の歌に「人しれぬ大内山の山守は木がくれてのみ月を見るかな」の詞と取る。うの木がくれてと烏羽の戀塚の行くゝあとにかくる事に用ひたり。大内山は仁和寺のうしろの山と云ふ。

戀塚秋の山　二つさも烏羽の名所。

山城の桂川と月の桂の川瀬舟　月の桂さいふ詞あれば月の文字は序に置きたるなり。

卒都婆　梵語の塞。佛名經文など書きて塔

に立つる木。
敎化　敎へみちびくと云ふ。
乞丐人　乞食に同じ。
佛体色性　佛体にひとしきの意。

心の花のにたとへて歌とよまんといふ事を含む。
金剛座埵　金剛部の諸尊の通號。
三摩耶形　本誓を顯す。
地水火風空　人体に具せる原質。
五体五輪　二肘二膝に頭を併せて五体とも五輪とも云ふと佛書に見ゆ。
一見卒都婆永離三惡道　死者が一たび卒都婆と見れば永く三惡道の苦をまぬかるゝとの意。
一念發起菩提心　一念發心して菩提心と起すは百千の卒都婆と造立するに勝れりとの事經文にあり。

婆よては無きか。うこ立ちのきて餘の所に休み候へ。シテ「佛体色性のかたとしけなきとは宜へども。是ほどに文字も見えず。刻める像もなし。たゞ朽木とこそ見えたれ。ワキ「たとひ深山の朽木なりとも。花咲きし木はかくれもなし。いはんや佛体に刻める木。などかしるしのなかるべき。シテ「我も賤しき埋木なれども。心の花のまだ有れば。手向になどかならざらん。さて佛体たるべき謂は如何に。ツレ「うれ卒都婆は金剛薩埵。かりに出化して三摩耶形を行ひ給ふ。シテ「行ひなせる形は如何よ。ワキ「地水火風空。シテ「五体五輪は人の体。何しよ隔あるべきぞ。ツレ「像はうれたがはずとも。心功德はかはるべし。シテ「さて都卒婆の功德は如何よ。ワキ「一見卒都婆永離三惡道。シテ「一念發起菩提心。うれもいかでかれとるべき。ツレ「菩提心あらばなど浮世をど厭はぬぞ。シテ「姿が世をも厭はゝこそ。心なき身なればこそ。佛体をば知らざるらめ。シテ「佛体と知れきたるぞ。シテ「卒都婆よは近づきたれ。ツレ「さらばなど禮をば爲さで敷ワキ「とても臥したる此卒都婆。我も休むは苦しいか。シテ「順緣よはづれたり。シテ「逆緣なりと浮ぶべし。ツレ「提婆が惡も。シテ「觀音の慈悲。ワキ「槃特が愚癡も。シテ「文珠の智惠。ツレ「惡と云ふも。シテ「善なり。ワキ「煩惱といふも。シテ「菩提なり。ツレ「菩提もと。シテ「植木よあらす。ワキ「明鏡また。シテ「臺よ無し。地「げよ本來一物なき時は。佛も衆生も隔なし。もとより愚癡の凡夫を。救はん爲めの方便の。深き誓ひの願なれば。逆緣なりと浮ぶべしと。ねんごろよ申せば。誠よ悟れる非人なりとて。僧は頭を地よつけて。三度禮し給へば。シテ「われは此時ちからを得。なほ戲れの歌をよむ。極樂の內ならばこころの內に行きて佛体に服かくるは惡しきか知られざ。こゝは外なればよしかるまじと外には卒都婆の詞をよせたり。

われも休むは卒都婆も風して休みたればわれも共にの意。
順緣　云ふ。情に從ひて佛緣と結ぶを云ふ。
逆緣　云ふ。情に逆ひて佛緣と結ぶを云ふ。
提婆　釋迦に抵抗して佛敵と爲りたる人。
槃特　釋迦の弟子中大愚なりし人。
煩惱　心の迷と云ふ。
菩提　心の悟と云ふ。
菩提本無し樹。明鏡亦非し臺　惠能といふ僧の頌。これは前に身是菩提樹。心如二明鏡臺一と云へる頌ありしと反對に云へるなり。

乞食の事。

極樂の內ならばこゝろ極樂の內に行きて佛体に服かくるは惡しきか知られざ。こゝは外なれば苦しかるまじと外には卒都婆の詞をよせたり。歌の意は

桂の眉墨　桂は月の異名。月の如き眉墨の意。眺のすぐれたりしと云ふ。

羅綾の衣　あやうすもの〻衣にて宮み祭にたりしと云ふ。桂殿は桂の木にて作りし殿。

漢月袖に靜かり　漢月袖の河の月が袖に靜に落つるの意。

霜蓬れたる髪を云ふ。　霜の如く白く蓬の如く亂

嫦娥　美しきさま。

艷々たりし蛾　細ろ意。

つや〳〵しかりし蛾の眉もの意。眉と蛾と云ふ虫の色

遠山の色　眉の作り方を遠山に譬ふ。

百年に一年足らぬつくも髪（われや想ふらし面かげに見ゆ）

勢物語の歌。百の字の頭なる一を除いば白の字と成る。つくもとは滋藻の名にて髪のちゝれたる如き草なれば。ちゞれたる白髪と云ふ事の顕なり。

化や。

ワキ詞「さてれ事は如何なる人ぞ名をれん名のり候へ。シテ詞「はづかしながら名を名のり候ふべし。これは出羽の郡司小野の良實がむすめ。小野の小町が爲れるはてさむらふなり。ワキッレ「いたはしやな小町は。さもいよ〳〵は遊女よて。花のかたちかよやき。桂の眉墨青うして。白粉を施さず。羅綾の衣多うして。桂殿の間に餘りしぞかし。シテ「歌をよみ詩を作り。地「醉ひをすゝめる盃は。漢月袖に靜なり。まこと優なる有樣の。いつ其ほどにひきかへて。頭には霜蓬をいたゞき。婵妍たりし兩髪も。はだへにかじけて墨みだれ。艷々たりし雙蛾も。遠山の色を失ふ。百年に一年足らぬつくもがみ。斯かる思ひは有明の。影はづかしき我身かな。

ロンギ地「首に懸けたる袋には。如何なる物を入れたるぞ。シテ「けふも命は知らねども。あすの飢ゑを助けんと。粟豆のかれいひを。袋に入れて持ちたるよ。地「うしろに負へる袋には。シテ「くにの垢つける衣あり。地「脛にかけたるあじかには。白黑の田烏子あり。地「破れ簑。シテ「霜雪雨露。地「なみだをだにも拂ふべき。袂も袖もあらばこそ。今は路頭に物を乞ひ。乞ひ得ぬ時は惡心。また狂亂の心つきて。聲かぎりけしからず。

シテ「のう物給べのう御僧のう。ワキ詞「何事ぞ。シテ詞「小町がもとへ通はうよのう。ワキ「れてこそ小町よ。何とて現なき事をば申すぞ。シテ「はや小町といふ人は。あまりよ色が深うて。空言なりとも一度の返事もなうて。いま百年よ爲るが報うて。あら人戀しや。ワキ「人こひしいとは。さてれ事よは如何なる

粟豆のかれいひ　粟や豆をまぜたるかれいひ。かれいひは飯を干して作れる食物。

垢づくに　垢膩と書く。垢づき脂づきたるを云ふ。

あじか　竹にて編める籠。

色が深うてたるを云ふ。顏色の深くすぐれたるを云ふ。

かきくれて　まつ暗に爲つての意。

五月闇の空　空言にいひかく。

車の綱時。前のながえを載せ置く臺。ろれと繰くの意のしゃに云ひ掛く。

浄衣の袴つては引つからげての意。かいさ立烏帽子と風折り丸く立ちたる烏帽子。之と中程より斜に横に折りて着ると風折ると云ふ。

狩衣　公卿の私服。本は獵狩に行く時に着るより起れる名。

者のつきうひてあるぞ。シテ「小町よ心を懸けよ人は多き中よも。殊よ思ひ深草の四位の少將の。地「恨みの數のめぐり來て。車の榻よ通はん。日は何時ぞ夕暮。月こう友よ通ひ路の。關守はありとも。とまるまじや出で立たん。シテ「淨衣の袴かいとつて。地「淨衣の袴かいとつて。立烏帽子を風折り。狩衣の袖をうちかついで。人目よのぶの通ひ路の。月よも行き暗よも行く。雨の夜も風の夜も。木の葉の時雨雪ふかよ。シテ「軒の玉水とくとく。地「と云ふに。シテ「雨の落つる音にて。下には疾くとくとは行き。一夜二夜三夜四夜。七夜八夜九夜。十夜豐の明の節會にも。逢はでぞかよふ庭鳥の。時をも返す曉の。榻のはよがき百夜までと通ひいで。九十九夜になりたり。シテ「あらくるよ目まひや。地「胸くるよやと悲よみて。一夜を待たで死よたりよ。深草の少將の。うの怨念がつきうひて。かやう物よは狂はするぞや。

木の葉のしぐれ豐ふかし風により木の葉の時雨と降る頃より雪の深きに至るまでの意。軒の玉水雨垂の事。前の雨の夜と云ふと受けてとくとくの序さす。とくとくはぽつりよと雨垂の落つる音にて。下には疾くとくとの意に掛けたり。

豐の明の節會十一月中の辰の日に今年の新穀を主上もめしあがり臣下にも給ふとて宴を賜はる儀式あり。之と云ふ。

時とも返すのみならず鶏も時刻をとくり返して鳴くよのさいふ意。

榻のはしがき通へる夜の數を榻の端に書き付けたるを云ふ。

シテ　天人
ツレ　漁夫
同　駿河
處ハ　三保の松原にて

背物頭と種さし事を作れり。

人の降りし衣を松の木に掛けおきたるを漁夫に拾はれて天にも歸る事かなはず悲しむところ尤一篇の眼目なり。

ろの悲しさ優美にて謂はゆる哀しんでの。感らざるもの。感らざるは外に比類なほかり。

風早のみほの浦回をこぐ舟の舟人さわぐ波立つらしも萬葉集の歌。風早の三穗は駿河の國。浦回は浦邊に同じ。

千里好山靈乍欲。一樓明月雨初晴時人玉屑の詩。たゞし本文に違へてこゝには引けり。

及びなき身の流天の如く賤しき身にも空に心の浮き立つ春のけしきよさなり。

忘れめや　續古今集に「忘れずよ浦見が關の波間よりかすみて見ゆし三保の松原」と云へる歌をこゝにかしこ取れり。

風むかふ雲の浮波たつと見て（う

砂と塔とかさねて云々　童子教さいふ書に聚レ砂爲レ塔人早磨二黄金鷹一折レ花供レ佛蜘蛛結二蓮華跡一と云へるを取れり。砂とあつめて塔と爲すは小さき功德を積む譬。黄金のはだへは佛の身と云ふ。花を折りては怠なく佛に仕ふる意なり。

地「これよつけても後の世を。願ふぞ誠なりける。砂を塔とかさねて。黄金のはだへこまやかよ。花を佛に手向けつゝ。さとりの道よ入らうよ。

羽衣

はごろも

元清作

ワキ一聲「風早の。三穗の浦回をこぐふねの。浦人さわぐ浪路かな。サシ「是は三保の松原に。はくれうと申す漁夫にて候ふ。ツレ「萬里の高山に雲忽にれこり。一樓の明月に雨はじめて晴れり。げにのどかなる時よもや。春のけよき松原の。浪立ちつゞく朝霞。月ものこりの天の原。及びなき身のながめにも。心うらなるけよきかな。歌「わすれめや山路をわけて清見がた。はるかに三保の松原に。たちつれいさやかよはん。風向ふ。雲のうき浪たつと見て。釣せて人やかへるらん。待てよばよ春ならば。吹く

りせぬ先に歸る舟人）　冷泉爲相の歌。下の句はかへて用ふ。

春ならば　春なれにと有りたき詞なり。今は春ゆゑ吹きてものどけき朝風なれば心配なしの意。

管絃の聲　冬になりても落葉ぜぬ木と云ふ。こは松風の常に音するを兼ねたり。常盤は永久の意にも用ふ。

盧空に花ふり音樂きこえ　天人の近くだりゐるしるしと云ふ。

色香すぐれて　色香すぐれてに同じ。

末世の奇特に　末の世のしるしにの意。

國の寶となすべきなり　前には家の寶と云ひたれどいよ〳〵大切に爲りて國の寶とまで思ひ及ぼせり。衣を惜しむ情ひれつならず。

ものどけき朝風の。松は常盤の聲ぞかし。浪は音なき朝なぎに。釣人れほき小舟かな。ワキ詞「われ三保の松原よりあがり。浦のけーきをながむる所に。虛空より花ふり音樂きこえ。靈香四方に薫ず。是たゞごとゝ思はぬ所に。これなる松よりうつくしき衣かよれり。よりてみれば色香たへにして常の衣にあらず。いかさまとりてかへり古き人にもみせ。家の寶となさばやと存じ候ふ。シテ詞「のうその衣はこなたのにて候ふ。何ためにめされ候ふぞ。ワキ詞「是はひろひたる衣にて候ふ程よ。とりて歸り候ふよ。シテ「うれは天人の羽衣とて。たやすく人間よあたふべき物よあらず。本のごとくはれき給へ。ワキ「うも此衣の御ぬーとは。さては天人よてまーますかや。さもあらば末世の奇特よとゞめれき。國のたからとなすべきなり。衣をかへす事あるまじ。シテ「かなーやな羽衣おくては飛行のみちも絶え。天上にかへらんことも

下界　天上に對して此世界を云ふ。

とやあらんかくやあらんとやせんかくやせんに同じ。

五衰がつら　玉とかざりし髮。五衰　天上の快樂なるも命終る時には五衰相現ずと佛書にあり。五衰は五種の衰弱と天人の身にあらはす事。うの第一に頭上の花髮忽に萎むざまにには云ふ。

天の原ふりさけ見れば霞たつ雲路まごひてゆくへしらずも　後風土記の歌。これより天人の哀しめる惑情と變ず。

迦陵頻伽　佛國にある鳥の名。美聲なりと言ひ傳ふ。

うらにふくまでなつかしや　まづ雲と羨み迦陵頻伽と懸ひ雁までも千鳥鷗にる風までもすべてうらやましき意とのべて。昨日までは自由自在なりし身も一枚の羽衣を取られては地にも住まれず天にものぼられわ苦しみと恥き盛せり。世上この羽衣を管はれて嘆くものすねぶん有るべし。

人間の御遊のかたみの舞　人間の御遊を助けんとてわが殘したかたみの舞の意。

月宮をめぐらす　月宮殿を廻らすほどのたのもしうき舞曲。

世のうき人　うき世の人に同じ。

いや疑は人間にあり　高倘にて俗り侍すべからず。さすがは天人の言語。妙味全く此句にあり。

霓裳羽衣　舞曲の名。楊貴妃に風につれての意。

天上に對して此世界を云ふ。

とやあらんかくやあらんとやせんかくやせんに同じ。

五衰がつら　玉とかざりし髮。五衰　天上の快樂なるも命終る時には五衰相現ずと佛書にあり。五衰は五種の衰弱と天人の身にあらはす事。うの第一に頭上の花髮忽に萎むざまにには云ふ。

天の原ふりさけ見れば霞たつ雲路まごひてゆくへしらずも　後風土記の歌。これより天人の哀しめる惑情と變ず。

迦陵頻伽　佛國にある鳥の名。美聲なりと言ひ傳ふ。

うらにふくまでなつかしや　まづ雲と羨み迦陵頻伽と懸ひ雁までも千鳥鷗にる風までもすべてうらやましき意とのべて。昨日までは自由自在なりし身も一枚の羽衣を取られては地にも住まれず天にものぼられわ苦しみと恥き盛せり。世上この羽衣を管はれて嘆くものすねぶん有るべし。

人間の御遊のかたみの舞　人間の御遊を助けんとてわが殘したかたみの舞の意。

月宮をめぐらす　月宮殿を廻らすほどのたのもしうき舞曲。

世のうき人　うき世の人に同じ。

いや疑は人間にあり　高倘にて俗り侍すべからず。さすがは天人の言語。妙味全く此句にあり。

霓裳羽衣　舞曲の名。楊貴妃に風につれての意。

叶ふまじ。さりとては返しゝたび給へ。ワキ「此御詞をきくよりも。いよ〳〵はくれう力を得。本より此身は心なき。天の羽衣とり。かくし。かなふまじとて立ちのけば。シテ「今はさながら天人も。はねなき鳥の如くにて。あがらんさすれば衣なし。ワキ「地よまた住めば下界なり。シテ「とやあらんかくやあらんとかなしめど。ワキ「はくれう衣をかへさねば。シテ「力及ばず。ワキ「せんかたもなし。地「無涙の露の玉髮。かざしの花もしをれ〳〵と。天人の五衰も。目のまへにみえてあさまし。シテ「天の原ふりさけみれば霞たつ。雲路まどひてゆくへしらずも。地「住み馴れし空にいつしかゆく雲の。うらやましきは。シテ「天の原ふりさけみれば霞たつ。雲路まどひてゆくへしらずも。地「住み馴れし空にいつしかゆく雲の。うらやましきはなり。迦陵頻伽のなれの。シテ「天路をきけばなつかしや。地「天路をきけばなつかしや。春風の。空に吹くまでなつかしや。

東遊の駿河舞　舞曲の名。この舞も天人の故事によつて作れりと云へば此時より始まりしならんとなり。

二神出世　伊弉諾伊弉冉尊の世に出でまし〳〵しと云ふ。

十方世界　東。西。南。北。東北。東南。西北。上。下と云ふ。

月宮殿　月界の御殿の名。

ぎよくふのしゆり　玉斧の修理にて立派なる建物の意。

無窮の意。

白衣黒衣の天人　白衣の天人十五人黒衣の天人十五人すべて三十人の天人が一月と持ち分けて毎夜つとめをすると云ふ。三五はうのかた〳〵の十五人をさす数。

月の桂の用ふ。桂により月の事にわれ月界に住む身と分けて東國に天降れるの意。

袴がすみ棚引きにけり　久方の月の桂も花や咲くらん　後撰集の歌。霞の棚引きたるとも見へば月界の桂の木も花さく頃にやあらんの意。

天つ風雲のかよひぢ　古今集の歌。空ふく風に雲の通路をさへめさせてまばしの間にても天女の姿と見さめたしの意。

いづれや春の曙　いづれや春のけしきならぬ。すべて春の曙ぞ何とへだてん玉垣の　天上も下界も隔ぬすべきわけなしと云ひて裔の字より玉垣を出だし。垣の内と云ふ意にて内外につゞけたり。

内外の神　御末は御子孫に同じ。

君が代は天の羽衣まれに來て撫づとも盡きぬ巌なるらん　拾遺集の歌。君が代の動かぬを巌に譬へ。うれも天の羽衣のやうに柔きものにてまれ〳〵撫づる事なればまれ〳〵巌なるまでき巌なるべしの意。まれにきては來てと着てと二つの意を兼ね。衣もて石を撫づる事は佛書に出でたり。

聞くも妙なり　右の古歌と聞くと東歌を聞くことを兼ぬ。

東歌しやうちやくきんくご　東遊に歌ふ歌。

琴。笛。

琴。笙。篳篥にてだのく　樂器の名。

孤雲一片の雲を云ふ。後と孤と音を兼れてあやまる。

蘇命路　須彌山とも云ふ。佛法想像の山。紫式部の歌にて云ふ。北は黄に南は碧く東しろ四くれなゐに蘇命路の山。と云へり。かく美しき山なれば其蘇命路の山と寫し出だせる景色よさなり。落日の紅。緑は波に。白雲の袖などの闘。みな右の歌の意にて蘇命路の緑に用ふ。

浮島が　駿河の地名。緑は波に浮くと受けて浮島が原と云ふを浮ふに掛く。

雪とめぐらす　廻雪の曲と云ふ舞あると云ふ。雲を袖に擬ふる事は常なると。こゝは實地の形容に用ふ。舞と舞ひつゝ天にあがる所なればなり。

ワキ詞「いかに申〳〵候ふ。御姿を見たてまつれば。あまりに御痛はし〳〵く候ふ程に。衣をかへし給はり候へ。ワキ「〳〵申さうずるにて候ふ。シテ詞「あらうれしや。こなたへ給はり候へ。ワキ「〳〵ばらく。承り及びたる天人の舞樂。たゞ今こゝにて奏し給はゞ。衣をかへし申すべし。シテ「うれしやさては天上までもかへらん事をえたり。此よろこびよ迎もさらば。人間の御遊のかたみの舞。月宮をめぐらす舞曲あたゞ今こゝにて奏し給はゞ。衣をかへし申すべし。シテ「うれしやさては天上までもかへらん事をえたり。此よろこびよ迎もさらば。人間の御遊のかたみの舞。月宮をめぐらす舞曲あり。た

南無歸命　佛法にて神佛を拜む詞。
月天子　月の事。
本地大勢至　月の本体は勢至菩薩なりと佛法にては説けり。すなはち月を拜む詞。
あるひは　以下二句は舞ひ飄す衣のさま〳〵と色々に見なして云ふ。
左右左さいう　颯々の踏なご言ひて左右左と舞ふさまと云へるなり。颯々は風の聲。舞の衣を吹く聲なるべし。
花とかざしの　白氏文集の句より出。
人は　其名も詩の句の如く月の色人なりと云へるならん。月の色と云ふと色人に掛く。色人は色めかしく美しき人の意にて天女とさす。古來の説に色人は宮人の事なりと云へるは尤なれど。
口うつしに　誓ひ來れるものなれば文字の誤と修ふべきにも月の色非ずと取らず。
三五夜中の空に又　前に云へる白氏文集の句を用ふ。三五夜中は十五夜と云ふ。うの十五夜の明かなる空の上に又すべての顯滿足滿願眞如の影となり。
本の心に返ると。月

前シテ　漁翁
ツレ　後シテ　龍神
ツレ　天女
ワキ　臣下
近江

竹生島明神の神德を述ぶると主させり。

竹に生るゝ　竹の文字をあらはすのみ。爰は竹に鳴くよしと歌にも常によめば。下文の竹につけんとて用ひたり。
近江湖水の中にあり。
竹生島　延喜の年號。
延喜　靈驗ある神。
靈驗　走井　逢坂　志賀　四ノ宮　いづれも京都より竹生島に詣づる順路の地名。
四ノ宮にある神社。名も走井は上に末早きと云へるより名まで走井なりと續けたり。水の月はくもらぬの序。
閼の宮居は逢坂山にある社。
山越ちかきと志賀の山越にて近き路なるといふ。昔の街道に掛けたり。
鳰の海　琵琶湖の古名。うの海邊なれば鳰の浦と云ふ。

だてん玉垣の。内外の神の御すゑまで。月も曇らぬ日の本や　シテ「君が代は。あまの羽衣まれに來て。地「撫づとも盡きぬ巖ぞと。聞くも妙なり東歌。聲ろ〳〵てごゝ。孤雲の外まで滿ちく〳〵て。緑は浪まで浮島が。拂ふ嵐に花ふりて。げに雪をめぐらす。白雲の袖ぞ妙なる。シテ「南無歸命月天子。本地大勢至。地「東遊の舞の曲。シテワカ「あるひは。天つみそらの緑の衣。地「また春立つかすみの衣。「色香も妙なり少女の裳。左右左。さいう颯々の。花をかざしの地「東あづまのかずく〳〵に。そのそらに又。滿願眞如の影となり。御願圓滿國土成就。七寶充滿のたからをふらし。國土まで是をほどこし給ふ。さるほどに時うつゝて。天の羽衣浦風に。たなびきたなびく三保の松原。

充滿せる寶と天より降らすと云ふ。
三保　浮島　臣高　富士　やうやうに天人の遠くなるさまを駿河の名所もてあらはす。

うき島が雲の。あゝたか山や富士の高嶺。かすかになりて天つみそらの。霞にまぎれてうせにけり。

竹生島　ちくぶしま

氏信作

ワキ次第「竹に生るゝ鶯の。竹生島詣いうがん。詞「うもく〳〵これは延喜の聖代まで仕へ奉る臣下なり。さても江州竹生島の明神は。靈神まて御座候ふ間。此たび君まで御暇を申し。唯今竹生島に參詣仕り候ふ。道行「四の宮や。河原の宮居末はやき。名も走井の水の月。くもらぬ御代まで逢坂の。關の宮居を伏し拜み。山越ちかき志賀の里。鳰の浦にも着きまけり。詞「急ぎ候ふほどまで。あれを見れば釣舟の來り候ふ。いばらく相待ち便船を乞はゞやと存じ候ふ。
シテサシ「れもしろや頃は彌生のなかばなれば。波もうらゝまで海の

れも。ッレ「霞みわたれる朝ほらけ。シテ一聲「のどかに通ふ船の道。シテツレ「うきわざとなきこゝろかな。シテサシ「これは此浦里に住みなれて。明暮はこぶうろくづの。二人「數を盡して身ひとつを。助けやせんとわび人の。ひまも波間より明けくれて。世をわたるこそ物うけれ。歌「よー〳〵同じわざながら。世にこえたりな此海の。名所ほき數々に。浦山かけてながむれば。志賀の都花園。むかーながさゝーよせて事問はんとワキ詞「いかに是なる船にてもなー。御覽候へ釣船にて候ふよ。ワキ「こなたも釣船と見て候へばころ便船とは申せ。これは竹生島にはじめて參詣の者なり。誓の船に乘るべきなり。シテ「げよ此所は靈地よて。歩みを運び給ふ人を。とかく申さは御心にも違ひ。又は神慮もはかりがたー。ッレ「さらばれ船を參らせん。シテ「うれーやさてはむかひの船。乘法の力とれほえたり。シテ詞「けふは殊更のどかよて。心にかゝる風もなー。地「名ころさゝ波や。志賀の浦にれ立ちあるは。都人かいたはしーや。れ船にめされて沖々をながめ給へや。地「處は海の上。國は近江の江にちかき。山々の春なれや。花はさながら白雪のふるかなほさえかへる春の日に。比良の嶺れろー吹くとても。沖こぐ船はよも盡きじ。旅のならひの思はずも。雲井のように見ー人も。同じ船に馴れ衣。浦をへだてゝ行くほどに。竹生島も見えたりや。シテ「緑樹かげ沈んで。地「魚樹よのぼるけーきあり。月海上より浮んでは兎も波を走るか。れもーろの島のけーきや。シテ詞「舟が着いて候ふ御上り候へ。ワキ詞「あらうれーややがて神前へ參り候ふべー。シテ「この尉が御道ーるべ申さうずるよて

うきわざとなき　漁夫の業も憂く思はぬの意。

うろくづ　鱗にて魚に同ト。數と聚して數々さりあつめて一身の生活を助くる意。わび人　貧しき人に同ト。

よし〳〵同ト　わざながらよしよし再び嘆かト。世にすぐれたる名所の湖に漁する身なればの意。

志賀の都　花園　眞野　いづれも志賀の名所。

むかしながらの　千載集に「さゞなみや志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな」と云へる語を取る。

醫の舟　佛の衆生を救はんとの誓と舟もて彼岸に渡すに譬ふ。

名ころさゝ波や　名にこう波の文字あれど海には波なしとなり。さゝ波や此地の古名。

江に近き其江に近き　近江の字を解剖して山々さつゞけたり。

時しらぬ山は　花と雪に見なして其雪の時節も知らずに降りたる山となり。都の富士とは比叡山を云ふ。

旅のならひの　旅の憂なれば今まで他人と見しも同船して怨なれ〳〵しく爲ると云ふ。

緑樹影沈魚上レ木。清波月落鬼歸レ浪　建長寺の僧自休の竹生島に詣でたる詩の句。清波月落の句とばかへて用ひたり。

九生如來　大日如來の事。

のうれまでも候はず。いや其例と引くまでも候はず。手近き例のあるものとの意。

かゝる悲願と隔なく守らんと大慈悲の願と起給ひてなり。かく女人とても正覺悟を得るの意。獅子通王　獅子通王佛といふ佛の出世以前より辨財天は此智と立て給へる事竹生島緣起にあり。

利生　利益に同じ。

白波の　立ちかへりの序。

候ふ。これこう辨財天にて候へよく〳〵御祈念候へ。ツキ「承り及びたるよりもいやまさりて有りがたう候ふ。不思儀やな此の島は。女人禁制ところ承りて候ふよ。あれなる女人は何とて參られて候ふぞ。シテ「うれは知らぬ人の申ごとよて候ふ。かたじけなくも此島は。九生如來の御再誕なれば。殊よ女人ころまねるべけれ。ツレ「のうれまでもおきものを。地「辨財天は女体よて。うの神德もあらたなる。天女と現じれはゝませば。女人とてへだてなー。たゞ知らぬ人の言葉なり。ツ「かゝる悲願をれこーて。正覺年ひさー。獅子通王のいよーへより。利生さらをたよりによする海人小舟。われは人間よらずとて。社壇の扉をれーひらき。御殿よ入らせ給ひければ。翁も水中よ入るかと見ーが白波の。立ち返りわれは此海の。あるじぞと云ひす

下界　此世界より下にある世界。すなはち龍宮の事。

衆生濟生　人間とひろく救ふ有緣の衆生。すべて佛神に緣ある人々をひ云ふ。佛の信徒のたぐ

てく。また波よ入らせ給ひけり。

地「御殿ーきりよ鳴動ーて。日月ひかりかゝやきて。山の端いづる如くよて。あらはれ給ふぞかたじけなき。天女「うもくこれは。此島に住んで臣をうやまひ國をまもる。辨財天とはわが事なり。地「うの時虛空よ音樂きこえ。花ふりくだる春の夜の。月にかゝやく少女の袂。かへすぐもれもーろや。

地「夜遊の舞樂も時すぎて。月すみわたる海づらに。波風ーきりよ鳴動ーて。下界の龍神あらはれたり。龍神湖上よ出現ーて。ひかりもかくやく金銀珠玉を。かのまれびとにさゝぐるけーき。ありがたかりけるきどくかな。シテ「もとより衆生濟度の誓ひ。有緣の衆生の諸願を叶へ。又は下界の龍神となつて。國土を靜め誓ひを現はしー。天女は宮中に入らせ給へば。龍神はすなはち

シテ（ヒメ）景清入丸
トモ従者
ワキ里人
ヘ日向

さしも平家には忠勤なりし悪七兵衛景清もむちぶれて後は日向の勾當さて乞食のさまなりしと人丸さ云ふ孤の遺々翠れ來て面會する事と作れり。前は自の身に取らて孤をもあざむき鬱す武士の魂をと主さし。後は軍がたりに及びて悽愴やるかたなき末路の情を寫す。字々涙さも云ふべき作なり。

消えぬ間も風なれば風が今にも吹かば忽に消ゆべき露の身なれば吹かぬ間をたよりと賴むの意。

露の身いかにかゝるはかなき身なれば行末が心細しとなり。

鬼界が江が谷　鬼界は島谷は山内さらいまだ習はぬを我身の旅路に掛けて云ふ。

入橋の　千手に云へり。

いつかさてかりねの夢に　遠き旅路をいつは行き巻いて假寢に驅れつゝ都の事を夢にも見んさ云ふ詞。

湖水に飛行ーて。波を蹴立て水を返ーて。天地に群がる大蛇の形。天地に群がる大蛇の形は。龍宮に飛んでぞ入りにける。

景清　かげきよ　元清作

ヒメトモ次第「きえぬ便も風なれば。露の身いかになりぬらん。ヒメ「是は鎌倉龜が江が谷ょ。人丸と申す女ょて候ふ。さても我父惡七兵衛景清は。平家の味方たるょより。源氏ょ憎まれ。日向の國宮崎とかやに流されて。年月を送り給ふなる。いまだならは ぬ道すがら。物うき事も旅のならひ。また父ゆゑと心づよく。ヒメトモ「思ひねの涙かたーく。草の枕つゆをうへて。いとーげきたもとかな。歌「相摸の國を立ちいでゝ。誰ょゆくへを遠江。げょ遠き江ょ旅舟の。三河ょわたす八橋の。雲井の都いつかさて。かりねの夢ょなれて見ん。トモ詞「やうへ御急ぎ候ふほどょ。

松門　松の木にて自ら門を成せると云ふ。

衣寒暖に　寒き暖かなるにも與ふるものなければ衣は唯一枚なるの意。

骸骨　骨ばかりの樣に痩せたる事。

さても世と　世を背かば法師にこそ爲るべきに。独ほ惡業ならぬやつれの樣よと恥づる意。

紅塵も遠く　乞食の住みかさ。

鶏き退く意とのきに云ひかく。

秋きぬと目にはさやかに見えねども　古今集の歌。

風の音にぞ驚かれぬる）

知らぬ迷のはかなさと　知らぬ旅路に迷ひ宿も無き心との意。

三界は所なし　三界は佛法にいはゆる慾界色界無色界と云ふ三つの世界。三界には宿るべき處

是ははや日向の國宮崎とかやょ御着きょて候ふ。こゝょて父御の御行方を御尋ねあらうずるょて候ふ。

シテ「松門ひとりとぢて年月を送り。みづから清光を見ざれば。時のうつるをもわきまへず。暗々たる庵室ょ徒ょ眠り。衣寒暖あたへざれば。はだへは髑骨と衰へたり。地「とても世をうむくとならば墨ょころもの。染むべき袖のあさまーや。やつれはてたる有樣を。我だょ憂ーと思ふ身を。誰こうありて憐みの。憂きをとむらふよーもなし。

ヒメ「ふーきやな是なる草の庵ふりて。誰すむべくも見えざるょ。整めづらかょ聞ゆるは。もー乞食のありかょと。軒端も遠くみえたるぞや。シテ詞「秋きぬと目ょはさやかょ見えねども。風の音信いづちとも。ヒメ「ならぬ迷ひのはかなさを。ゐばーやすら ふ宿もなしー。シテ詞「げょ三界は所なーたゝ一空のみ。誰とかさ

も無からん唯一空のあるのみなれば。と脇の答もなしと受けて云ふ。

〜てこと問はん。又いづちとか答ふべき。トモ詞「いかゝ此わらやの内へ物問はう。シテ「うもいかなるものぞ。トモ「流され人の行方へや知りてある。シテ詞「流され人ゝとりても。名字をば何と申〜候ふぞ。トモ「平家の侍惡七兵衛景清と申〜候ふ。シテ「げゝさやうの人をば承り及びては候へども。本より盲目なれば見る事なし。さもあさまし〜き御有様。うけ給はり。うゞろゝあはれを催すなり。くは〜き事をばよろゝて御尋ね候へ。トモ「さては此あたりゝては御座なげゝ候ふ。是より奥へ御出であつて尋ね申され候へ。

シテ詞「ふ〜ざやな只今の者をいかなる者ぞと存じて候へば。この盲目なるものゝ子ゝて候ふはいかゝ。我一年尾張の國熱田ゝて遊女と相馴れ一人の子をまうく。女子なれば何の用ゝたつべきぞと思ひ。鎌倉かめがにが谷の長ゝ預けれきし〜が。なれぬ親

きづなくれ羈絆の惑。親子の情とつなぎとむる綱。親の名聚をぜぬば子に不實の樣なれど。却りて恩愛の心ぞとなり。

子を悲〜み。父ゝ向つて言ばをかはす。地「聲をばきけど面影を。見ぬ盲目ぞ悲〜き。なのらで過ぎ〜心こそ。なかゝ〜親のきづなゝれ。

トモ詞「いかゝ此あたりゝ里人のわたり候ふか。ワキ詞「里人とは何の御用ゝて候ふぞ。トモ「流され人の行方や御存じ候ふ。ワキ「流され人にとりても。いかやうなる人を御尋ね候ふぞ。トモ「平家の侍惡七兵衛景清を尋ね申〜候ふ。ワキ「只今こなたへ御出で候ふ山陰ゝ。わらやの候ふゝ人は候はざりけるか。トモ「其わらやゝハ盲目なる乞食こう候ひつれ。ワキ「のうの盲目なる乞食ころ。御尋ね候ふ景清候ふよ。あらふ〜さや。景清のことを申〜て候へば。あれゝまゝ御事の。御愁傷のけ〜き見え給ひて候ふは。何と申〜たる御事ゝて候ふぞ。トモ「御不審尤ゝて候ふ。何をかつゝみ申〜候ふべき。是は景清の息女ゝてわたり

候ふが。今一度父御ゝ御對面ありたきよし仰せられ候ひて。是までは𠮟〳〵御下向ゝて候ふ。とてもの事ゝ一かるべきやうゝ仰せられて。景清ゝひき合せ申されて賜はり候へ。ワキ「言語道斷。さては景清の御息女ゝて御座候ふか。まづ御心を一づめてきこ一めされ候へ。景清ハ兩眼おひま一〳〵て。せん方なさゝ髪をそろし　剃髮に同じ。

命をば旅人とたのみと乞ひて命と繋ぐ意。旅人に物

此しぎ　此体に同ト。

たもとをくたし　袂と朽ちしめの意。

夢のうちのあだし身　何事もみな夢なりとあきらめて昔の事などは忘れたる體にの意。あだし身ははかなき身に同ト。

日にむかふ　日向の字と解剖して向ひたると呼び起す。

向ひたる名　適當の名と云ふ意。日向の勾當ところ呼び給ふべきにゝなり〳〵

力なくすてし梓弓　もはや力なくて弓引く事は打ち捨てたると云ふ。梓弓は梓の木にて作れる弓。新しき弓に弦を掛くる時は撓めても跡もどりのしやすきものなれば。踏ろに云ひかけたり。又弓は射たる時。弦の向きかへるものなれば云ふと見てもあるべし。

名の惡心　惡七兵衛の惡の字を惡心にかけて云ふ。

山は松風　目は見えねど人の思ふ事と證して。山は松風ふくと云へばうれ雲ぞと知り。荒磯に波の寄すると聞きては夕汐のさすぞと悟ると云ふ。

見ぬ花の　松風に夢のさむるが惜しきと云ふとわが身榮花の夢のさめたるに譬ふ。見ぬ花のさは盲目なれば云へるなり。

さすがに　さすやらんと云へるを受けて同音の詞を重ね。

もとをくたし一。萬事は皆ゆめの内のあだ一身なりとうちさめて。今ハ此世ゝなき物と。思ひきつたる乞食を。惡七兵衛景清なんど〳〵。呼ば〳〵此方が答ふべきか。其上我名は此國の。地「日向とは日ゝむかふ。向ひたる名をばよび給はで。力なくすて一梓弓。昔ゝ歸るれのが名の。惡心はれてさじと。思へどもまた腹立ちや。シテ「所ゝすみながら。地「ところゝすみながら。御扶持ある方ゃゝ。憎まれ申す者ならば。ひと〳〵ゝ盲の杖を失ふゝ似たるべ一。片輪なる身のくせとて。腹あ一くよ一なきいひごと。唯ゆる一れは一ませ。ワテ「目ころ聞けれど。地「目ころ聞けれども。人の思はく一言の內ゝ知る者を。山は松風。すは雪よ。見ぬ花のさむる夢の惜一さよ。さて又浦は荒磯ゝ。よする波もきこゆるは。夕汐もさすやらん。さすがゝ我も平家なり。物語はじめて御慰みを申さん。

われも平家なり　われも平家なれば其平家物語せんさの意。

我名もあらはるべし　乞食の息女よさて入丸の名もあらはるべしとなり。景清の自分と我さ云へるにはあらず。

シテ詞「いかゝ申〳〵候ふ。たゞいまはちと心にかゝる事の候ひて。短慮を申〳〵て候ふ御免あらうずるゝて候ふ。ワキ詞「いや〳〵いつもの事ゝて候ふほどゝ苦〳〵からず候ふ。又われらより以前ゝ。景清を尋ね申〳〵たる人はおく候ふか。シテ「いや〳〵御尋ねより外ゝ尋ねたる人はなく候ふ。ワキ「あら偽を仰せ候ふや。まさ〳〵う景清の御息女と仰せられ候ひて御尋ね候ひ〳〵物を。何とて御つゝみ候ふぞ。あまりゝ御痛はい〳〵さよ。是まで御供申〳〵て候ふ。急いで父御ゝ御對面候へ。ヒメ「のう自ころ是まで参りて候へ。恨めい〳〵やはるゝ〴〵の道すがら。雨風露霜をい〳〵のぎて参りたる心ざい〳〵も。いたづらゝなる恨めい〳〵や。さては親の御慈悲も。子ゝよりけるかや情なや。シテ「今まではつゝみかくすとれもひい〳〵よ。あらはれけるか露の身の。置きどころなや恥かい〳〵や。御身は花の姿ゝて。親子と名のり給ふならば。殊ゝ我名もあらはるべい〳〵

疎き人とも訪へかしとてなる人にても訪ひ来ぬ時は我と思はぬさて立腹せしほどの懇ありし身の報にの意。

一門の　平家一族と云ふ。

所せくすむ月の　船中所狭く窮屈に住むさ云ゝ事と澄む月にかけ。月の字より景清につゞく。

疎遠

一類　景清の一族従類。

名と取揖　中にて武略の名と取りたる景清さ云ふを取揖にかけたり。舟の左にある艫を取揖さ云ふ。

麒麟も老いぬれば　名駅も老いてはへこたれ馬に歩るの意。景清の末路を譬ふ。

と。思ひきりつゝすごすなり。我を恨みと思ふなよ。地「あはれげゝいゝ〳〵へは。疎き人とも訪へかい〳〵よ。正い〳〵き子ゝだゝよも。訪はれしと思ふ悲い〳〵さよ。歌「一門の住所せくすむ月の。景清は誰船の内ゝ。肩をならべ膝を組みて。一類うの以下武略さまざまゝ多けれど。名を取揖の船ゝのせ。主従へだてなかりいは。さも羨まれたり一身の。

なり。

ワキ詞「あらいたはいやまづかうわたり候へ。いかゝ景清ゝ申〳〵候ふ。御娘御の御所望の候ふ。シテ詞「何事ゝて候ふぞ。ワキ「八島ゝて景清の御高名の様がきこい〳〵めされたきよい〳〵仰せられ候ふ。そと御物語あつてきかせ申され候へ。シテ「是は何とやらん似合はぬ所望ゝて候へども。是まではる〴〵来りたる心ざい〳〵。

あまりよ不便よ候ふほどよ。語つてきかせ候ふべし。此物語すさ候はゞ。かの者をやがて古郷へ歸して賜はり候へ。ッキ「心得申し候ふ。御物語すさ候はゞ。やがて歸し申さうずるよて候ふ。シテ「いで其頃は壽永三年三月下旬の事なりよ。平家は船源氏は陸。兩陣を海岸よ張つて。たがひよ勝負を決せんと欲す。能登守教經のたまふやう。去年播磨の室山。備中の水島鵯越よ至るまで。一度も味方の利なかつし事。ひとへよ義經が計いみときよよつてなり。いかよもしてや九郎を討たん謀こうあらまほしけれと宣へば。景清心よ思ふやう。判官なればとて鬼神よても。あらばこそ。命をすてば安かりなんと思ひ。教經よ最期の暇乞ひ。陸よあがれば源氏の兵。あますまじとてかけむかふ。地「かげきよ是を見て。物々しや大ううらしやの態。うちものひらめかいて。刀の事。ひらめかしてに同じ。はむいたる刃向いたるの意。うちむかひたるに同じ。物々しや大ううらしやの態。うちものひらめかいて同じ。はむいたる刃向いたるの意。利なかつし事利益かりし事に同じ。いみとき甚しきに同じ。甚だすぐれたると云ふべきを略して用ふ。

ツテ「さもうしや方々よ。地「さもうしやと引きて云ふ。見ぐるしやの意。

三保谷　八島にあり。

かぶさのしころ　附きたるもの。　鬼のうしろに

なき跡となり。　わが死したらんあとくらき所の燈　吊ひ給はゝうの經文の功德と暗中の燈火。あし き道の標と も頼み力にして成佛すべしとなり。

にげよけるのがさじと。ッテ「さもうしや方々よ。地「さもうしやと引きて云ふ。見ぐるしやの意。かたくよ。源平たがひよ見る目も恥づかし。一人をとめん事は案の打物。小脇よかいこんで。なよがしは平家の侍惡七兵衛景清と。名のりかけなのりかけ。手取にせんとて追うて行く。三保の谷が着たりける。胄のしころを。取りはづしとりはづし。二三度逃げのびたれども。思ふ敵なればのがさじと。飛びかゝりか

道橋と頼むべー。さらばよとまる行くぞとの。只一聲をきゝのこす。これぞ親子のかたみなる。

班女

はんぢよ

元清作

花子　レテ
吉田少將　ワキ
同人從者　トモ
宿の長　狂言
前ハ美濃　後ハ京都

狂言詞「かやうに候ふ者は美濃の國野上の宿の長にて候ふ。さても我花子と申す上臈をもち參らせて候ふが。過ぎにし春の頃都より。吉田の少將とやらん申す人の。東へ御下り候ふが。此宿に御とまり候ひて。かの花子と深き御契の候ひけるが。扇をとりかへて御下り候ひしより。花子扇に詠め入り。閨より外にいづる事なく候ふほどに。かの人を呼びいだし追ひいださばやと思ひ候ふ。いかに花子。けふよりしてこれにはかなひ候ふまじ。とく〳〵何方へも御いで候へ。シテ「げにやもとよりも。定めなき世といひながら。うきふしをげき河竹の。流れの身こそ悲しけれ。地「わけ迷ふゆくへもしらでぬれ衣。野上の里を立ちいで。近江路なれどうきふしをげき河竹の。流れの身こそ悲しけれ。地「わけ迷ふゆくへもしらでぬれ衣。野上の里を立ちいで。近江路なれどうき人ゆゑ。別れしよりの袖の露。うのまゝ消えぬ身ぞつらき。

ワキ次第「歸るぞ名殘富士の嶺の。ゆきて都にかたらん。詞「是は吉田の少將とはわが事なり。さてもわれ過ぎにし春の頃東に下り。はや秋にもなり候へば。只今みやこに上り候ふ。道行「都をば。霞とともに立ちいでゝ。いくほどふる秋風の。關路より。また立ち歸る旅衣。浦山すさまじき美濃の國。野上のさとに着きにけり。詞「いかに誰かある。此所に花子といひし女に契りし事あり。いまだ此ところにあるか尋ねて來り候へ。トモ詞「畏つて候ふ。花子の事を尋ね申しつゝ候へば。長と不和なる事の候ひて。今は此ところにはゐず候ふ。ワキ詞「さては定めなきよし申し候ふ。

さらばよ　父。父子の詞。
とまるゆくぞ　子。
たゞ一聲と聞きのこすと云ひて　盲目なれば聞きのこすと云ひて父の方にて結びたり。

吉田の少將の契りし女。形見の扇と身に離さで戀ひわぶる餘り狂女となりたるか。つひにめぐり逢へる事を作れるなり。すべて扇をもて物語の種とす。上臈中臈下臈とは官女の上臈中臈下臈とは官女の等級に云ふ稱なるがうつりてはたゞ女の美稱に用ふ。

うきふし　竹の節にて。水邊に生ふるものなれば。流れといふ詞の序にしたるがつひに遊女の異名と爲れるなり。うきふしは憂き事といふに同じ。竹の緣にて節の字を用ふ。

河竹は流れの身　遊女は流れに從ひて世を渡る如きものなれば云ふ。

ぬれ衣の序さす。冤罪の意に用ひて野上のなど云ひて。衣の縞とひとのふたのなど稱ふる事あればなり。立ちも近江も緣語と別れしよりの　涙と露に譬へて。其實さもすぐに消ねたき憂を述ぶ。

都とげ鴈と共に出でしかど秋風ぞふく白河の關　後拾遺集の歌。

旅衣浦山の序なり。衣の裏の浦山の緣語。

乱　下賀茂と云ふ。

春日野の雲間をわけて生ひ出でくる草のはつかに見ゆし君かも　古今集の歌。草のまではつかにの序なり。はつかはほのかにと同じ。

なれ衣　身に着馴れたる衣。

夕暮は雲の旗手に物ぞ思ふ（天津空なる人を懐ふとて）　古今集の歌。雲の旗てとは旗のやうに棚引く雲と云ふ。其如く亂れての意。

うはの空に　心の虚空にうかれ出づると云ふ。あくがれは住所と離れてものゝさまよふ意。

上﨟再拝　懇すてふわが名はまだき立ちにけり人しれずこそ思ひそめしか　拾遺集の歌。人に知られず思ひ初めしに早も名は立ちけるよの意。

事ながら。もし其花子歸りきたりたる事あらば。都へついでの時は申し上せ候へとかたく申しつけ候へ。急ぐ間ほどなく都より着きて候ふ。われ宿願の子細あれば。是よりすぐに糺へ参らうずるにて候ふ。皆々まゐり候へ。

後シテ一聲「春日野の雪間をわけて生ひ出でくる草のはつかに見えし君かも　古今集の歌。草のまではつかにの序なり。はつかはほのかにと同じ。

なれ衣　身に着馴れたる衣。日を重ね月はゆけども。

夕暮は雲の旗手に物ぞ思ふ（天津空なる人を懐ふとて）　古今集の歌。雲の旗てとは旗のやうに棚引く雲と云ふ。其如く亂れての意。

世を秋風のたよりならでは。ゆかりをたらする人もなし。夕暮の雲の旗手に物を思ひ。うはの空にあくがれいでゝ。身をいたづらになす事を。神や佛も憐みて。思ふことをかなへ給へ。うれしからねの言や。

足拇箱根玉津島。貴船や三輪の明神は。夫婦男女のかたらひを。まもらんと誓ひれはしまず。この神々に祈請せば。などかあるのなかるべき。謹上再拝。戀ひすてふ我名はまだき立ちにけり。人に知られず思ひ初めしに早も名は立ちけるよの意。

地「人しれずこそ思ひそめしか。

げにや祈りつゝみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけらしも　古今集の歌。

一さある歌を取れり。今よりは懸せじとぞ思ひつゝ御祓して神に祈りたるに神は受け給はぬと見えてまだに懸のせらるゝよとの意。

心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん　晉公の詠と云ひ傳ふ。

眞如の月　心の迷を去りて自性に歸るを眞如と云ふ。うれを月に譬へて眞如の月と云ふ。

衣の玉　法華經の信者が其教を忘れたるを。或人親友の家にゆきて酒飲みて醉ひ伏したるに譬ふ。此時親友は賢珠を衣の裏に繋けておきたるにすべて醉うて知らざりしと云へり。珠は法華經や當る。こゝは本心は有りながら猥迷ふ心にかくされて。愚人となれるぞとなり。

うたてやな　いやな事と。なしろからぬ言となどの意。

シテ「げにや祈りつゝ。御手洗川と戀せじと。たれかいひけん虚言や。されば人心。まことすくなき濁江の。すまで賴まば神とても。うけ給はぬはことわりや。とてもかくても人しれぬ。思ひの露の。地「れきどころいづくならまし身の行方。心だに誠の道にかなひなば。いのらずとても神や守らんわれらまで。眞如の月はくもらじを。知らでほど〳〵人心。衣の玉はありながら。恨みありやともすれば。猶れなじ世と祈るなり。

トモ詞「いかに狂女。なほとてけふは狂はぬ面白うくるい候へ。

シテ詞「うたてやなあれ御覽ぜよ今までは。ゆるがぬ梢と見えつれども。風のさそへば一葉もちるなり。たま〳〵心すぐなるを。狂へと仰せある人々こそ。風狂じたる秋の葉の。心もともに亂れ戀ひの。あら悲しや狂へとな仰せありさむらひそよ。トモ「さて例の班女の扇は候ふ。シテ「うつゝなや我名を班女と呼び給ふぞ

班女團中秋扇色。楚王整上夜琴聲朗詠集の時。班女とは班婕妤と云ふ。

夏はつる扇と秋の白露といづれか先に（置かんとすらん）新古今集の歌。とはりと起臥に言ひかけたり。

月隈三重山一峯レ扇類レ之　止觀

といふ佛書の詞。

思ひの妻　思ひの種に同じ。

雞籠の山　本朝文粹に「農夫待レ雨雞籠之山欲レ曉」といふ詞あり。この曉けなんとしてといふ語より雞籠は出でたる詞ならん。されど處の名にや。よく尋ぬべし。原文は唐土の山の名なり。

翠根紅園　みどりのさばりなど掛けて美しき園と云ふ。

同穴　死しては一つの穴に埋められんと契りたる中といふ。

いつまで草の名。何時までもといふより掛かりて長きに比翼連理の云々もらすらん　楊貴妃の處に就くべし。

わがつまの　つまは妻とも夫とも云ふ。

秋より先に　秋の來ぬ前にといふより雞籠は出でたれんさなり。

あだし言葉　徒なる捨てことばの意。

頼めてなり。　は夫が妾と頼ましめてなり。あてにさせてなり。

隅雲の扇　本朝文粹に班婕妤團雪ノ扇といふ事あり。白氏文集に合歡扇は別に始と見ゆ。樞拾遺に「始より逢ふは別れと聞きながら曉しらで人と戀ひ居る」といふ歌あり。逢ひし縁なればの意。

月にかける月をかくして　扇の絵にかける月をなり。白氏文集扇の詩に「裁レ月人二團中一」とあり。

さる神も三重がされ　神の事に云ふは裝束の褶と三重にかさぬる事あればなり。扇にいふは三重の扇にて檜扇の四方の上を三重に張機の紙にて包む法あればなり。この二つと兼ぬ。

つまの色衣のまさ掛けたり。　つまの色衣の。

や。よ〳〵うれも憂き人の形見の扇てよふれて。うちれきが　昨

たき袖の露。故事までも思ひづいづる。班女が閨の内よは秋の

扇の色。楚王の臺の上よは夜の琴の聲。地「夏はつる扇と秋の白

露と。いづれか先よ起臥の。床冷ー や一人寢の。さびーき枕ー

て閨の月をながめん。地「雪をあつめて。春を惜ーむ。シテサシ

地クリ「月重山にかくれぬれば。地「雪をあつめて。春を惜ーむ。いつれか思ひの妻ならぬ。地「さびーき夜

「花巾上よちりぬれば。地「夕べの嵐あーたの雲。いつれか思ひの妻ならぬ。地「さびーき夜

半の鐘の音。雞籠の山よ響きつよ。明けなんとーて別れを催ー。

シテ「せめて閨もる月だにも。地「あばー枕に殘らずーて。又ひと

りねよ爲りぬるぞや。クセ「翠張紅閨よ。枕ならぶる床の上。なれ

ーふすまの夜すがらも。地「同穴の跡ゆめもなー。よしそれも同じ

世の。命のみをさりともと。いつまで草の露のまも。比翼連理

のかたらひ。其驪山宮の私語も。たれかきよつたへて今の世ま

でもらすらん。さるよても我夫の。秋より先よ必ずと。ゆふべ

の數はかさなれど。あだー言葉の人心。頼めてこぬ夜はつもれ

ども。欄干よ立ちつくしてて。うなたの空よとながむれば。夕暮

の秋風。あらー山れろー野分も。あの松をこうはれとづるれ。

我待つ人よりの。音づれをいつきかまー。シテ「せめてもの形見の

扇手よふれて。地「風のたよりとれもへども。夏もはや杉のまど

の。秋風ひやよかよふき落ちて。團雪の扇もゆきなれば。名を

きくもすさまーくて。秋風うらみあり。よーや思へば是もげよ。

あふは別れなるべー。其むくいなれば今さら。世をも人をも恨

むまじ。只れもはれぬ身のほどを。思ひつづけてひとり居の。

班女が閨ずさびーき。地「繪よかける。シテワカ「月をかくーて懐

よ。もちたる扇。地「とる袖も三重がされ。シテ「其色衣の。地「つ

かれこと　約束言に同じ。
鹿の音むしの音も　かれ〴〵の序。秋の末うの花のかれ〴〵に鳴るに言ひ掛く。

かたみの扇より　扇には裏表あるものなれば云ふ。

扇さは空言や　逢ふと扇の名に掛く。逢ふといふは空言での意。

かたみこう今ほあだなれこれなくは忘るゝひまもあらましものを　古今集の歌。

さすか又　扇と見れば思人に逢ひ居る心地すると云ふ。

まのかねこと。シテ「かならずと夕暮の。月日もかさなり。地「秋風は吹けども。萩の葉の。シテ「うよとの便もきかで。地「鹿の音虫の音も。かれ〴〵の契。あらよーなや。シテ「かたみの扇より。地「かたみの扇より。猶うられもてあるものは。人心なりけるぞや。逢はでぞ戀はうふ物を。

ワキ詞「いかゝ誰かある。

候へ。トモ詞「いかゝ狂女。あの狂女がもちたる扇みたきよーと申ー扇御覽じたきとの御事ゝて候ふ。まねらせられ候へ。シテ「是は人のかたみなれば。身を離さでもちたる扇なれども。形見こう今はあだなれこれなくは。忘るゝひまもあらまー物をと。思へどもさすがまた。うふ心地するをり〳〵は。扇とる間も惜ーきものを。人に見する事あらじ。

ロンギ地「こなたゝも。忘れがたみの言の葉を。磐手の森の下蹶。

いほでのもりの下つゆ　色に出づるの序。蹶蹋は色に出で咲くものなれば云ふ。磐手の森は陸中。

末の松山なみこえて　末の松山は遠くて見れば山の向ふに立つ波の見越されて。山と越ゆると見ゆるによりて。誠の波ハ越ゆる時こう忘れもせめさ。男女の間に譬へる詞と見ゆ。されば波こゆてさは契のかはりたるを云ふ。歸らざりしも波の縁。

とりふし黄昏に　時刻も黄昏なれば云ひて。黄昏にほのんゝ見ねしさいふ源氏物語の故事を用ひて扇の絵の事につゞけたり。故事は夕顔の巻にいでたり。

惟光にしろくめして　これも源氏の故事。惟光は源氏の従者なれば手燭と燈させて扇の歌を御覽下つる事あり。それと扇の絵の事に續けて云ふ。しろくは脂燭さも紙燭さも書きて室内を持ちあるく手燭。

扇のつまに掛く。

シテツレ　曾我十郎祐成
同　五郎時宗
従者　團三郎
同　鬼王丸
同　十郎母
同　狂言
狂言ハ　春日の局
伊豆

曾我十郎はこのたびの富士の牧狩を機會にして親の敵を討たんとする下心なれば。勘當ぜられし

蹶。色ゝいでずはうれぞとも。見てこうーらめこの扇。シテ「見てはさて。何の爲ぞと夕暮の。月をいだせる扇の繪の。斯くばかり間ひ給ふは。なゝの御爲おるらん。地「何ともよーや白露の。草の野上の旅寐せー。契の秋は如何ならん。シテ「野上とは東路の。末の松山たつ波の何か恨みん契りれく。シテ「形見の扇うなたにも。地「身ゝそへ持ちーこの扇。シテ「興のうちより地「とりいだせば。をりふーの黄昏ゝ。ほの〴〵見れば夕顔の。花をかきたる扇なり。此上は惟光ゝをろくめーて。ありつる扇御覽ぜよ。たがひにそれぞとも知られ白雪の。扇のつまのかたみこう。いもせの中の情なれ。

小袖曾我

こそでそが

作者未詳

シテツレ四人次第「命牡鹿の隱里。富士の裾野を狩らうよ。シテ詞

弟の五郎を母のもとに同道してうれしさなしに暇乞する事と作れり。さて水文中に其事なきに小袖さしも名づけたるは。十郎兄弟かれて期しつる事なれば形見に出づる事。曾我物語にあり。人の常に知る物語なれば此こゝろと用ひて水文に拘はらぬはかへりて面白し。後のものならば勘當曾我とかつけもやせんと思ふに。

命としかの　衣には狩場の事とのこまだらやむら消の雪と隈へて云ふ。鹿の子の斑毛にむら〳〵なる意と群山に云ひ掛けたり。

晨月夜　鹿に星毛と云ふものくある。千手に云ひ掛けて鎌倉の枕詞とす。

鎌倉殿　頼朝と云ふ。

東八箇國　頼朝の國すなはち相模武蔵安房上總下總常陸上野下野と云ふ。

祐經　工藤祐經。十郎兄弟の父を殺したる人。

入しれぬ大内山の山守は木がくれて（のみ月と見るかな）　百首歌の歌。

矢ごろ　矢と放つに好き加減と名とふ下のれにく高く揚ぐる意。

富士の嶺の如く　富士の嶺の如く揚ぐる意。

數ならぬ賤しき身には却りて君の御ためも恐しからずの意。

「是は曾我の十郎祐成にて候ふ。扨も頼朝ふじの御狩に御いで候ふあひだ。我等もまかりいで候ふ。また是なる時宗は。母よ小袖さしも名づけたるは。十郎兄弟かれて期しつる事なれば形見に出づる事。曾我物語にあり。人の常に知る物語なれば此こゝろと用ひて水文に拘はらぬはかへりて面白し。後のものならば勘當曾我とかつけもやせんと思ふに。

命としかの　衣には狩場の事とのこまだらやむら消の雪と隈へて云ふ。鹿の子の斑毛にむら〳〵なる意と群山に云ひ掛けたり。

晨月夜　鹿に星毛と云ふものくある。千手に云ひ掛けて鎌倉の枕詞とす。

鎌倉殿　頼朝と云ふ。

東八箇國　頼朝の國すなはち相模武蔵安房上總下總常陸上野下野と云ふ。

祐經　工藤祐經。十郎兄弟の父を殺したる人。

入しれぬ大内山の山守は木がくれて（のみ月と見るかな）　百首歌の歌。

矢ごろ　矢と放つに好き加減と名とふ下のれにく高く揚ぐる意。

富士の嶺の如く　富士の嶺の如く揚ぐる意。

數ならぬ賤しき身には却りて君の御ためも恐しからずの意。

候ふ。扨も頼朝ふじの御狩に御いで候ふあひだ。我等もまかりいで候ふ。また是なる時宗は。母よ小袖さしも名づけたるは。十郎兄弟かれて期しつる事なれば形見に出づる事。曾我物語にあり。人の常に知る物語なれば此こゝろと用ひて水文に拘はらぬはかへりて面白し。後のものならば勘當曾我とかつけもやせんと思ふに。

「是は曾我の十郎祐成にて候ふ。扨も頼朝ふじの御狩に御いで候ふあひだ。我等もまかりいで候ふ。また是なる時宗は。母よ小袖さしも名づけたるは。十郎兄弟かれて期しつる事なれば形見に出づる事。曾我物語にあり。人の常に知る物語なれば此こゝろと用ひて水文に拘はらぬはかへりて面白し。後のものならば勘當曾我とかつけもやせんと思ふに。

シテ「時〳〵も頃は建久四年。五月半の富士の雪。五月雨雲よふりませて。かのこまだらやむら山の。裾野の鹿の星月夜。鎌倉殿の御狩の御遊。げにたぐひなき御事かな。

シテ「東八箇國の兵ども。皆御供よ參るなれば。四人「定めて歟の祐經も。御供申さぬ事あらじ。たとひ詞つまでの。事は夏野の鹿なりとも。ねらひて見ばやと大丈夫の。狩人よまされうち出づる。歌「人しれぬ大内山の山守も。木隱れて。それとは見えじ梓弓。矢ごろにならば鹿よりも。祐經を射とゞめて。名をふじの嶺にあげばやと。思ひ立ちぬる狩衣。たとへば君の御とがめ。數ならぬ。身にはなか〳〵恐れなし。

シテ「時〳〵も頃は建久四年。五月半の富士の雪。五月雨雲よふりませて。かのこまだらやむら山の。裾野の鹿の星月夜。鎌倉殿の御狩の御遊。げにたぐひなき御事かな。

シテ「東八箇國の兵ども。皆御供よ參るなれば。四人「定めて歟の祐經も。御供申さぬ事あらじ。たとひ詞つまでの。事は夏野の鹿なりとも。ねらひて見ばやと大丈夫の。狩人よまされうち出づる。歌「人しれぬ大内山の山守も。木隱れて。それとは見えじ梓弓。矢ごろにならば鹿よりも。祐經を射とゞめて。名をふじの嶺にあげばやと。思ひ立ちぬる狩衣。たとへば君の御とがめ。數ならぬ。身にはなか〳〵恐れなし。

シテ詞「是にて候ふ。しばらく御待ち候へ。某まゐりて案内を申さうずるにて候ふ。如何に案内申〳〵候ふ。狂言「誰にて御座候ふぞ。や。祐成の御參りにて候ふ。シテ「さん候ふ某が參りたる由申〳〵候へ。狂言「畏つて候ふ。大かた殿よりの御詫には。祐成の御參りならば申せ。時宗の御參りならばな申〳〵うとれほせいだされて候ふ。

シテ詞「是にて候ふ。しばらく御待ち候へ。某まゐりて案内を申さうずるにて候ふ。如何に案内申〳〵候ふ。狂言「誰にて御座候ふぞ。や。祐成の御參りにて候ふ。シテ「さん候ふ某が參りたる由申〳〵候へ。狂言「畏つて候ふ。大かた殿よりの御詫には。祐成の御參りならば申せ。時宗の御參りならばな申〳〵うとれほせいだされて候ふ。

シテ「唯某がまゐりたると申〳〵候へ。狂言「いかに申〳〵上げ候ふ。祐成の御參りにて候ふ。母詞「此方へと申〳〵候へ。あらめづらし〳〵や十郎殿。いづくへの序ぞや。母がために態とはよも。シテ「さん候ふ久〳〵く參らず候ふ程に向顔のため。又は富士のみかりとも申〳〵候ふ程に。母「されば〳〵ころ思ひ〳〵事よ君ぞため。御狩にいづるついでぞや。シテ「いつ〳〵か親子の御たはむれ。めづら〳〵がほにうらやまし〳〵やと。時宗「思ひながらも時宗は。不孝の身なれば物のひまより。地「高間の山のみねの雲。よろにのみ見てや止みなん

シテ「唯某がまゐりたると申〳〵候へ。狂言「いかに申〳〵上げ候ふ。祐成の御參りにて候ふ。母詞「此方へと申〳〵候へ。あらめづらし〳〵や十郎殿。いづくへの序ぞや。母がために態とはよも。シテ「さん候ふ久〳〵く參らず候ふ程に向顔のため。又は富士のみかりとも申〳〵候ふ程に。母「されば〳〵ころ思ひ〳〵事よ君ぞため。御狩にいづるついでぞや。シテ「いつ〳〵か親子の御たはむれ。めづら〳〵がほにうらやまし〳〵やと。時宗「思ひながらも時宗は。不孝の身なれば物のひまより。地「高間の山のみねの雲。よろにのみ見てや止みなん

六かたごの　大奥様と云ふ事。

な申しう　申す勿れの意。

わざとはよも　わざ〳〵とはよも尋ねて來るまじの意。

物のひまより　ようにのみの句にかゝる。母の姿を透見して喜む意。

高間の山の　新古今集の歌に「よろにのみ見てや止みなん富城や。高間の山の峯の白雲」と有るを引く。高間山の雲の如く見るばかりにて近よりがたくて止むべきかの意。

なん。れなじ子に。同じは母うのもり乳母。隔なくこう育てゝに。さも引きかへて祐成よは。いろ〳〵の御もてなし御いはひごとの御盃。たとへば時宗は。後よ生れしばかりなり。正しく同じ子の身よて。御れほえ輦垣の。へだてあるこうかなしけれ。

シテ詞「日本一の御きげんよて候ふ。あれへ御参りあつて。春日の局をもつて申され候へ。時宗詞「某が事は御きげんいかゞはかりがたく候ふあひだ。先々まゐり候ふまじ。シテ「唯某よ御まかせなつて。急いで御参り候へ。時宗「如何に春日の局。時宗が参りたる由うれしく申し候へ。いつしかもり乳母まで。心替りしかすが野の。飛火の野守。いでゝだに見候はぬぢや。詞「時宗の局をもつて申され候へ。母詞「あらふしさや。祐成はがまゐりたる由うれしく申し候へ。母詞「時宗只今きたりぬ。九上の禪師は寺よあり。うれならで子はなきよ。

かすが野の　古今集に「春日野の飛火の野守いでゝ見よ。今焼日あり若菜つみてん」とある歌の上の句と取りて云ふ。春日の局と春日野に云ひ掛けたれば也。飛火は野の名。

九上の禪師　これも兄弟にて趙後の國の九上と云ふ處に出家してある人。禪師は僧の資格の名。

時宗といふは誰ぞう。や。今思ひいだしたり。箱根の寺に有りし箱王と云ひしえせ者か。うれならば母が出家になれと申しをを聞かざりしほどに勘當ぞ。時宗「御ちかごとに勘當せしに。れして是まできたれるは。猶かさねての勘當ぞ。伊豆箱根富士權現も御覽ぜよ。なほ此後も勘當するかたもなき此身かな。うたてやせめていま一目。御簾几帳も下りたり。あら情なの御事や。

シテ「祐成は。かくとも知らで時宗が。時移りたり事よきかと。中門を見やりつゝ。早こなたへと招けば。時宗「招かれて山のかせき。地「泣く〳〵來りたり。打たれても親の杖。なつかしければ去りやらず。シテ詞「さて御きげんは何と御座候ふぞ。時宗詞「以ての外の御機嫌にて。猶かさねての御勘當と仰せ出だされて候ふ。

伊豆箱根富士權現　神に譬へて云ふ詞。伊豆は三島明神。箱根は箱根權現。

御ちかごと　誓言と云ふ。

部屋戸　部屋は戸の種類。やりごとはふきいありて横に引きやり明くる戸。

うたてや　かなしや程の意。

御簾几帳　御簾と几帳と。共に隔に垂るゝもの。

かせきく〳〵の恕。　鹿の異名。鹿の如く泣くにせもの意。にくみて云ふ詞。

母詞「如何に誰かある。狂言詞「御前に候ふ。母「時宗が事を申さば。祐成ともに勘當と申〜候へ。狂言「畏つて候ふ。いかに申〜候ふ。れて候ふ。シテ詞「まづ畏つたると申〜候へ。某存ずる子細の候ふあひだ。此たびは同心にて申さうずるにて候ふ。時宗詞「いや〳〵某はまゐり候ふまじ。シテ「唯御參り候へ。いかに申〜候ふ。われらが親のかたきの事。世に隱れなく候ふところに。餘りに便なく候ふあひだ。時宗がことを申〜直〜。つれて御狩りに出づべき所に。時宗が事を申さば。祐成共に御勘當と候ふや。よく〳〵是を案じ見るに。ク「總じて祐成をも誠は思ひ給はぬぞや。地「たとひ時宗出家のいとまを申すとも。兄祐成に郎等もなし。ーかも身に思ひあり。れのれらさへ〳〵見捨つるかと。かへつて御ー〜かり候ひてこそ。慈悲の母とも申すべけれ。シテサシ「うれ

いかに申し候ふ　是より母に述ぶる詞。

郎等　家來の者。

河津が子ども　名のれり。　父は河津三郎と

弘法　佛法を弘むると云ふ。

同宿　同寺の僧。

墨衣　僧の衣なると墨の縁にて

浦島に云ひかけ。浦島の箱を龍宮より持ち歸りし話あるにより

て箱根とつゞけたり。

中々俗には　俗には僧ならぬ人と云ふ。知りて僧にならざりし方がましなりの意。

現世安穩後生善所　此世にては安穩に。後生にては極樂にの意。

廻向　手向くる事。

かりくら　狩場と云ふ。

に時宗を法師よならぬとの御勘當。たとひ仰せよーたがひ。出家仕り候ふとも。地「われらが事は世よかくれなー。あれ見よ河津が子供ころ。敵をのがれんとの出家。正〜く弘法のためならず。箱根寺よて。明暮くやーと思ふならば。中々俗よは劣るべー。同宿もれもひ賤ーまば。心も染まぬ墨衣の。浦島が子のクセ「時宗は。箱根よ有りーたるーよ。法華經一部よみれほえ。常は讀誦ー母上の。現世安穩後生善所と祈念する。又は毎日よ。六萬返の念佛。父河津殿に廻向する。かほどよ他念なき身を。此三年不孝蒙る。恩顏を拜せねば。御戀ーさもひとつ。又は狩場への門出。御暇戀ーさ。一方ならぬ望みなり。大かた治まる御代なれども。狩場や漁よ。不慮のあらうひある物を。シテ「其うへ我らは。狩場にれいて例あー〜。地「昔を思ひ伊豆のれくの。赤澤山のかりくらよて。父も失せさせ給はずや。今とても。狩

塲とあらばなどー。も。御心ゝもかけざると。恨みがほにも兄弟は。泣く〳〵立つて出でければ。母「母は聲をあげ。あれとめ給へ人々よ。地「不孝をも勘當をも。ゆるすぞ〳〵時宗とて。なくなくいでさせ給へば。兄弟二人「兄弟はうれー泣きゝ。ふーまろべばや。地「みる人も思ひやりて泣き居たりや。

母詞「祐成申すゝよつて。時宗の勘當ゆるすゝとてあるぞ。近うきたりて。狩塲への門出いはひて御いり候へ。シテ詞「如何ゝ時宗ちかう參りて。この年月の御物がたり申ー候へさるにても。地「此ほど時宗が。盡す心ゝ引き替へて。いまはいつーか思ひ子の。母の情け有り難や。あまりのうれーさゝ。祐成御酌ゝ立ちてとり〳〵。時宗と共ゝ祝言の。地「歌ふこゑ。兄弟二人「たかき名を。雲井にあげてふじの根の。地「雪をめぐらす舞のかざー。地「舞のかざーの其ひまよ。兄弟目をひき。これやかざりの親子

毛をめぐらす　舞曲の名。
目とひき　目くばせして出立を急ぐ意。

かへる山　山の名に云ひかく。但し此文に關係ある山には非す。
嗔恚の焔を焔に譬ふ。いきどほりの烈しき胸の煙と焔の字より煙と出だし富士の煙の事にかけて云ふ。富士たろし　富士の山を吹きおろす風。
清見が關　駿河にあり。月を清く見ると云ひかく。

節シテ　ツレ
役シテ　ワキ
農ハ　同女
北野の神主
鹿島の神主
京都

神慮を美しく遊べん爲に春のけしのもて製はせだるに作なり。これは伊勢大神宮鹿島の神主なるべきに鹿島と云ふは。むかし倭姫皇女大神の教にて給ひし時。中臣の祖大鹿島命より宮柱を五十鈴の川上に建て祭主と爲すとあれば其子孫なるゆゑ斯く云ふならんと古註に云へり。

右近の馬塲　右近衛府に屬せる馬塲。一條大宮にあり。
櫻狩あめは降り來ね同くはぬるとも花の陰（にかくれん）　拾遺集の歌。花見に來て雨にあひたれば花の陰にこうかくれめの意。櫻狩は花の頃愛賞するをいふ。この歌もあれど先づ花見に行く事と心得べし。

右近

うこん

ワキ次第「四方の山風のどかなる。雲井の春ぞ久ーき。詞「うもー〳〵是は鹿島の神職何某とはわが事なり。われ此度都ゝ上り。洛陽の名花殘りなく一見仕りて候ふ。また北野右近の馬場の花。今日は右近の馬場の花を今をさかりなるよー承り候ふあひだ。道行「雲の行く。うなたやーるべ櫻がり。なのめばやと存じ候ふ。雨は降りきぬれなじくは。ぬるとも花の陰ならば。いざや宿ら

元清作

春風桃李花開夜　白氏文集の詩。見渡せば柳桜をこきまぜて（都ぞ春のにしきなりける）　古今集の歌。花車　八重一重みねて云ひかく。三重を見ねにひとりせし　伊勢物語に。「右近の馬場のひとりの日むかひに立てたりける車に女の顔のよろしかりければ」と云ふ文あり。此ひとりもいふ事に古来種々の説あり。伴信友の説には。五月五日六日内裏にて騎射の御遊あるべき式の行はれぬ時は。五日は左近の馬場。六日は右近の馬場にて代りに行はるる。其六日を右近の馬場の日と云ふなり。されば「ひとりの日むかひに立てたる車」と云ふ意なり。「ひとりの日向ひに立てたる車と此文は右近の馬場の日。

ん松かげの。ゆくへもみゆる梢より。北野の森もちかづくや。右近の馬場に着きよけり。詞「急ぎ候ふ程に。是ハはや右近の馬場ノ着きて候ふ。あれをみれば花見の人々とみえて。車をならべ興をつゞけ。まことよれもーろう候ふ。ーばらくやすらひ花をながめばやと存じ候ふ。

シテサシ「春風桃李花のひらくるとき。人の心も花やかに。あくがれいづる都の空。げよのどかなるときとかや。シテツレ一聲「見渡せば。柳櫻をこきまぜて。錦をかざる花ぐるま。シテ「くる春ごとよさろはるよ。二人「心もながき氣色かな。地「花見車の八重一重。三重みえて櫻の色々よ。ひをりせー。右近の馬場の木のまより。かげも匂ふや朝日寺等の。春のひかりもあまみてる。神の御幸のあとふりて。松も木高き梅がえの。立枝もみえてくれなゐの。はつ花車めぐる日の。なかえや北よつゞくらん。

の。日向に立てたりける車と心得べし。また近藤芳樹の説には。ひとりの日は引折の日と云ふ事にて折目正しき装束と着るべき晴れの日と云ふ。右近の馬場にては四日と六日と射礼ありの。六日の方と云へりさなり。この説あるひは然らん。但しここはたゞ伊勢物語の詞を用ひたるのみにてひとりに意あるには非す。

朝日寺　北野にあり。

あまみてる　天満宮の神の御幸筑紫より北野の神に神靈をうつし給ふより北野の枕詞と云ふ。

初花車めぐる日の　初花を花車にかけて廻る日につゞけ。春の日の永き意とながにかけて北野の花見なれば北につゞくくらんとは云へり。つゞく意。ながにはまた立ちつゞく意。車の前に出でたる長き木。

遠見二人家一花便入　白氏文集の詩。はるかになかめて花さへあれば誰家にでも入るの意。

みずもあらず見もせぬ人の懸しくは　伊勢物語の歌。かのひとりの日むかひに立てる女車に業平のかくりし歌なり。見わでもなく見たでもなき人がこんなに懸しきは何の故ならん。うのために今日はなかめくらすべきかの意。

（知るしらぬ）何かあやなくわびていはん　思ひのみこそしるべなりけれ　古今集の歌。知りたる人知らぬ人の差別は不用なり。思を案内さして達ふべければの意。

ワキ「のどかなる頃はやよひの花見とて。右近の馬場の並木の櫻の。陰ふむみちにやすらへば。シテ「げよやはるかよ人家をみて。花あれば即いるなればひをみれば女車の。所からなる昔語り。思ひぞいづる右近の馬場のこひーくは。あやなく今日やながめくらさん。是れ業平の此所よて。女車をよみしー歌。今更れもひいでられたり。シテ「あられもーろのくちずさみや。右近の馬場のひをりの日。むかひよたてる女車の。業平の。所からなる昔語り。はづかーながら今はまた。我身の上よ業平の。何かあやなくわきていはん。れもひのみこそなれば。今またかやうよ事問ふ人も。いつなれもせぬ人なれども。シテ「たゞ花ゆゑよ北野の森にて。ワキ「言葉をかはせば。

シテ「みずもあらず。地「みもせぬ人や花の友。ーるもーらぬも花の陰よ。相宿りーてもろ人の。いつーかなれて花車の。榻立てて本のもとよ。下りゐていざやながめん。げよや花のもとよ。かへらん事をわするゝは。美景よりて花心。馴れ〳〵うめてながめん。いざ〳〵馴れてなぞめん。百千鳥。花よなれゆくあだ〳〵身は。はかなき程ようらやまれて。うはの空のこゝろなれ。

ロンギ地「げに名よーれふ神がきや。北野の春もときめける。神の名所かず〳〵よ。シテ「なかむれば。都の空のはるゝ〳〵と。霞みわたるや北野宮居。御覧ぜよ時をえて。花櫻葉の宮所。地「花の御こそめの色わけて。紅梅殿や老松の。シテ「緑よりあけうめて。ひとよ松もみえたり。地「日影の空もあかねさす。シテ「むらさきのゆきーめのゆき。地「のもりは。みずや君が袖。ふるき御幸の

花下忘レ歸因二美景一　白氏文集
花心ものにつれて移り易き心を云ふ。　春鳴くすべての鳥と云ふ。
もしぢずり花になれゆくあだし身はかなきほどにうらやまれぬる　古今和歌六帖の歌。百千鳥の花に馴るゝ身はつひに逢ふ愁ありてはかなきものなれうはの空なほ戀まるゝの意。　上の空に心の浮かるる意。

櫻一の宮　北野社内にあり。

こそめ　濃染は色の深きと云ふ。
紅梅殿や老松　共に社内に祭りたる神。
一夜松　これも社内の祭神。
あれさす　紫の枕詞。
むれさす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖振る　萬葉集

の歌。紫野や標野と袖うち振りつゝ君がゆくと野守は見すやの意。
ふるき御幸　北野に御幸ありし事見ゆ。
御興岡　北野にあり。

御本地　神の本体は佛なりと云ふ說むこなはれし故に此語あり。
末社と云ふ。　本社に對して附屬せる社を云ふ。

あさまには何と淺はかには何とせしてか言はんと岩代にかけて待つの序とす。岩代は紀伊にて松をよめる古歌あり。
ひさかたの　天の枕詞。

ものみとて。車も立つや御興岡。是ぞ此神の御旅居の。右近の馬場わたり。神幸ぞたつとかりける。

ワキ詞「あらありがたや。守りの神とは拠々いづれの靈神よ社の御本地を。なほ〳〵をーへれはーませ。シテ詞「まことは我い此神の末社とあらはれ君が代を。守りの神とは思ふべーし。ワキ「よく〳〵きけばありがたや。守りの神とは拠々いづれの靈神よて。かやうよあらはれ給ふらん。シテ「あらはづかーや神そとは。あさまよはなよといはーろの。地「待つことありや有明の。月もくもらぬひさかたの。天照神にては。櫻の宮と顯はれ。こゝよ來北野のさくらばの。神とゆふべの空晴れて。月の夜神樂をまち給へと。はなよかくれうせにけりや。花よかくれ失せよけり。

ワキ歌「げよ今とても神の代の。ちかひは盡きぬーるーとて。神と君との御恵み。まことなりけりありがたや。

花明二上苑一輕軒臨二九陌之塵一（詩集の右。上苑は漢の武帝の園。輕軒はかろき車。九陌は九衢のちまたなればち都のみち。

櫻の宮　伊勢内宮の境内にあり。

あらはしぎぬの　舞ふ時袖を頭にいただくをかざすと云ひ。花を頭に挿すをもかざすと云ふ。こゝは二つを兼ぬ。

雲をめぐらす　舞の手。

櫻衣　古の衣の色の名。たもて白うら紫を云ふ。

花鳥　花と鳥と二つなり。

雲のはかぜ　雲の端と云ふ調あるを鳥の縁により羽風に云ひかけ。北風と共に神は天つ空に上らせ給ひけりとの意。

後シテ「天皇の賢き御代を守るなる。右近の馬場の春を得て。花上苑に明ぼのにて。輕軒九陌の塵ゝ変る神心。和光の影も曇なき。君の威光も影高く。花もゆるがず治まる風も。のどかなる代のあらはれ給ひ。シテ「こゝゝ北野の神の宮居ゝ。地「花櫻葉の神と地「月も照りうふ花の袖。雪をめぐらす神かぐらの。手の舞足ぶみ拍子をろろへ。聲すみわたる雲のかけはゝ。花ゝ戯れ枝ゝむすぼゝれ。かざゝも花の糸櫻。シテ「治まる都の花盛り。地「治まる都の花盛り。東南西北も音せぬ浪の。はなも色添ふ北野の春の。御池の水ゝ。みかげをうつしてあらいれ。曇らぬ威光を顯はゝさぬの。袖もかざゝの花ざかり。うつゝうつろふ櫻衣の。裏吹きかへす梢にあがり。枝ゝ木傳ふ花鳥の。とぶさにかけり雲ゝつたひ。はるかゝあがるや雲のはかぜゝ。神はあがらせ給ひけり。

シテ子方ワキ大臣ツレ枕の主ワキツレ旅人

もろこし　蜀の國のかたほとりに生ると云ふ。

少年わり。粟飯一炊の間に帝と爲り仙と爲り有らゆる榮花を見つるが。忽に夢さめて茫然と起き上り。

名譽心も利達心も失せて悟と開きしと云ふ事と。唐土の物語により。前は歌舞音樂の響き宮殿に滿ち。後は一聲の松風茅屋に落ちて心耳を洗ふ。讀者の魂一たびは盛生と共に躍り。一たびは盛生と共に茫然たるべし。

浮世の旅　憂き世の旅に迷ひ來て世と厭ふ心よりまうね浮世の意にも通はし用ふ。

旅の如き浮世の道に踏みまよふ身の夢路はいつまでならん。

今出で立つ旅の事に掛け。後に見るべき夢の事まで含ませて云ふ。

知識　佛道に達したる人を云ふ。

及ぼしては唯ものゝ道理を説いて人を教化する者をも云ふべし。

一大事　我一生盛世の道を云ふ。

邯鄲

かんたん　古名　邯鄲枕

又　盧生　　元清作

シテ次第「浮世の旅ゝまよひきて。夢路をいつと定めん。ナシ「是は蜀の國のかたはらゝ。盧生といへる者なり。詞「われ人間ゝありながら佛道をもねがはず。たゞ茫然とあかし暮すばかりなり。誠や楚國の羊飛山ゝ。貴き知識のまし〳〵ますよし承り及びて候ふ程ゝ。身の一大事をも尋ねばやと思ひ。只今やうひさんへと急ぎ候ふ。道行「住み馴れし〳〵。國を雲路のあとゝ見て。山又山を越えゆけば。うことゝもなき旅衣。野暮れ山くれ里くれて。名ゝのみ聞きし邯鄲の。里ゝもはやく着きにけり。シテ詞「急ぎ候ふ程ゝ。是はゝや邯鄲の里ゝ着きて候ふ。未だ日は高く候へども。此所ゝ旅宿せうずるゝて候ふ。

シテ詞「いかゝ案内申し候ふ。狂言「シカ〳〵。シテ「是は旅人ゝて候ふ。

候ふ。一夜の宿を御かし候へ。狂言「シカ〳〵。シテ「是は蜀の國のかたはらよ。盧生といへる者なり。われ人間よりありながら佛道をもねがはず。たゞ茫然とあかし暮らすところに。楚國のやうひさんよ。たつとき知識のまします由承り及びて候ふ程に。身の一大事をもたづねばやと思ひたちて候ふ。狂言「シカ〳〵。シテ「さて其まくらはいづくに御座候ふぞ。狂言「シカ〳〵。シテ「さらば立ち越え一睡見うずるよて候ふ。狂言「シカ〳〵。シテ「さてハこれなるが聞き及びよ。邯鄲の枕なるかや。是は身をしる門出の。世のこゝろみよ夢のつげ。天のあたふる事なるべし。歌「一村雨のあまやどり。日はまだ残る中宿よ。かりねの夢を見るやと。邯鄲の枕にふしよけり。

ツキ詞「如何よ盧生よ申すべき事の候ふ。シテ詞「うもいかなる者ぞ。ツキ「楚國の帝の御位を。盧生よゆづり申さんとの。勅使是まで参りたり。シテ「思ひよらずや王位よは。うも何ゆゑようなはるべき。ツキ「是非をばいかではかるべき。其瑞相こうまでまいすらめ。はや〳〵興よめさるべし。シテ「こはうも何と夕露の。光りかゝやく玉のこし。乗りもならはぬ身のゆくへ。ツキ「かくるべきとは思はずして。シテ「天よもあがる。ツキ「こゝちして。地「玉の御輿よ法のみち。栄花の花も一時の。夢とはしら雲の上。上人となるぞふしぎなる。有りがたの氣色やな。もとより高き雲の上。月も光はあきらけき。雲龍閣や阿房殿。光もみちゝて。げよも妙なる有様の。庭よは金銀の砂を敷き。四方の門邊の玉の戸を。出で入る人までも。光を飾るよろほひは。誠や名よきよし。寂光の都喜見城の。たのしみもかくやと。思ふばかりの氣色かな。千貨萬貨の御寶の。數をつらねてさゝげ物。千戸萬戸のはたのあし。天よ色めき地よひゞく。

代をほち給ふべき代と有つと云ふ。天子と爲りて代をほち給ふべきすゐさう　めでたき人相。

夕露の玉と云ふ　光りかゝやくの形容。露の玉と云ふ意に續けたり。

法の道の夢と覺くにうれさも知らでの意に用ふ。たゞし乘の文字に云ひかけたるが主なり。　佛法にては榮花も一時

四禪閣子の御殿の名。　阿房殿　共に唐土の天

玉の戸　玉にて作れる門の戸。

寂光の都　佛の住み給ふ都。
喜見城　天上の宮城。
千貨萬貨　種々の寶。
千戸萬戸　家〳〵に同じ。
は・のあし　儀式に立て裝ひだる所とあし。旗の長く垂れ下りたる旗の事。
しと云ふ。　旗の長く垂れ下りたるが色美しく天に打靡くの意。

鎖の聲　風の物を吹く音を鎖と云ふ。こゝは翠千巌の旗に風の觸るゝ音なり。

長生殿裡春秋富。不老門前日月遲　明詠集の詩。長生殿も不老門も皇居の名なれば其高義を祝して云ふ。春秋富また日月遲ゝは月日の靜に過き行きつゝ此まゝにて何千萬年經べきか知られぬ意。但し富めりと云ふべきを留めたりとかへたるは字形の似たるよりの誤つくる時に誤れるにや。又はこゝさらに作りかへたるにや。いづれにても閒ゆ。留めたりは長く殘して留めむくの意。

てんのこんづ　天の狹の意。

かうがいのはい　流盃の盃と書く。流盃は瀧の氣なりと字書に見ゆ。

まさり草　菊の異名。

鎖の聲もれびたゝ〳〵ー。シテ「ひがー〳〵三十餘丈ゝ。地「あろかねの山を築かせては。こがねの日輪を出だされたり。シテ「西ゝ三十餘丈に。地「こがねの日輪を出だされたり。たとへばこれは。長生殿の内ゝは。春秋をとゞめたり。不老門の前ゝは。日月遲ーと云ふ心をまなばれたり。大臣詞「如何ゝ奏聞申すべき事の候ふ。御位につき給ひてははや五十年なり。然らば此仙藥をきこーめさば。御年一千歳までたもち給ふべー。さる程ゝ天のこんづやかうがいのはい。これまで持ちて參りたり。シテ詞「うも天のこんづとは。大臣「是れ仙家の酒の名なり。シテ「かうがいのはいと申す事は。大臣詞「れなじく仙家の盃なり。シテ「壽命は千世ぞと菊の酒。大臣「榮花の春も萬年。シテ「君も豐かゝ。大臣「民さかえ。地「國土安全長久の。榮花もいやまーゝ。なほよろこびはまさりぐさの。菊のさかづきとりぐ〳〵にいざや飲まうよ。シテ「めぐれや盃の。地「めぐれや盃の。ながれゝ菊水の流ゝひかれてとくすぐれば。手まづさへぎる菊ごろもの。花の袂をひるがへーて。さすもひくもひかりなれや。盃の影の。めぐるも空ぞ久ーき。子方「わが宿の。地「我宿の。菊の白露けふごとゝ。幾世つもりて淵となるらん。よもつきじよもつきし。藥の水も泉なればゝくめどもく〳〵いやまーゝいづる菊水を。のめば甘露もかくやらんと。心も晴れやかに。飛びたつばかり有明や。盃の影の。めぐるも空ぞ久ーき。子方「わが宿の。地「我宿の。菊の白露けふごとゝ。幾世つもりて淵となるらん。よもつきじよもつきし。藥の水も泉なればゝくめどもく〳〵いやまーゝいづる菊水を。のめば甘露もかくやらんと。心も晴れやかに。飛びたつばかり有明のゝよるひるとなきたのーみの。榮花ゝも榮曜にも。げゝ此上やあるべき。シテ「いつまでぞ。榮花の春もときはゝて。地「なほいく久ーく有明の月。シテ「月人男の舞なれば。雲の羽袖をかさねつゝ。よろこびの歌を。歌ふよもすがら。地「うたふ夜もすがら。日はまた出でゝあきらけくなりて。よるかと思へば。シテ「晝ゝなり。地「ひるかと思へば。シテ「月又さやれー。地「春の花さけば。シテ

手まづさへぎる　千手にいへり。

菊衣　表白く裡紫なる衣と云ふ。但しこゝは菊の文字にかけたるのみ。

さすもひくも　さすと云ふもひくと云ふも共に舞の手の名なると。盃にもさすひくと云ふ詞あればゝ之に掛けたり。

わが宿の菊の盃けふごとに幾世つもりて淵となるらん　拾遺集の歌。菊ににくはかなき露か。年の九月九日毎につもりゝくて幾世にならば淵ともなるべきぞと末長き事と云ひて祝の歌とす。

甘露　天の酒と云ふ。また諸天不死の神藥と云ふ。

月人男　月の異名。こゝは天上の舞くらゐの意。

「紅葉も色こく。地「夏かと思へば。シテ「雪もふりて。地「四季をかり〳〵は目のまへまて。春夏秋冬萬木千草も。一日よ花さけり。れもーろやふーさやな。かくて時過さ頃されば。五十年の榮花もつきて。誠は夢の中なれば。皆きえ〳〵と失せ果てゝ。有りつる邯鄲の枕の上よ。眠の夢はさめよけり。

シテ「盧生は夢さめて。五十の春秋の。榮花もたちまちよ。たゞ茫然とれきあがりて。シテ「さばかり多かりし。地「女御更衣の聲ときゝーは。シテ「松風の音となり。地「宮殿樓閣は。シテ「たゞ邯鄲のかりのやど。地「榮花のほどは。シテ「五十年。地「さて夢の間は粟飯の。シテ「一炊の間なり。地「ふーさなりやはかりがたーや。シテ「つらゝ〳〵人間の有樣を案ずるよ。地「百年の歡樂も。命終れば夢ぞかー。五十年の榮花こそ。身の爲よは是までなり。榮花の望もよはひの長さも。五十年の歡樂も。王位

まばかり多かりし　今まではあれほど多く居たるの意。

女御更衣　天子の侍女。我國中古の定めは皇后中宮ありて次に女御次に更衣ありし事。源氏物語などに見て心得べし。

松風の音となり　云ふに云はれぬ句。

たゞ邯鄲の假の宿の如きか。　人間萬事かくの如きか。讀んで此處に至りて名文の味と知らざるは。それぞ誠に眼なく心なき人。

一枕の間　粟飯と一かしきする間の意に一睡を含めて云ふ。

南無三寶　驚をあらはす詞。

出離　浮世と出で離るゝ事。

知識は此枕なり　此枕を求むる道を教へ導く知識は羊飛山に訪ふにも及ばず此枕なりしと初めに應下て結ぶ。

シテ　千手の前

ツレ　平重衡朝臣

ワキ　狩野介宗茂

處ハ　鎌倉

三位中將重衡は生田の森の副將軍なりしが。一の谷にて生捕られ。狩野介宗茂に預けられたり。其時の事森永三年鎌倉に下り。芦にあづけられたり。千手との掛合の内かぎりなき閨夜の情あり。

相國　太政大臣の事。清盛とさす。

手越の長が娘　手越の宿は駿河の國。長は遊女を抱へ置く主人。

千手

せんじゅ

古名　千手重衡

氏信作

ワキ詞「これは鎌倉どの〳〵御内よ。狩野助宗茂よて候ふ。さても相國のれん子重衡の卿は。此たび一谷の合戰にいけどられ給ひ候ふを。某あづかり申ーて候ふ。朝敵のれん事とは申ーながら。頼朝いたはーく思し召され。よく痛はり申せとの御事よて。昨日も千手の前をつかはされて候ふ。かの千手の前と申すは。手越の長が娘よて候ふが。優よやさーく候ふとて。れん身ちかくめしつかはれ候ふを遣はされ候ふ事。まことよ有りがたきれん

志ょて御座候ふ。今日ハまた雨中れんつれ〴〵。酒をすゝめ申さばやと存じ候ふ。

シテ次第「琴の音そゝてれとづるゝ。これやあづまやなるらん。

サシ「それ春の花の樹頭ょ榮え。秋の月の水底ょ〳づむも。世のはかなさのありさまを。見てもあはれや重衡の。ろのいょ〳〵べは雲の上。かけても知らぬ身のゆく〳〵。波ょたゞよひ舟ょうき。さらぼよるべのよそならで。ありゝにか〳〵る有樣かな。歌「都ょだょもとゞめぬ。御涙なるをいたはしや。陸奥の。忍ぶょ堪へぬ雨の音。降りすさびたるをりゝもは。思ひの露もちり〴〵ょ。心の花も〳〵と。〳〵をるょ袖の色までも。けふのゆふべのたぐひかな。

シテ詞「いかょ案内申ゝ候はん。ワキ詞「誰ょて渡り候ふぞ。シテ「千手の前が參りたるよしうれ〳〵御申ゝ候へ。ワキ「ゝばらく

琴の音うへて重衡の方に音づるゝさなり。あづまやは舩馬樂の曲の名。琴に歌ふうたなり。但しこゝに種々の意を籠れたりと見ゆ。一つには琴にあづまごさゝいふ名あればうの意と掛く。二つには四角の家をあづまやと云へば重衡の捕はれたる室をも掛けたるならん。

ありしにかへるわが身に匹雜の返ろと云ふ。

都にだにもとゞめぬ身の都に留まらぬと歌ぬ。

陸奥の忍ぶの序。信夫郡さいふがあればなり。

降りすさびふ物のすゝむさまと云ふ。降り顯る意。

思ひの露と露に掛へ。心の花も〳〵の美しきと花にしをるゝ袖にかゝる。

花のしをるゝよりけふの夕のたぐひ我袖のしめる樣も雨中の夕の景色に似たりとなり。

れん待ち候へ。御機嫌をもつて申さうずるにて候ふ。

重衡サシ「身はこれ槿花一日の榮。命は蜉蝣の定めなきょ似たり。心は蘇武が胡國ょ捕はれ。岩崖の内ょとめられて。君邊を忘れぬこゝろざゝ。それはやうりがはかりことにて。敵をほろぼゝ舊里ょ歸る。われはいつとなく敵陣ょとめられて。縲紲の責を受くる。知らずけふもやら限ならん。あら定めなや候ふ。

ワキ詞「いかょ申ゝ上げ候ふ。千手のれん參りにても候ふ。重衡詞「唯今は何のためにて候ふぞ。よゝ〳〵何事にてもあれ。けふの對面いかなふまじきと申ゝ候へ。ワキ「畏つて候ふ。いかょ申ゝ候ふ。御參りの由申ゝて候へば。何とれぼゝえゝ候ふやらん。けふの御對面は叶ふまじきよし仰せ出だされて候ふ。シテ「これも私ょあらず。賴朝よりの御詞ょて。琵琶琴もたせてまゐりたり。此由かさねてれん申ゝ候へ。ワキ「御詞のれもむき申ゝて候へば。

槿花一日の榮さかりなると云ふ。朝顏のたゞ一日榮へ易き譬。

蜉蝣朝に生れて暮に死ぬると云ふ蟲なれば。是もはかなき譬。

心は蘇武が胡國ょ捕はれ。岩崖の内ょとめられて。君邊を忘れぬこゝろざゝ。

蘇武は前漢の臣なり。匈奴と云ふ夷狄に使せしに。匈奴は之を降らしめんとて岩屋にしこめ飲食と與へずなどして苦しめたるが遂に降らざりし忠臣。胡國はねびすの國を云ふ。

やうりが謀にて

やうりは廣利の誤にや。廣利に三萬騎の兵を添へて。蘇武の胡國に在る間に遣よりつかはしし事史記に見ゆ。

縲紲

縲は縛らるゝ事。但しこゝは唯うの苦しみと云ふ。誠に縛られたるには非ず。

琵琶琴

琵琶は重衡の彈く料。琴は千手の彈く料。

妻戸　二枚扉になりたる開き戸。

御簾の追風　御簾の方より吹き来る風。

みくしげん　まみくしげに同じ。化粧箱。

日見ね申さんの意。

出家　髪になる事。

おかりさまに　かりうめにに同じ。

これも私ゝあらず。頼朝よりの御詫ゝて。琵琶琴もたせて参りたり。よし〳〵れん憚りはさる事なれども。たゞこなた〳〵と請ずれば。シテ「うの時千手たちよりて。地「妻戸をきり〳〵とれしひらく。御簾のれひ風にほひくる。花の都人ゝ。はづかーながらみゝえん。げゝや東のはてーまで。人の心のれくふかき。うの情こそ都なれ。花の春もみぢの秋。たゞ思ひでとなりぬらん。重衡詞「いかゝ千手の前。きのふあからさまゝ申ーつる出家のれん暇の事きかまほーうこそ候へ。シテ詞「さん候ふ其由申ーて候へば。朝敵の御事なるを私とーて。出家を許し申さん事。れもひもよらずとこう候ひつれ。わらはも御心の内れーはかりまねらせて。いかほどこまゞ〳〵と申ーて候へども。かひなき出家のれん望み。いたはーうこう候へ。重衡「くちをーや我一谷にていかにもなるべき身のいけどられ。今は東のはてまでも。かやう

前世の報い　前世に作りし罪の報い。

佛像と亡ぼし　頼衡南都を攻め東大寺等を焼きし事。

人数を斷ちし　戦にて人を多く殺したる事。

現當の罪と果す事　現在と當來との罪の結果と此世にて受くる事は前世の罪の報いよりも甚かしきさなり。當來は未來に同ト。但しこゝは現在とおもに云へる。以上は重衡と偽りて佛敵の罪と覚むる佛者の手段と見るべし。

唐衣きつゝ　馴れにし妻しあればふるゝ〳〵來ぬる旅としぞおもふ

伊勢物語の歌。逢は馴れたる要と都に殘し置きたれば。遠に來ぬる旅の心細さを思ふさなり。なれも裝も張るも皆唐衣の縁語。

水ゆく川の八橋や　前の歌は八橋にて業平のよみたるなれば。うの縁にて此詞を置く。本文に「八橋さいひけるは水ゆく川のくもでなれば橋と八つ渡せるにより」云〳〵。くもでとは蜘蛛の手の如く八方に流るゝ水のさまと云ふ。參河の國にて杜若の名所。

くもでの如く　くもでにものと歎々にの意。

かけぬなさけの　中々にいふと中々に云ひかく。中々は却つての意にてなれたるが却つて恨の種ぞさなり。

ゝ面をさらす事。前世の報いといひながら。又れもはずも父命ゝより。佛像を亡ぼー人壽をたちー。現當の罪をはたすこと。前業よりなほはづかーうこう候へ。シテ「げゝ〳〵これはれんことわりさりなぐら。かしー聞くものを。獨となき歎き給ひそとよ。重衡「げゝよくなぐさめ給へども。たぐひはあらじ憂き身のはて。シテ「きのふは都の花とさかえ。重衡「けふは東の春ゝ來て。シテ「うつりかはれる。重衡「身のほどを。地「れも〳〵たゞ〳〵妻ーある。都の雲井を立ちはなれ。はる〳〵來ぬる旅をーぞ思ふ哀へ。憂き身のはてぐ悲ーき。水ゆく川の八橋や。くもでゝものを思へとは。かけぬ情の中々に。馴るゝやうらみなるらん。

ワキ「今日の雨中の夕の空。れんつれ〳〵を慰めんと。樽を抱き

手まづさへぎる御遊に曲水の宴（むかし禁裏の宴ありて、水に盃と浮べ盃の流れ來る時受けたる人が詩を作り酒を飲むなり。其流れて來れど先づ手は出して盃と遮り取る意なるが。うつりては唯盃を受くる事に用ふ。菅原雅規の詩に來レ流遲過手先遮といふより出でたる語。）

羅綺之爲二重矣一（一節二無情於儉嗇一菅公の文。則詠集に出でたり。意は羅綺はうすものにて輕き衣なれど重くて堪へがたければ、織りかへがたけれど重くて其不深切なる恨ふかし。）

織女に遮ぶるとなり。

則詠詩歌に節つけて歌ふと云ふ。

北野　菅公を祭れる所なれば云ふ。すなはち北野の天滿宮。

此詩を詠ぜば　則詠ぜん人は北野の天神毎日三度いけつて守ら給ひ事。平家物語にあり。

見ゆ。

來世の便　未來の世は極樂に生るゝか地獄に落つるかの便。

雖三十惡一猶引攝　則詠集の詩。十惡の罪人なりとも阿彌陀如來は猶みちびきて極樂に至らしめ給ふべしの意。十惡は因村にあり。

百八

て參りつゝ。すでゝ酒宴を始めんとす。シテ「千手も此よりも。れ酌ゝ立ちはいつゝかはゞかりの。盃の。心ひとつゝれもふ思ひ。ワキ「ろれ〳〵いかゝ何ゝても。れん肴にとすゝむれば、シテ「その時千手とりあへず。羅綺の重衣たる情なき事を機婦ゝねたむ。三人「たゞいま詠じ給ふ朗詠は。かたじけなくも北野の御作。此詩を詠ぜば聞く人までも。守るべーとのれん誓なり。重衡「さりながら重衡は。今生の望なー。三人「たゞ來世の便こそ。聞かまほーけれと宣へば。シテ「わらは仰せを承り。十惡といふとも引攝すと。地「朗詠ーてそかなでけるこ。シテ「千手も此よりも。れ酌ゝ立ちはいつゝかはゞかりの。盃の。心ひとつゝれもふ思ひ。ワキ「ろれ〳〵いかゝ何ゝても。れん肴にとすゝむれば、シテ「その時千手とりあへず。羅綺の重衣たる情なき事を機婦ゝねたむ。三人「たゞいま詠じ給ふ朗詠は。かたじけなくも北野の御作。此詩を詠ぜば聞く人までも。守るべーとのれん誓なり。重衡「さりながら重衡は。今生の望なー。三人「たゞ來世の便こそ。聞かまほーけれと宣へば。シテ「わらは仰せを承り。十惡といふとも引攝すと。地「朗詠ーてそかなでけ

いまは梓弓　句をへだてゝ下の引くとすれば引き退く事の序とす。弓を山城の淀にて取るゝ鯉は名物なれば云ふ。のがれがたき世を淀鯉にかけて。生けざられたる譬とす。

淀鯉　鱗にて魚と云ふ。

うろくづ　憂き名を世に流すとこう流せすと云ひて。流すの字より川の字と出だす。

名をこう流せ

心の外の都入　一谷より捕はれてみやこに先づ入りたると云ふ。

げにや世の中は　後撰集の「神無月ふりみふらずみ定めなき時雨ぞ冬の初めなりける」といふ歌と古今集の「神無月しぐれふりにく奈良の葉の名に負ふ宮のふるこそこれ」といふ歌との意。

衆徒の手に　衆徒は南都の僧兵を云ふ。奈良坂やよりさにも受けたるは萬葉集の歌にも一奈良坂やこのてがしはのふたにもくにもぬちけ人のとも」といふに依れり。此歌は百萬に註すべし。

箱根の字より出づ。

明けもやすらん　箱根は明くるといふ事あればなり。

星月夜　鎌倉の枕詞。鎌倉に入る道に星乃夜の井と云ふありて其邊に星月山といふ寺もあれば

サシ「されども時うつり。平家の運命こと〴〵く。地「月の夜すがら聲たてゝ。泣くや牡鹿の津の國の。生田の河ゝ身を捨てゝ。防ぎ戰ふと中せどもシテ「森の下風木の葉の露。地「れとされけるこころあはれなれ。クセ「いまは梓弓。よー力なー重衡も。ひかんとするゝいづかたも。網を置きたる如くゝて。のがれかねたる淀鯉の。生けどられつゝありてうき。身をうろくづのそのまゝ。沈みははてずーて。名をこう流せ川越の。重房が手ゝわたり。こゝろの外の都入。シテ「げゝや世の中は。地「定めなきかな神無月。ーぐれ降りしく奈良坂や。衆徒の手ゝ渡りなば。とゝもかくゝもはてはせで。また鎌倉ゝ渡さるゝ。こゝはいづくぞ八橋の。雲井の都いつか又。參河の國や遠江。足柄箱根うち過ぎて。明けもやすらん星月夜。かまくら山ゝ入りーかば。憂き限ぞと思ひーゝも。馴るればこゝも忍び音ゝ。あはれ昔を思ひ

こゝには其弁の名をもかけたるならん。

燈暗數行虞氏淚。夜深四面楚歌聲

明詠はの詩。是は楚の項羽漢軍に圍まれてすでに事急なると知りて。妻の虞氏に舞はしめ。自ら歌を作つて虞氏に今虞兮奈レ汝何と寫しなる詩なり。其時うち圍みたる漢軍の心と寫したる詩なり。其時うち圍みたる漢軍わが楚の歌と歌ひしかば。漢皆すでに楚を得たりやとて悲歎せりとぞ。燈暗夜深はうの時夜なればなり。項羽は自ら敗將なるを項羽に比して此明詠を誦ひしは深し。

めぐらすも雪の曲さい

ふ事あれば云ふ。觀音の暫ひに枯れたる木にも花を咲かしむると云ふ事あれば。うれと千手觀音さいかいたるなり。千手の惣田村に云へり。

わすれめや

觀音の暫ひと忘れんやと上と承けて一樹の陰の緣下に據く。

一樹の陰や云々

當時白柏子の休むも同じ川の水と汲むも共に他人の御緣ぞと聲ふ。

玉琴の絃合

玉琴は玉と飾れる琴の美稱に用ふ。絃合はせだや琴の合奏。拾遺集に「琴の音に峰の松風かよふらしいづれの尾よりしらべ初めけん」とある詞取る。

東雲の棚引きて明けむとする頃と云ふ。

妻の。ツマ　とも〜火くらう〜ては數行虞氏がおんだの。雨さへ〜きる夜の空。ヨル　シテ「四面ヨ楚歌の聲のうち。地「なヨとか返す舞の袖。思ひの色ヨや出でぬらん。涙をそへてめぐらすも。雪の古枝の枯れてだヨ。花さく千手の袖ならば。かさねていざや返さん。地「わすれめや。シテワカ「一樹の陰や一河の水。地「みなこれ他生の緣といふ。白拍子をヲ諷ひける。重衡「その時重衡興ヨ乘じ。地「うのとき重衡興ヨ乘じ。琴の絃合ヨ。シテ「あはせて聞けば。地「峰の松風かよひ來ヨけり。琴を枕の短夜のうたゝね。夢もほどなく東雲もほの〴〵と。明けわたる空の。シテ「あさまヨやなり。なんと。酒宴を止め給ふ。れん心の内ぞいたはしき。地「かくて重衡勅ヨより。また都ヨとありしかば。武士守護し出でたまへば。シテ「千手も泣く〳〵たちいで。地「なヨ中々のうき契り。はやきぬ〴〵ヨ引きはおるゝ。袖と袖との露おみだ。げヨ重衡の有樣。目もあてられぬけしきかな。

遊行柳　ゆぎやうやなぎ　信光作

ワキ次第「歸るさおらぬ旅衣。法ヨこゝろやいそぐらん。詞「是は諸國遊行の聖ヨて候ふ。我一遍上人の教へを受け。遊行の利益を六十余州ヨひろめ。六十万人決定往生の御札を。普く衆生ヨあたへ候ふ。此程は上總の國ヨ候ひしが。是より奥へと志し候ふ。道行「秋津洲の。國々めぐる法の道。まよはぬ月もひかりうふ。心のれくを白河の。關路ときけば秋風も。たつ夕霧のいづくヨか。今宵は宿をかり衣。日も夕暮ヨなりヨけり。詞「急ぎ候ふ程ヨ。音ヨきヽ〜白河の關をもすぎぬ。又是ヨあまた道の見ゐて候ふ。廣き方へゆかばやと思ひ候ふ。

あさまに云ひ掛く。朝間の意をあさましきに云ひ掛く。

きぬ〴〵。男女の別るゝ事と云ふ。衣と衣との離れ行くより起りたる詞と云へり。

前シテ　老人
後シテ　柳の精
ワキ　遊行上人
ツレ　陸奥へ

遊行上人の法力に依りて心なき柳の精までも成佛する事と作れり。

旅衣

法に旨ひ掛く。一の二のなど云ふ編の意。

諸國遊行

國々を遍歷して佛法を敎ふる事。

聖

時宗の宗祖。

一遍上人

決定往生の御札を得さへすれば極樂に往生する事ヨたがひなき御札の意。くはしくは暫頃寺にあり。

奥へと

奥州の方へとなり。

秋津洲

日本の異名。

白川の關路と聞けば秋風も　後拾遺集の「都とば霞と共に出でしかど秋風ぞ吹く白河の關」の歌によりて秋風といだす。

先年遊行の　遊行上人は代々遊行上人なれば先年とは先代の上人の来りし時と云ふ。下に先の遊行さぶらひ。相模の遊行寺より奥州へ下向の事。

其上朽木の　うのうへとは先の遊行の通り給ひしのみならず朽木の柳もある街道なればの意。

老いたる馬には　齊の管仲の老馬を用ひて踏み迷ひたる道を得し古事。

むぐらよもぎふ　葎や蓬と云ふ草の茂り生ひたる地。浅茅生や袖に朽ちにし秋の霜（わすれぬ形と吹く風ぞなき）新古今集の歌。浅茅生はかやの生ひたる處。うの浅茅の袖に朽ちたる秋の霜の如く盛なりし日の様は更になく衰へはてたるにの意。

露分衣　霜の字より露を呼び。露分衣笈でと云ふと來てに掛く。露分衣は文字の如し。衣の名に非ず。

枝さびて　枝の伸さびて古くなれるを云ふ。

影ふむ道は　柳の影をふむ道は行末も見ゆで。草茫々として風ひとり渡るのみ。分け入りがたしとなり。

星霜　半月に同じ。

北面　院の武士と云ふ。

水無月　六月の古名。

六時不斷　初夜。中夜。後夜。晨朝。日中。日没と六時と云ふ。うれとたゆまず行ひて佛に仕ふると不斷の勤と云ふ。

古今集　此集とは古今の歌集とさす。斯く歌道に熱心なりし故。新古今に入りて際はるほどの名歌をよまれしさなり。

新古今　後鳥羽院の院宣にて定家家隆などの撰びたる歌集。

道のべに　清水ながるゝ柳かげしばし

シテ詞「のう〳〵遊行上人の御供の人ゝ申すべき事の候ふ。ワキ詞「遊行の聖とは札の御所望ゝて候ふか。老足なりともいま少し急さたまへ。シテ「有り難や御札をも賜はり候ふべし。まづ先年遊行の御下向の時も。古道とて昔の街道を御通り候ひしなり。されば昔の道を教へ申さんとて。はる〳〵是までまゐりたり。ワキ「ふしぎやさては先の遊行もおりしよのう。シテ「昔は此道なくして。あれゝ見えたる一村の。森のこなたの河岸を。御通りあり〳〵街道なり。其上朽木の柳とて名木あり。かゝる尊き上人の。御法の聲は草木までも。成佛の縁ある結縁たり。地「こなたへ入らせたまへとて。老いたる馬はあらねども。道あるべ申すなり。いうがせ給へ旅人。げゝ さぞな處から。人跡たえて荒れはつる。淺茅生かるかやも。みだれあひたる淺茅生や。袖ゝ朽ちゝ秋の霜。露わけ衣來て

みれば。昔を殘す古塚ゝ。朽木の柳枝さびて。影踏む道はすゑもなく。風のみ渡るけ〳〵きかな。

シテ詞「是こう昔の街道ゝて候へ。又是なる古塚の上なるころ朽木の柳ゝて候ひけるぞや。げゝ川岸も水たえて。河うひ柳〳〵御覽候へ。ワキ詞「さては此塚の上なる名木やらん。くはゝく語り給ふべし。シテ「昔の人の申〳〵れきゝくちのこる。老木はうれとも見わかず。蔦葛のみはひかゝり。青苔梢を埋む有樣。誠ゝ星霜年舊りたり。さていつの世よりの名木やらん。くはゝく語り給ふべし。シテ「昔の人の申〳〵れきゝは。鳥羽の院の北面。佐藤兵衛憲清出家〳〵。西行ときこえ〳〵歌人。此國ゝ下り給ひ〳〵が。水無月なかばなるゝ。此河岸の木のもとゝ。ゐばゝ〳〵立ちより給ひつゝ。一首を詠じ給ひ〳〵なり。ワキ「謂をきけばれもゝろや。さて〳〵西行上人の。詠歌はいづれの言の葉やらん。シテ「六時不斷の御勤めの。ひまなき内ゝも此集

をば。御覽じけるか新古今よ。地「道のべよ。清水ながるゝ柳陰。ちょ〳〵とてこう立ちどまり。すゞみとる言の葉の。末の世々までも。殘る老木はなつかしや。かくて老人上人の。御十念を賜はり。御前をたつと見えつるが。朽木の柳の古塚よ。よるかと見えて失せよけり。

ワキ詞「ふしぎやさては朽木の柳の。我よことばをかはしけるよと。歌「思ひの珠の數々よ。御法をなして稱名の。聲うち添ふる初夜の鐘。月も曇らぬよもすがら。露をかたしく。袂かな。

シテ「沉水羅紋海燕かへる。柳條うらみをひいて荊臺よ至る。徒に朽木の柳時を得て。地「今ぞ御法にあひ竹の。シテ「直よみちびく。彌陀の教へ。地「衆生稱念必得往生の。功力よひかれて草木まで。も。佛果よ至る老木の柳の。髮も亂るゝ白髮の老人。忽然と顯

れいでたる烏帽子も。柳さびたる有樣なり。

ワキ「ふしぎやなさも古塚の草深き。朽木の柳の木の本より。其樣化したる老人の。烏帽子狩衣を着しつゝ。顯れ給ふはふしぎなり。

シテ詞「何をか不審しつ給ふらん。はや我姿はあらはしさぬの。日も夕暮の道しるべせよ。其老人よて候ふなり。ワキ「さては昔のみちしるべせよ。其老人は朽木の柳の精。シテ「御法の教へなかりせば。非情無心の草木の。臺にいたる事あらじ。ワキ「中々なりや一念十念。シテ「唯ひと聲の内よ生るゝ。ワキ「彌陀の教へを。シテ「身ようけて。地「此界一人念佛名。西方便有一蓮生。但使一生常不退。此花かへつてあくにむかひ。上品上生よ。至らん事ぞうれしき。

シテ「釋迦すでよ滅しつ。彌勒いまだ生ぜず。彌陀の悲願を賴まずは。いかで佛果よ至るべき。地クリ「南無や濁濁歸命頂禮本願いつはりまさず。超世の悲願よ身を任せて。他力の船よ法の

したてこそ立ちどまりつれ（意は清水ある柳がげにしばしのつもりにて立ちよりたるに。なかなか立ち去りがたきこなり。すゞみとる。十念（念佛を十返する事。老人は上人の十念とうけての意。思ひの珠（數珠の事。御法となして（佛道の勤をなしてなり。稱名（念佛の事。佛の御名を稱ふる事。沉水羅紋海燕（柳條事。恨レ到二荊臺一（三休詩の詩。沉水に波のさゝやかれる時つばめは歸り來るに。男に離別の恨を帶びて荊蠻に至るよ。客と送りて作れるなり。沉水は川の名。荊蠻は地名。柳條は別るゝ時に折るものなれば云ふ。こゝはたゞ柳に緣ある詩を用ふるのみ。合竹（笙の吹方の名。竹の緣により。）人々念佛さへすれば必ず往生すべしの意。これ阿彌陀經の文。佛果に至る（成佛する事。老木の柳も成佛すると云ふ。柳さびたる（鳥帽子の製法に殿は其一種類。ろれとさびたるに掛く。神さびて古き樣なり。源氏物語より出でたる詞。裏服と着たるに依りてうの親族たるとあらはす意。こはたゞ詞のあやに言ひ掛けたるのみ。意と取れるに非ず。荊蠻に至るとは荊臺に至るとは荊蠻に同じ。超世の悲願（世にすぐれたる慈悲の願。他力の舟（淨土の行は佛願を信じて往生す故に他力と名づくるなり。たよりと賴む事と舟に譬ふ。彼岸（生死と云ふ迷の此岸を去つて。涅槃と云ふ悟の彼岸に至ると云ふ事。凡夫の迷を由でゝ佛の悟と得る意なり。黃帝の貨狄（自然居士に委しく出づ。舟を作り初めし人なり。閻くや秋吹く風を聞くと二つを銀ぬ。聞くと秋風を聞くと二つを銀ぬ。蜘蛛の乘りてこれも自然居士に委しくは舟の發明も柳にくはしくは其條をほめたるなり。

三体詩にある華清宮の詩。華清宮は唐の玄宗皇帝の離宮。洛陽は京都を云ふ。人々の歩みを運

びて參詣すると云ふ。靈驗ある土地。清水寺を指す。

都の花盛　花盛の頃と云ふ意。

大宮人　公卿を云ふ。

四本の木陰　京の内の一本柳を用ふ。

暮に敗るゝ　樹に依破急の風かあれば。晩景にはだん〳〵遊みてうのいうがはしくしげくなれるとを云ふ。

柳櫻をこきまぜて　古今集に「見てばや櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」とある歌の詞と取る。

花やかなるやこすのひまより　諸人のさまの花やかなるとこすの本に言ひかく。こすは筠簾の意と云ふ說もあれど小簾の說と取る。

風の匂ひより　古へはをすと云へり。風につれて簾内へ匂ひくると云ふ。長き思ひの香のにほひくるにかもと云ふ。

手ひの虎　猫を云ふ。柏木右衛門督なご雜談して遊ぶをりから。

女三の宮の御猫すだれの下より出でしに。綱に引き上げられて簾のあきたるひまより女三の宮ひさなれる古事を引けり。

下文は其心して見るべし。

柏と重れたり。なならの葉の名。

これは花いたる　前の戀路の物語を退けて。是はさる花やかなるものにては無き老いたる柳そと云ふなり。但しその柏木と云へる木の名に對して是はと柳やさしたり。

ゑぼしの名。白氏文集の柳風折なうして　氣力「條先動の句を取る。

無二氣力一　柳の絮の夢心地にあらはれたると云ふ。

夢人　鼈鼠の樂の名。柳花苑柳花苑を舞ふかと覺ゆの意。

報謝の舞　柳の曲ぶ。二つともなごりなりの意。

歌舞の菩薩　これは音樂とするふ菩薩なれはうの秋を返して舞ふと云事。返すゝもに言ひかけて。よろこぶにつゝけたり。

上人にた禮の舞を舞ふ事。

古今集に「淺みどりいともて白露を玉にもぬけるゝ春の柳かな」とよめるを取る。

熊野に云へり。

三体詩の雜部河邊細二柳條一　といふ句を取る。

店の風俗に人を送る時は柳の枝を輪にして贈る事あれば云ふ。

臥柳と云へるより床といだす。

草を枕にして野宿する事に用ふ。

旅寢の事。

一夜上人にあひたる契。

秋風は西より吹く　秋風は西より吹くものだれば云ふ。法を得て西方淨土に生るゝといふ意にて西の字につゞけしならん。されば迷も夢もみな覺めはて、成佛して本にかへりて朽木となりた結句ここに幽玄にて終曲ふかし。

道。シテサシ「すなはちゝ彼岸に至らん事。一葉の船の力ならずや。彼黃帝の貨狄が心。聞くや秋吹く風の音に。散りくる柳の一葉の上よ。蜘蛛の乘りてさゝがにの。糸引き渡る姿より。たくみいだせる船の道。これも柳の德ならずや。シテ「其外玄宗華淸宮にも。宮前の楊柳寺前の花とて。詠め絕えせぬ名木たり。クセ「うのかみ洛陽や。淸水寺のいにしへ。五色に見えし瀧浪を。尋ねのぼりし水上に。金色の光さす。朽木の柳忽に。楊柳觀音とあらはれ。利生あらたなる。歩みをはこぶ。蹴鞠の庭の面。四本の木陰枝たれて。暮にかずある沓の音。シテ「柳櫻をこきまぜて。錦をかざる諸人の。花やかなるや小簾のひま。洩りくる風の匂ひより。手飼の虎の引綱も。ながき思ひにならの葉の。其柏木の及びなき。戀路もよしなしや。是は老いたる柳色の。

狩衣も風折も。風にたぐよふ足もとの。よわきもよしや老木の柳。氣力なうしてよわ〳〵と。立ちまふも夢人を。現とみるぞはかなき。シテ「教へうれしき法の道。地「迷はぬ月につれてゆかん。シテ「靑柳に。鶯つたふ羽風の舞。地「柳花苑とぞれもほえにける。シテ「柳の曲も歌舞の菩薩の。舞の袂をかへすゞも。上人の御法を受け。よろこぶ報謝の舞も。是までなりと名殘の涙の。地「玉にもぬける春の柳の。シテ「暇申さんとゆふつけの鳥もなき。地「別れの曲には。シテ「柳條をわがぬ。地「手折るは靑柳の。シテ「枝もすくなく。地「むすぶは老木の。シテ「葉もまばらなる。地「柳の床の風やいとはんと。たぐよふ足もとも。よろよわ〳〵と。倒れ臥柳。かりねの床の。草の枕のひと夜の露も木の葉も散りぐ〳〵になり果てゝ。殘る朽木となりにけり。

室君　むろぎみ

作者未詳

シテ　明神（但し一句も謡はず）
ツレ　室君
ワキ　神職
狂言　下人
播磨の室の明神のことと作れり。室津にあり。京都の加茂と同神。
室君　室津の遊女。

ワキ詞「是は播州室の明神に仕へ申す神職の者にて候ふ。さても天下泰平の折節なれば。室君たちを船にのせ。はやーものを！て神前にまゐる御神事の候ふ。いま此時もめでたき御代なれば。急ぎ御神事をとりおこなはゞやと存じ候ふ。いかに誰かある。狂言「御前に候ふ。ワキ詞「いうざ室君たちよ神前へ御参りあれと申ーー候へ。狂言「畏つて候ふ。

ツレ「室の海。波ものどけき春の夜の。月のみふねに掉さーて。霞む空は面白やな。ツレ「梅が香の　地「梅が香の磯山遠く匂ふ夜は。出船も心ひく。花づつなでなりける。狂言「シガノーー。ワキ詞「近頃めでたき御事にて候ふ。又こと〳〵く掉を御さーー候ふほどに。さをの歌を御うたひ

月のみふねに　月を舟に譬ふる事ある故。謡の舟とも月の御舟とつゞけ云ふ。

花ぞつなで　川舟を綱もて引きのぼす事あれば。それに譬へて花の綱が舟を磯に引きよするとおもしろきけしきなり。

神の歌歌。　神とさす時にうたふ歌。

朝妻舟　近江の朝妻といふ所の舟。これも遊女のある所なり。

みなれざを　水馴棹の意。

たちぬはぬきぬきし人もなきものと何やまひめの布さらすらん　古今集の歌。裁縫ぬぬ衣は誰も着ねもの山姫は布とさらして誰がためにせんとかの意。

天地開闢のはじめより伊弉諾尊は矛とさし下して滄溟をかきまはし給ひしに。その矛さきの滴こりて此國土を爲せりといふ故事。

しるやしるしの深き時は山も里も一つになれば　越路にて雪の深き時は山も里も一つになれば竿と立てし人来ず道路のしるしとなす事あり。雪はすなはち豐年の兆なれば其年もかならず雪とはかるほどに豐年とはかるの意。豐年と云ふと年月に云ひかけたるなり。

候へ。ツレ「さをの歌。うたふ浮世の一節を。地「うたふうきよの一節を。夕波千鳥こゑそへて。友よびかはすあま少女。滄見恨みそまさる室君の。行く船やーたふらん。浅妻船とやらんは。それは近江の海なれや。あちきなや浮舟の。さをの歌をうたはん。みな山もへだゝるや。我もたづねゝーて。戀ーき人に近江の。海れざをの歌うたはん。クセ「たちぬはぬ衣着ー人もなき物を。何山姫の布さらすらん。さほの山風のどかにて。日影も匂ふ天地の。ひらけーもさーれろす。さをのーたゞりなるとかや。ツレ「然れば春すぎ夏たけて。地「秋すでに暮れ行くや。時雨の雲のかさなりて。峰白妙にふりつもる。越路の雪のふかさをも。志るやしるしの深き時は山も里も一つになれば竿と立てし人来ず道路のしるしとなす事あり。雪はすなはち豐年の兆なれば其年もかならず雪とはかるほどに豐年とはかるの意。豐年と云ふと年月に云ひかけたるなり。

参らせられ候へ。ッレ詞「さらば御神楽を参らせうずるにて候ふ。こゝとても室山かげの神垣の。地「加茂の宮居はありがたや。ッレ「月影の。地「つきかげの。更けゆくまゝに風をさまれば。不思議や異香薫じつゝ。和光の垂迹。韋提希夫人の。姿をあらはしたまふ。地「玉のかんざし羅綾のたもと。風にたなびく瑞雲に乗じ。所は室の海なれや。山はのぼりて上求菩提の機をすすめ。海は下りて下化衆生の相をあらはし。五濁の水は實相無漏の大海となつて。花ふり異香くんじつゝ。相好まことに肝にめいじ。感涙うでをうるほせば。はや明けゆくや春の夜の。はや明方の雲にのりて。虚空よりあがらせ給ひけり。

張良 ちやうりやう

信光作

ワキ詞「是は漢の高祖の臣下張良とはわが事なり。われ公程に隙

異香　霊妙の香。

韋提希夫人　宝の明神の仏体。

上求菩提の下化衆生の万徳の大海　東北に云へり。これも東北に。江口に註す。

相好　前に同じ。

前ヘテ　後シテ　ワキ　アキ　ツレ　地謡　後見

老人　黄石公　張良　唐土　前漢の張良が圯上の老人より兵法と授かる一段の物語を作れり。

公程　たほやけ。おほやけ。官なる意。公務に暇なきと云ふ。

五更　今の午前四時ごろ。

なき身なれども。或る夜ふしぎの夢をみる。是より下邳と云ふ所に土橋あり。かの土橋に何となくやすらふ所に。一人の老翁馬上にて行き逢ひ。かの者左の沓を落し。某に取りて履かせよといふ。何者なれば我にむかひ。かく云ふらんと思ひつれども。かれが氣色只ものならず。其上老いたるを貴び親と思ひ。沓を取つてはかせて候ふ。其時かの者申すやう。汝誠の志あり。今日より五日に當らん日こゝに來れ。兵法の大事を傳ふべきよし申して夢さめぬ。やう〳〵日を考へ候へば。今日五日に相當り候ふ程に。唯今下邳の土橋へと急ぎ候ふ。道行「五更の天も明け行けば。時やれうきと行く程に。道は遥かに山の端も。おらみ渡れる川波や。下邳の土橋に着きにけり。

シテ「あら遅なはりやいかに張良。年老いたるものと契りおきし。其言の葉もはや違ひぬ。詞「我は先刻よりこゝに來り。曉鐘を

杉の門　門に侍りて待つ意にて下文につゞけたり。

ゆくへも知らぬ　誰とも素性を知らぬ人にの意。

瑤臺霜滿一聲之玄鶴唳レ天。巴峽秋深五更之哀猿叫レ月　集の文。瑤臺は夏の禁王の臺。玄鶴は年老いて色黒く殘りたる鶴。さしも盛なりし瑤臺も今は霜滿ちて鶴の聲がさびしきを云ふ。巴峽は深山にて猿の名所。哀猿は哀しげになく猿。秋ふかき深山の月に曉かけて猿の聲を聞くがものすごきを云ふ。こゝには曉のけしきの形容に用ふ。

山のかひ　山の間。谷間の處。

かゞへ待ちつるに、はや其時刻も杉のかど。地「待つかひもなし。はや歸れ。汝誠の志。ふかく。來らば我もまた。傳へん。れくれ給ふな張良と。怒りをなして老翁は。かきけすやうに失せにけり。

ワキ詞「言語道斷、以ての外の機嫌にて候ふは如何に。又我ながら斯くの如く。ゆくへも知らぬ御事に。かやうに恐れ從ふ事。其故なきには似たれども。大事を傳へて末世にのこし。兵法の師といはれんと。地「思ふ心を見んためと。知れば歸るも恨みなし。又こゝに來らめと。勇みをなして歸りけり。

後ワキ一聲「瑤臺霜滿てり。一聲の玄鶴空に鳴く。巴峽秋深し。五もの冷まじき山路かな。地「有明の月も隈なき深更に。山のかひより見渡せば。所は下邳の川波に。渡せる橋にれく霜の。白きをみれば今朝はまだ。渡りし人の跡もなし。

うれしや今ははや。思ふ願ひも滿つ潮の。曉かけてはるかに。夜馬に鞭うつ人影の。駒をはやむる氣色あり。

後シテ「抑是は。黄石公と云ふ老人なり。詞「こゝに漢の高祖の臣下張良と云ふ者。たゞ公程をみて君臣をれもんじ。義を全うして心たけく。賢才人に越え。器量すぐれ。地「國を治め民をあはれむ志。シテ「天道に通じて忽ちに。地「諸佛も感應目のあたり。シテ「大事を傳へて高祖につかへ。地「敵を平らげ味方をいさめ。天下を治めん謀。汝に傳へんと。駒をはやめて來り給ふを。張良はるかに。見奉れば。ありしに替れる石公の粧ひ。眼の光りも あたりを拂ひ。姿もかくやく威勢に恐れて。橋本にかしこまり待ち居たり。

シテ詞「いかに張良。いくも早く來るものかな。近づき給へ。物

滿つ潮の　顧ひの滿つるを潮に云ひかけたり。また舟に入る潮水の事を「あか」と稱ふれば潮の曉さつゝけたり。

諸佛も感應　張良の忠義に感應あつて目前に顧を叶はせ給ふなり。

いしくも　甚だの意。いみじくもに同ト。

いはん。ワキ詞「其時張良立ち上り。衣冠正〳〵くひきつくろひ。土橋を遙かに上り行けば。シテ「天晴器量の人体かなと。思ひながらも今一度。心を見んと石公は。地「はいたる沓を馬上より。遙かの川にれとー給へば。張良つゝいて飛んでれり。流る〳〵沓を取らんとすれども。所は下邳の巖石いはほに。足もたまらず早き瀬の。矢を射る如く落ちくる水に。浮きぬ沈みぬ流る〳〵沓を。取るべき様ころなかりけれ。

地「ふーさや川浪立ち歸り。俄に河霧たち暗がつて。浪間に出づる蛇体のいきほひ。紅の舌をふりたて。張良を目がけてかゝりけるが。流る〳〵沓をれつとり上げて。面もふらずかゝりけり。

ワキ「張良さはがず剣を抜き持ち。地「張良さわがず劍を抜き持ち。蛇体にかゝればだせば。大蛇は劍の光りに恐れ。持つたる沓をさーいをれつ取り劍を納め。又川岸にえいやとあがり。さ

黄石と顯はしてあつて殘ると云ふ。本傳に。黄石公一卷の書と出だして曰へるは。今より十三年後に我と濟北の穀城山の下に見るべし。黄なる石は即ち我ぞ。とある是なり。

前シテ　女
後シテ　從者
ツレ　太夫進朝長
同　僧
美濃

義朝の二男に中宮少進朝長とてありけるが。平治の合戰に打敗れて父と共に青墓の宿まで落ち行き。こゝにて重傷に堪へかねて自害して失せしかど。半は女に語らせて陰は幽靈に語らせて日向さに作れり。まづ墓詣したる女に旅僧の行き合ひて朝長の跡吊ふ事に及び。夢幻の間に幽靈を現ずる作者の手際は。彼流

て彼沓を取りいだし。石公にはかせ奉れば。シテ「石公馬より靜にれりたち。地「石公馬より靜にれりたち。さるにても汝。善哉〳〵と。彼一卷を取り出だし。悉く拜見し。秘曲口傳を殘さずつたへ。また彼すなはち披き。大蛇は觀音の再誕。汝が心を見ん爲めなれば。今より後は守護神となるべーと。大蛇は雲井より攀ぢ上れば。石公はるかの高山まであがり。金色の光りを虚空より放し。忽ち姿を黄石と顯はし。殘り難き。

朝長　ともなが　　元清作

ワキ詞「是は嵯峨清涼寺より出でたる僧にて候。さても此度平治の亂れより。義朝都を御ひらき候ふ。中にも大夫進朝長は。美濃の國青墓の宿にて自害し果て給ひたる由承り候ふ。我等も朝

長の御ゆかりの者にて候ふほどに。急ぎ彼所にて下り。御跡をも吊ひ申さんと思ひ立ちて候ふ。道行「近江路や。瀬田の長橋うちわたり。猶行くすゑは鏡山。老曾の森を打ち過ぎて。末は伊吹の山風の。不破の關路を過ぎ行き。青墓の宿に着きにけり。

シテ「花の跡訪ふ松風や。雪にも恨みなるらん。シテ「是は青墓の長者にて候ふ。シテトモ「うれ草の露水の泡。はかなき心の次第「花の跡訪ふ松風や。雪にも恨みなるらん。シテ「是は青墓の長者にて候ふ。シテトモ次第「花の跡訪ふ松風や。雪にも恨みなるらん。シテ「是は青墓の長者にて候ふ。シテトモ「うれ草の露水の泡。はかなき心の

吹山　近江と美濃の國にあり。

不破の關　松風や。雪にも恨みなるらん。シテ「是は青墓の長者にて候ふ。シテトモ「うれ草の露水の泡。はかなき心の

花の跡訪ふ松風や。雪にも恨みなるらん。シテ「是は青墓の長者にて候ふ。シテトモ「うれ草の露水の泡。はかなき心の

松風は殘雪を吹き落す恨あり。落花を吹くの意にて。落花とは眞に去りし。殘雪とは自ら身の行末の頼みがたきに比したるなり。

青墓の長者　長者は豪族などの意。ここは女みづから豪性と述ぶ。

はかなき心の　身の上に直接の關係なき露や泡と見ても。無常と觀ずるが人情の習慣なるにの意。はかなきはつまらぬ。何でもなき。かりうめなる。などの意。

花の袖など云ひて袖の美しきを花に譬ふる事あれば。袖花の文字よりつゞけたり。

露の内に春は來にけり　古今集の歌。日前のけしきを云ひて次の解けてもの句を呼び起す。

解けても寢ざれば　於偽のあまりに心を安んじても寢ざれば夢にも見ずとなり。

御めのと　乳母と云ふが本にて。主君の守り役なる男とも云ふ。

かやうの姿と　個体を爲りたる抖擻と云ふ。梵語には頭陀と云ふと唐土にて抖擻と譯す。衣食とも住處をも意にかけず。皆捨ひ捨てて。佛道のみ專心に修行する体と云ふ。

行脚　旅から旅に往來して居所不住の姿と云ふ。

取り分きたる御なじみ　特別の御馴染と云ふ。

あへなく。　はかなく。などの意。

シテ詞「ふーさやな此御墓所へ我ならでは。七日々々に參り。御跡吊ふ物のもなきよ。旅人と見えさせ給ふ御僧の。涙をながして參りて候ふ。シテ「御ゆかりとはなつかーや。さて朝長の御ためと何某と是は朝長の御ゆかりの者にて候ふが。御跡吊ひ申さんため是まで參りて候ふ。ツキ「是は朝長の御めのと何某とは如何なる人にてもまーますぞ。ツキ「是は朝長の御めのと何某とは如何なる人にてもまーますぞ。

跡吊ふ物のもなきよ　御墓所へ我ならでは。七日々々に參り。御跡吊ふ物のもなきよ。旅人と見えさせ給ふ御僧の。涙をながして參りて候ふ。シテ「御ゆかりとはなつかーや。さて朝長の御ためと何某と是は朝長の御ゆかりの者にて候ふが。御跡吊ひ申さんため是まで參りて候ふ。ツキ「是は朝長の御めのと何某とは如何なる人にてもまーますぞ。

戀よ　吊ひ給ふは。如何なる人にてもまーますぞ。ツキ詞「さん候ふ。是は朝長の御ゆかりの者にて候ふが。御跡吊ひ申さんため是まで參りて候ふ。シテ「御ゆかりとはなつかーや。さて朝長の御ためと何某とは如何なる人にてもまーますぞ。ツキ「是は朝長の御めのと何某と申す者にて候ひーが。さる事有つて御暇たまはり。はや十箇年餘り。かやうの姿となりて候ふ。とくよも罷り下り。御跡吊ひ申ーたくは候ひつれども。怨敵のゆかりをば。出家の身をも許さねば。抖擻行脚よ身をやつー。忍びて下向仕りて候ふ。シテ「扨は取り分きたる御なじみ。さこそは思ーし召すらめ。わらはも一夜の御宿りに。あへなく自害ー果て給へば。たゞ身のなげきの如くにて。あへなく自害ー果て給へば。たゞ身のなげきかやうよ吊ひ參らせ候ふ。ツキ「實よ痛はーや我と

三世　過去現在未来。主従は三世の契なれば云ふ。

値遇　出合など云ふに同じ。主従と為りて此世に出で合ふと云ふ。

一樹の陰のやどり云々　千手に云へり。

二世　現在未来。

死の縁のべき縁に逢ひたるは墓と云ふ名の所なれば。と地名にかけて云ふ。

青野が原　古葉のみのば云ふ。

其邊の地名。まだ春浅き頃なれ

狭の焼原　野の狭原と焼きたると云ふ。焼の字より次の烟と出だす。

北邙　唐土の火葬場。この邊の文句あはれ深く身にしむ心地す。

御最期　死ぬる時と云ふ。

鎌田殿　正清と云ふ。義朝の従者。

野間の内海　尾張の地名。

ても。もと主従の御契り。是も三世の御値遇。シテ「わらはも一樹の陰のやどり。他生の縁ときく時ハ。實ニ是とても二世のちぎりの。ワキ「今日ハ又もたがひニ袂ニきて。シテ「吊ふ我も。ワキ「朝長も。地「死の縁の。所もあひニあうはかの。跡のあるしか草の陰の。青野が原は名のみにて。古葉のみの春草は。さながら秋の淺茅原。狭の焼原の跡までも。げニ北邙の夕煙。一片の雲となり消えぬ空は。色も形も。なき跡ぞあはれなりける。

ワキ詞「如何ニ申ニ候ふ。朝長の御最期の有様くはしく語つて御きかせ候へ。シテ「申すニつけて痛はをや。暮れぬ一年の八日の夜ニ入りて。門を荒けなく敲く音す。誰なるらんと尋ねニて。鎌田殿と仰せられ一程ニ門を開かすれば。武具一たる人四五人うち入り給ふ。義朝御親子。鎌田金王丸とやらん。わらはを頼みなり。ワキ詞「如何ニ申ニ候ふ。朝長の御最期の有様くはしく語つて御きかせ候へ。シテ「申すニつけて痛はをや。暮れぬ一年の八日の夜ニ入りて。門を荒けなく敲く音す。誰なるらんと尋ねニて。鎌田殿と仰せられ一程ニ門を開かすれば。武具一たる人四五人うち入り給ふ。義朝御親子。鎌田金王丸とやらん。わらはを頼みなり消えぬ空は。色も形も。なき跡ぞあはれなりける。

へば。義朝正清とりつきて。なげかせ給ふ御有様は。よろの見る目も。あはれさをいつかむれば。苔底が朽骨。見ゆるもの今は更ノなし。さて其聲を尋ぬれば。草徑が亡骨となつて。答ふるものも更ノなし。三世十方の佛陀の聖衆も。あはれむ心あるならば。亡魂幽靈もさこそうれしとれもふべき。

地「かくて夕陽かげうつる。雲たえ〴〵ノ行く空の。青野が原の露わけて。彼旅人を伴ひ。青墓の宿ノ歸りけり。

シテ詞「御僧に申し候ふ。見ぐるしく候へども。しばらく是ノ御逗留候ひて。朝長の御跡御心ざしノ御志有り難う候ふ。暫くこれノ候ふべし。シテ「誰かある罷り出でノ御僧ノみや仕へ申し候へ。

ワキ「さても幽靈朝長の。佛事はさま〴〵れほけれども。ツレ「とみや仕へ　御給仕と云ふ位の事。

三世十方　過去現在未來の世。東西南北と其間〳〵の四隅と天上と下界とを合はせて云ふ。此十方にだの〳〵淨土あり佛あり。佛に同じ。佛陀聖衆　佛菩薩と云ふ。

觀音懺音　經文の名。

法の山風と云ふならん。ここは法の文字と山風につゞけ。月を呼び出だして物凄き夜のさまを寫す材料とす。

鼓鼓　鼓は時刻を皆ぐるにも用ふれば時の字につゞけたり。

後夜　今の夜二時。

感涙　經讀む聲に甲の洞子乙の調子と云ふ事あれば夜聲と感涙につゞけたり。甲ヘカンと讀し。

昔在靈山名法華　昔は釋迦如來靈鷲山にて法華經を說き給へりの意。

今在西方名阿彌陀　今は如來西方淨土にましく〳〵て阿彌陀と申し奉るの意。

婆婆示現觀世音　此世にては觀世音と現はれて衆生を救ひ給ふの意。

三世利益同一躰　右の三世には分かれて見ゆれど世に利益を與へ給ふ事は同じ一躰にましますの意。

吾今三點　吾今はわれいまなり。三點とは楊枝淨水の文と懺法の讀方に三返となふる事ありて。其三度目の時に云ふ詞。三度目に楊枝淨水を點撿して奉るの意。

楊枝淨水唯願薩埵　われいま楊柳の枝と淸淨の水とを奉る。唯願はくは觀音薩埵あはれみを垂れ給へとの意。

玉文の瑞諷　經文と諷誦する事。すなはち讀經する事。

わき亡者の貴み給ひし。

「聲滿つや。法の山風月ふけて。光やはらぐ春の夜の。眠りを覺ます鉢叩。時もうつるや後夜の鐘。音すみわたる折からの。御法の夜聲感涙も。うかぶばかりのけしきかな。

ワキ「觀音懺法讀みたてまつり。二人感

阿彌陀。婆婆示現觀世音。三世利益同一躰。まことなるかな誠なるかな。賴もしや。きけば妙なる法の御聲。地「吾今三點。シテ「揚枝淨水唯願薩埵と。地「心耳を澄ませる玉文の瑞諷。感應肝ノ銘ぜる折から。シテ「あら尊の弔ひやな。

ワキ「ふしぎやな觀音懺法聲すみて。燈の陰幽なるノ。まさしく見れば朝長の。影の如くノ見え給ふは。若々夢かまぼろしか。

シテ「もとよりも夢まぼろしの假の世なり。其うたがひを止め給ひて。猶〳〵御法を講じ給へ。ワキ「げノ〳〵かやうノま見え給ふ

思ひの玉の　寶盛に出づ。

時人と　光陰可レ惜。時不レ待レ人の語より取る。

朝有二紅顔一暮二世路一。暮爲二白骨一朽二郊原一。世間の無常を觀じて。紅顔と雖も人に跨りし身も夕べは骨と化して野原に朽ち果つる。

源平左右にして。朝廷の左右に並び仕へてなり。

も。偏に法の力ぞと。思ひの玉の數くりて。シテ「聲を力にたよりくるは。ワキ「まことの姿か。シテ「かくれつ。ワキ「れもかげの。ツレ「あれはとも。いはゞ形や消えあまー。きえずはいかで燈を。背くなよ朝長を。共にあはれみて深夜の月も影うひて。光陰を惜ーみ給へや。げにや時人を。待たぬ浮世のならひなり。唯何事もうち捨てゝ。御法を說かせ給へや。

シテクリ「それ朝に紅顔あつて。世路にほこるといへども。夕には白骨となつて郊原に朽ちぬ。サシ「昔は源平左右にー。朝家を守護ー奉り。御代を治め國家をおづめて。萬機のまつりごとすなほなりーに。保元平治の世のみだれ。いかなる時か來りけん。シテ「思はざりーに弓馬のさわぎ。ひとへに時節到來なり。クセ「さる程に嫡子惡源太義平は。石山寺にこもりーを。多勢に無勢

彌平兵衛宗清の事。　大納言賴盛の郎等宗

長田　平忠致。

賴む木のもとに雨を避けんさだすと云ふ。賴みたる長田のいひがひなきと譬ふ。むざーーと。さんざんに。などの意。

一切の男子とは惣父。一切女人即是母と經文に云へり。

一乘　法華經と云ふ。成佛の乘物は一に法華經に限るの意。

かなはねば。力なく生捕られて。終に誅せられにけり。三男兵衛の佐をば。彌平兵衛が手にわたり。是も都へぐ捕られける。父義朝は是よりも。野間の內海に落ちゆき。長田をたのみ給へども。賴む木のもとに雨もりて。やみーーと討たれ給ひぬ。いかなれば長田は。ゆひかひなくて主君をば。討ち奉るぞや。如何なれば此宿の。あるじはおかも女人の。かひーーくも賴まれて。一夜の情のみか。かやうに跡までも。御弔ひになる事は。シテ「うもーいつの世の契りぞや。一切の男子をば。生ゝの父と賴み。萬の女人を。生ゝの母と思へとは。今身の上に知られたり。さながら親子の如くに。御なげきあれば吊ひも。誠に深き心ざー。請けよろこび申すなり。朝長が後生をも御心やすくれほーめせ。

ロンギ地「げに賴むべき一乘の。功力ながらになどされば。いまだ

嗔恚の甲冑の。御有様ぞいたはしき。シテ「梓弓。もとの身ながらたまきはる。魂は善所よれもむけども。魄は修羅道よ殘つて。をばし苦しみを受くるなり。地「うも〳〵修羅の苦患とは。いかなる敵よ逢竹の。シテ「此世よて見しありさまの　地「源平兩家。旗は白雲紅葉の。散りまじり戰ふに。運大崩にて朝長が。膝の口をのぶかに射させて。馬の太腹に射つけらるれば。馬は頻りにはねあがれば。鎧をこしてれりたゝんとすれども。難儀の手なれば一足もひかれざりしを。乘替にかきのせられて。憂き近江路をしのさ來て。此青墓に下りしが。雜兵の手にかゝらんよりはと思ひさだめて。腹一文字にかき切つて。其まゝに修羅道よ遠近の。土となりぬる青野が原の。亡き跡訪ひて給びたまへ。

嗔恚　怒る事。怒りて瞋ふ道具　梓弓　まだ身に着けし事の痛はしさよとなり。弓には木末と云ふ事あればもとの身につけたり。　たまきはる　命の枕詞なると魂たまきはるに轉ト用ふ。意味には種々取あれど信ずべきなし。　魂のたましひとて其迷に行魂くもの。陰のたましひとて此土に留まるもの。　極樂と云ふ。　修羅　合戰を事とする世界。合竹の　敵に逢ふと云ふと合竹に云ひかけ。竹のよと云ふと此世にかけたり。　よは節と節との間と云ふ。合竹は窒の歌本の管と同時に合はせ吹くと云ふ。　白雲紅葉のよか　白旗の形容。赤旗の形容。前の立つ　盧深くの意。のさは笹竹の事。　馬の腹　馬の腹の眞中の太き處。　鐙こして　鐙と飛び越す意にて。常の下りやうさ違ひ鞍とうしろにして下るゝと云ふ。　雜兵の手　手は我部下と云ふ。　乘替　用意せし乘替の馬。

前シテ　女
後シテ　六條御息所
ワキ　僧
ツレ　京都

六條の御息所は一人の御むすめと持ちて後家ずみし給ふ處に光る源氏の君のしのびて通ひ給ひぬ。然るに源氏の御寵愛上さ申すは左大臣の女にて勢も強かりすしかば。或年賀茂の祭見に出でたしめ御息所の車と。其下人ごも押しやりなどして放ち恥見せたる事あり。かれての族姉心の上に此恨みまで添ひて御息所の生靈は葵上と憑まし。つひに取殺しけるとぞ。源氏はあまりの事に驚かれて疎んじ給ひ。これ〳〵になりて頓み少なく見にしかば。其頃ゐん娘の齋宮に立ちて伊勢の國に下らんさし給ふに。御息所もつきうひ行がんさて先づ野宮にこもりにはすると。源氏の訪ひ給ひし時の事に作り。幽靈の物語にして。こゝは齋向なれば此類に依りて立てたる趣向なれば。次の謠玉葛浮舟を始ほか源氏物語に出で來る夕顏末摘花もの名なると云ふ。なほ次第に美しくいづれも優なる姿の作と知るべし。

洛陽　都の名なると我京　嵯峨野　京都小倉山の異なる處にもうして云ふ。　野の宮　野の宮の中に今も伊勢大神宮と祭れる小さき祠あり。むかし齋宮として大神宮と祭る御役に皇女の立たせ給ふ時。まづ此所に假殿を作

野宮

ワキ詞「是は諸國一見の僧にて候ふ。我此ほどは都に候ひて。洛陽の名所舊跡殘りなく一見仕りて候ふ。又秋も末になり候へば。嵯峨野の方ゆかしく候ふあひだ。立ちこえ一見せばやと思ひ候ふ。是なる森を人に尋ねて候へば。野の宮の舊跡とかや申し候ふほどに。逆緣ながら一見せばやと思ひ候ふ。われ此森に來てみれば。黑木の鳥居小柴垣。昔よかはらぬ有樣なり。こはうも何といひたる事やらん。よし〳〵かゝる時節に參りあひて。拜み申すぞありがたき。歌「伊勢の神垣隔てなく。法の教への道すぐに見所。こゝろも澄める夕べかな。

シテ次第「花よ馴れてこ野の宮の。秋より後はいかならん。サシ「をりもあれ物のさびしき秋暮れて。猶ををりゆく袖の露。身を

りて三年潔斎し給ふを例とす。
黒木の鳥居。皮付の木ともて作れる小柴垣。木の枝ともて作れる小さき垣。
伊勢の神垣。隔なく並べ建たる神社に参詣せらるゝ意。斯垣と云ふより隔さかけ。注の道と云ふより直ぐにさせつといけたり。いづれも縁語。
花に馴れ来し野の宮の。花盛を見馴れたる身は秋に馴れて後いかにさびしからんとの意。源氏と花に譬へて見捨てられし哀みをのぶるなり。
心の色。心の移り易きを花の色のよくさもるにに譬ふ。千草の花木枯の葉と吹き枯す風。古の事を何と忍ばんと云ふを衣の名に云ひかく。忍の草衣は信夫郡より出づる信夫摺の衣の意にや。又は表うすもゝ裏あとなる衣の色目と忍ぶ衣と云へば其意にや。いづれにも取らる。
来てしもあかぬ。来て見ても飽かぬ世に魂の行きつ離りつしてたちつかぬは恨みとさなり。
なまめける女性。上品なる女性に同じ。
其後は。近頃はと云ふほどの意。
長月。九月の古名。
行方も知らぬ。行来も定めぬ雁の身のと云ふ意。

くだくなる夕まぐれ。心の色はれのづから。千草の花ようつろひて。衰ふる身のならひかな。歌「人こゝろ知らぬ今日ごとに。昔の跡ゝ立ち歸り。野の宮の。森の木枯秋ふけて。身ゝしむ色の消えかへり。思へば古へを。何と忍ぶの草衣。来てしもあらぬ假の世ゝ。行き歸るこゝろ恨みなれ。

ワキ詞「われ此森の陰ゝ居て古へを思ひ。心を澄ますをりふし。いとなまめける女性一人忽然と来り給ふは。いかなる人ゝてまします。シテ詞「いかなる者ぞと問はせ給ふ。うなたをこゝろ間ひ参らすべけれ。是は古へ齋宮ゝた、せ給ひし人の。假ゝ移ります野の宮なり。然れども其後は此事たえぬれども。長月七日の今日は又。昔を思ふ年々ゝ。人こゝろ知らね宮どころをきよめ。御神事をなす所ゝ。行方も知らぬ御事なるが。来り給ふはそも歸りあり。とく〳〵歸り給へとよ。ワキ「いや〳〵是は苦しからぬ。身の行末もさだめなき。世を捨人の數なるべし。さて〳〵こゝはふりゝ〳〵跡を今日毎ゝ。昔を思ひ給ふ。いはれはいかなる事やらん。シテ「光る源氏この所ゝ詣で給ひしは。長月七日の日けふゝ當れり。其時いさゝか持ち給ひし榊の枝を。いがきの内ゝさし置き給へば。御息所とりあへず。神垣はしるしの杉もなき物を。いかゝまがへて折れる榊ぞと。譲み給ひしも今日ぞかし。ワキ「げゝ面白き言の葉の。今持ち給ふ榊の枝も。昔ゝかはらぬ色ぞとは。榊のみこそ常磐の陰ぬ色よのう。シテ「昔ゝかはらぬ色ぞとは。榊のみこそ常磐の陰の。ワキ「杜の下道秋暮れて。シテ「紅葉かつ散り。ワキ「淺茅が原も。地「うらかれの。草葉ゝ荒るゝ野の宮の。跡なつかしきこゝにも。其長月の七日も。今日にめぐり来ゝけり。ものはかなや小柴垣。いとかりそめの御住居。今も火燒屋のかすかなる。光は我思ひ。内ゝあるを外ゝ見えつらん。あらさびし宮所。

いがきと云ふ。
さし置き給へば。
神垣はしるしの杉。歌の意は三輪にはしるしの杉なども云ふが有りと聞けど。此野の宮には無きに。いかに思ひ違へて折り給へるぞとなり。榊をしるべにして源氏は逢ほんと望み給へど。神社にては叶ふまじき意。
常盤の陰。年中落葉せぬを常盤と云ふ。

うらかれの。葉末の先づ枯るゝと云ふ。

火燒屋。竈と燒く爲の建物。火と云ふより次の光につゞく。
思ひ内にある色や。思ひに火の意と持たせ。火の色にあらはれてわが思ひが外は見えつらんとなり。此思ひは嫉妬にはあらず。

たゞものさびしさに古を懐ふ思ひなるべし。されば次にあらさびしさを受けたり。

桐壺の帝　源氏の君の御父。
前坊　御殿を云ふ。桐壺の帝の東宮に立たせ給ふ前に東宮なりし君ゆゑ前坊と云ふ。
妹背　夫婦に同じ。
合香定離　あひたる者は別れねばならぬ道理。
たくれ給ひけり　夫にわかれて妻のみ残ると云ふ。
身の露の　身のはかなきを露に譬より光るの文字を云ひかけ。呼び起す。
わりなくも　無理に。よぎなくなどの意にもつかへど。ここはつらきものにはげしくと云ふほどの意。
つらきものには　かれ〳〵の中にはなりたれど薄情に取りあつかはん物さは思し召さずの意。
さすがに　しかしながらの意。
秋の花みな　こゝらのけしきさあはれに感深し。味ふべし。
秋の哀しみも　此も文字は野も果なきが哀しみも果なしの意。
かつらの御祓　賀茂御出立の日桂川にて御祓身を清め給ふ儀式あると云ふ。桂川は嵐山の辺を流るゝ大井川の川下。
ふらゆふ　白木綿を裂く。祓に用ふる具にて式終れば川に流し捨つるゆゑ。浮の文字と呼びいだす。
心の水に　身を浮草に譬へ心を水に譬ふ。心決して身の之に従ふ意。
鈴鹿川八十瀬の波に　鈴鹿川八十瀬の波にぬれ〳〵ず伊勢まで誰か思はん（ひたごゝろ）鈴鹿氏の君にたくり給ひし歌。鈴鹿川は伊勢に在りて此氏所より源氏の君にたくり給ひし歌。鈴鹿川は伊勢に在りて此なる事田村に云へり。八十瀬は多くの瀬を云ふ。うの川瀬の波にぬるゝにもせよぬれぬにもせよ伊勢までも我身を思ひおこす人は有るまじとの意。
ここのはい　前の歌とさして言の葉さ云ひ。うれとこゝの母の意にかけて宮に母添ひ下る例は無きをさ云へる意。伊勢の國多郡に齋宮の御住所は定まれり。之を云ふ。
はづかしの杜に　恥かしを羽束師の杜に云ひかけ。うの恥かしさが外に洩りて知られやせんと。つづけたり。羽束師の杜は山城の國乙訓郡。
名も無き身と　名も無き身ぞと身の意と歌り。
二柱　鳥居の二本の柱と云ふ。
かたしくや　寝る時に半身につきたる衣のにのづから敷かるゝと云ふ。片敷の意。
苔とても衣をする意。草莚る意。　苔とても衣をする意。これも草を敷きて莚とする意。

あらさびー此みやどころ。

ワキ「猶々御息所のいはれ懇に御物語り候へ。地ノ一「うも〳〵此御息所と申すは。桐壺の帝の御弟。前坊と申ー奉りーが。時めく花の色香まで。妹背の心あさからざりーに。シテサシ「會定者離のならひもとよりも。地「驚くべーや夢の世と。ほどなくれくれ給ひけり。シテ「さてーもあらぬ身の露の。地「光る源氏のわりなくも。シテ「つらき物ゝはさすがゝ思ひ果て給はず。地「また行き通ふ。シテ「心の末のなどやらん。地「秋の花みなあはれになる。シテ「其後かつらの御祓。地「あらゆふ

ふかけて河波の。身は浮草のよるべなき。心の水ゝ誘はれて。ゆく〳〵も鈴鹿川。八十瀬の波ゝぬれ〳〵ず。伊勢まで誰か思はんの。言の葉は添ひゆく事も。ためーなき物を親と子の。多祁の都路ゝれもむきー。心こう恨みなりけれ。

ロンギ地「げゝやいはれを聞くからゝ。唯人ならぬ御氣色。其名をこゝゝ。シテ「名のりても。かひなき身とてはづかーの。名のり給へや。シテ「名のりても。かひなき身とてはづかーの。

杜もりてやよそゝ知られまー。よーさらば其名も。なき身ぞと聞けば不思議やな。さては此世をはかなくも。シテ「なき身と聞けば不思議やな。さては此世をはかなくも。シテ「去りて久ーき跡の名の。地「御息所は。シテ「われなりと。地「夕暮の秋の風。森の木の間の夕月夜。影かすかなる木の下の。黒木の鳥居の二柱ゝ。立ちかくれて失せゝけり。跡ちかくれ失せゝけり。

ワキ歌「かたーくや森の木陰の苔衣。同じ色なる草むーろ。思ひ

花車　花を飾する車。めぐりの文字につづく。

網代の車　網代張にて作れる車。女車なり。

下すだれ　車の簾の下に帳の様に掛くる暮を云ふ。思ひ掛けざるの文字につづけたり。

車あらそひ　御息所と葵上との競争を云ふ。車あらそひと思ひ出でたりと。露の置きわたす如所せきまで　狭き所も狭きほどの意。

時めく　時を得て威張る意。

やるかたもなきさま　身のはかなさのやるかたもなきさま。車のやる場所の無きさまと懸ね。

御息所の車の前後に　御息所の車が。

押しやられて　前世の果報の罪。

牛の歩く車。めぐりめぐりと呼ぶ。

死して後も又この世にめぐり来てなり。

をのべてよもすがら。彼御跡を吊ふとかや。

後シテ「野の宮の秋の千草の花車。われも昔よめぐり來にけり。

ツキ「ふしぎやな月のひかりも幽なる。車の音の近づく方を。見れば網代の下すだれ。思ひかけざる有様なり。いかさま疑ふ所もなく。御息所よてまへますか。さもあれ如何なる車やらん。

シテ詞「いかなる車と問はせ給へば。思ひ出でたり其昔。加茂の祭の車あらそひ。主ハ誰とも白露の。ツキ「所せきまでたてならべし。車の前後に。シテ「身は小車のやるかたもなき。ツキ「御車とて人を拂ひ。立ちさわぎたる其なかよ。シテ「車の前後に。シテ「ばつとよりて。地「人々轅に取りつきつゝ。ひとだまひの奥に押へられて。物見車の力もなき。身のほどぞ思ひ知られたる。よーや思へば何事も。報いの罪によも洩れじ。身は猶牛の小車の。

妄執　執念ぶかく思ふみだり心。

昔を思ふ花の袖　怨に妄執を晴して昔の舞曲をくり返すさまを述ぶ。

月も昔やにもふらん　我舞と見て月も昔と思ひ出づべしとなり。

森の下露　月の洩るに云ひかく。露は置きどころの詞につづく。

たゝすまひ　有様に同じ。

訪はれし我も其人も　訪はれし御息所も訪ひつる源氏の其人もなり。

伊勢の枕詞。

神風や　伊勢の内宮外宮を云ふ。

内外の　この野の宮の社ばすなはち大神宮なれば。出で入る鳥居も内宮外宮の鳥居に等しきを云ふ。

憑より掛けて　憑より掛けて。鳥居と出で入る姿にて。陰も無き理なれど。幽霊の身は穢らはしくて神は受け給はずや有らんとなり。

又車に　又車に乗りて火宅の門を去り極楽世界に歸れりと云ふ。鳥居も神の門なれば其門と去れる意に掛けて云ふ。

火宅の事は東北に云へり。

シテ　藤原仲光

ツレ　多田滿仲

子方　美女丸

同　春若

ワキ　悪心僧都

揺津　多田滿仲に美女丸さて一子ありけるが。悪問と心に入れぬとて父

めぐり〳〵來ていつまでぞ。妄執を晴らし給へや。

シテ「昔を思ふ花の袖。地「月にとかへす氣色かな。シテ「野の宮の月も昔や思ふらん。地「影さびしくも森の下露。シテ「一身置きどころもあれ昔の。地「庭のたゝずまひ。シテ「よろにぞかはる。地「氣色も假なる。シテ「小柴垣。地「露うちはらひ。訪はれし我も其人も。唯夢の世とふりゆく跡なるに。誰松虫の音はりん〳〵と。

ーて。風茫々たる野の宮の夜すがら。なつかしや。こゝはもとよりかたじけなくも。神風や。伊勢の内外の鳥居にいでいる。姿は生死の道を。神はうけずや思ふらんと。また車にうち乗りて。火宅の門をや出でぬらん。火宅のかど。

仲光

なかみつ　一名　滿仲

元清作

シテ詞「是は多田の滿仲に仕へ申す。藤原の仲光と申す者にて候

の怒を受け手討に遁はんとせしを。仲光と僧都さに救はれて遂に勘気と解かれ。仲光の一子幸露は最初に身代りに立ちて首討たるゝ事を作れり。當時武士のたましひ斯くこうさ思はれてあはれなりみつなか云ふが眞の稱なるを。中古以來人の名を音讀する例は彼是ありて。頼光後成定家家隆の類いづれも他人より呼ぶ時に用ふるなり。いさゝか尊ぶ意と含む。

中山寺　攝津國河邊郡にあり。多田の庄の近邊。

紫檀の机に金泥の御經　紫檀の木にて作れる机の上に金泥もて書ける御經の意。紫文字金文字に映じあひたり。

住むかひもなき　世に生きながらへて住むかひもなきの意。次の本歌によりて住むと澄むにかけ山の井の縁さす。

淺香山　一淺香山かげさへ見ゆる山の井の淺き心を我が思はなくに　一の古歌と昔は手習の初に習ひたる由。古今集の序などに見えたれば。今のいろはさ云ふ位の意。

一寺の貸賦　中山寺中の人々に貸ぜらるゝを云ふ。

管絃　管は笛篳篥。絃は箏琵琶の類。音樂の事。

御折檻　叱り懲す事。

明神氏の神　明神は何神にても云ふ。氏の神は氏の鎭神と云ふ。

こはたが爲なれば　此はの意に子はたをつなぬ。

跡をつけぬ　父の命のまゝに行くものなれば隱行する事に譬ふ。

庭の雪の鼠色と人に見せんさのたんばかせ　御太刀の事。

ふ。扨も御子美女御前は。あたり近き中山寺に登せれかれ候ふ所に。學問をば御心に入れ給はず。明暮武勇を御嗜み候ふ由聞しめされ。以ての外の御憤りにて。某に罷り上り御供申せとの御事にて候ふ程に。今日中山寺へ參り。美女御前を御供申して候ふ。滿仲詞「いかに申し上げ候ふ。如何に美女。久しく寺より呼び下さゝるは。學問能くせよとなりなり。まづ〳〵御經聽聞せんと。紫檀の机に金泥の御經。うれ〳〵讀誦し給へと。美女が前にござし置きたる。美女「美女は父御の仰せに付きても。住むかひもなき淺香山。手習ふ事もなかりしかば。ましてや御經の一字をだに。讀まざりければ今更に。涙に咽ぶばかりなり。滿仲詞「實に〳〵滿仲が子なれば。一寺の貸賦を得ず。御經よまぬは理なり。さて歌は。美女「讀み得ず候ふ。滿仲「管絃は。

地「こはたが爲なれば。父がさしもに云ひし事に。跡をつけぬ庭の雪。人に見せんもなにがしが。子といふかひもなかるべしとて。御佩刀を取り給へば。走りいづるや仲光が。中にて兎角御袖に。取り付きすがり申しつゝ。危き美女御前の。御身の程ぞいたはしき。

滿仲詞「いかに仲光。心をおづめて聞き候へ。子供を寺へ登せれくは。學問の爲ぞと思ひしに。父がさしもに云ひし事に。跡をつけぬ庭きてのかひは何事ぞ。シテ詞「御諚尤にて候ふさりながら。折々の御折檻にてこそ候へ。明暮武勇を嗜まんには。寺より置女を討つて參り候へ。先々御佩刀を賜はり候へ。滿仲「所詮美あれ。仲光共にろのまゝには置くまじきぞ。シテ「何事も御諚をば背き申すまじく候ふ。まづ〳〵御内へ御入り候へ。シテ詞「言語道斷。以ての外の御怒りにて候ふ。御呵り有るべき

とは存じ候へども。かほどまでとは存ぜず候ふ。いや〳〵何と仰せ候ふとも。一まづ落ー申さばやと存じ候ふ。いかに申ー上げ候ふ。只今ハ餘りの御怒りまて。某も迷惑仕りて候ふ。美女「如何に仲光。只今自を逃ーつるは。仲光が制するによれり。美女を討つて參らせよと怒り給ふを。我物ごーは聞きーなり。はや自が首を取り。父御の御目にかけ候へ。シテ「げよ〳〵健氣なる事を仰せ候ふ物かな。所詮何と仰せ候ふとも。一まづ落ー申さうずるにて候ふ。や。何と申すぢ。又御使の立ちたると申すか。あら笑止や。拠何と仕り候ふべき。げにや何事も報い有りける憂き世かな。詞「傳へきく阿闍世大子は頻婆娑羅を害せずや。是れ皆宿縁かくの如ー。美女「過去にてなせば。シテ「現世にやがて。地「報いは人の咎ならじ。只自がなすところを。愚にや恨みある。憂き世の中と思ふらん。たがひに憂き事を。語りかたれ

美女を討てとの御使
又御使のと云ふ。
あら笑止や 詞。舟弁慶の「霊惑する時に云ふ
かはつて候ふ 一鉢木の「あら笑止や風が
や又雪の降り來りて候ふ 一安達「あら笑止や日の暮れて候
ふ」など見合すべし。
鎭婆娑羅 天竺の加毘羅衛國王
舍城の王にて竹園精舍を寄附したる信者。しかるに子の阿闍世太子は不信者にて佛徒と惡み遂に父王を殺したり。よりて子の父と殺すも臣の君と殺すも餓世よりの約束なればぜんかたなしとの意にて此古事を引く。

ば時移る。はや首とれや仲光と。言の葉も涙も無。すゝむこう悲ーかりけれ。
シテ詞「あはれ某御年の程にて候はゝ。御命に代り候はんずるものを。惜ーからぬ命もことによりて。心にまかせぬ口をーさまりて候へ。早自が首をとり。美女御前と仰せ候ひて。主君の御目にかけられ候へ。シテ「何と申すぢ。美女御前の御命に代らうずると申すか。さすが仲光が子にて候ふ。げに〳〵汝が首をとり薄衣につゝみ。夜まぎれに遠々と御目にかくるならば。さすが親子の御事なれば。よもさだかには御覽じ候ふまじ。さらば御命に代り候へ。時刻移りて叶ふまじと。太刀打つて仲光は。我子の後に立ちよれば。美女「美女は餘りの悲ーさよ。仲光が袂にすがりつゝ。たとひ幸壽を失ふとも。共に自害に及ぶ

さすが親子のごろれば。しかも父子の御中なればの意。

べーと。泣きかなーみて制すれば。シテ「のうれ主の命に代る事。弓矢取る身の習ひなり。美女「悲ーやな互に争ふ命のきは。幸壽「幸壽もすゝみ。シテ「此方は思ひ子。美女「美女も立ちよる。幸壽「かなたは主君。是程ゝ惜ーからじ。何とかせまーとやあらんと。猛き心よも。弱り果てたるけーきかな。美女「親ゝだゝ。惜まれぬ身を何とたゞ。こく思ふらん中々に。情のつらさ如何ならん。幸壽「情は人の爲ならじ。今此きはの御命に。代り申さずは。弓矢の家の名ぞ惜ーき。地「かなたこなたも幼き。御身ゝだゝも理の。或はれ主子は惜ーく。主君をばいかで手ゝかけんと。心よわーやあらまし弓。ゆん手ゝ有るは我子ぞと。思ひ切りつゝ親心の。闇討ゝ現なき。我子をゆめとなーゝけり。狂言「シカ〳〵。シテ詞「げゝ〳〵汝が申す如く。某が心

しらま弓　作れる弓。しらは其色の形容。知らずと受けてゆん手を呼び出だす。

ゆん手　左の手と云ふ。

闇討　理も非もなき討方と云ふ。子の愛に迷ふ親の心と梵に闇に譬へ云へば。こゝも其意に云ひかけて討と現の詞に亂れてあやさす。

中さつー候へ。又美女御前を御供申ー。何方へも立ち退き候へ。シテ詞「如何ゝ申ー上げ候ふ。美女御前を討ち奉りて候ふ。滿仲詞「いーくも仕りたるものかな。シテ「いやさは御座なく候ふ。某太刀抜き持つて。少ーためらひ候ふところに。やあいかゝ仲光れくれたるかと。是を最期の御言葉にて候ふ。滿仲「いかに仲光。れてこと存じの如く。總じて美女ならで子と云ふ者なー。今日よりーては汝が子の幸壽を一子と定むべー。急いで呼びいだーー候へ。シテ「其御事にて候ふ。美女御前の御別を悲ーみ。元結切り暮に失せて候ふ。同じくは仲光にも御いとま賜はり候へ。様替へばやと思ひ候ふ。滿仲「心強くは云ひつれども。さぞ思ふらん美女丸をも。我子の如く手馴れーに。二人の者に別るゝ思ひ。地「よーや王士にすむ習ひ。

いしくもあつばれでかしたと云ふ意。

元結切り失せて候ふ　出家になる事。家を出でたる事。

貴命は誰ものがれぬぞと。仲光をとにかくに。すかし給ふぞよーなき。げにや親子の道なれば。あはれとや又思ひ子の。跡とふ法の事業を。營み給ふあはれさよ。

ワキ詞「是は比叡山惠心の僧都にて候ふ。扨も去る子細候ひて。只今多田の滿仲の御所へと急ぎ候ふ。先々此方へ渡り候へ。いかに案内申ーー候ふ。シテ詞「誰にて渡り候ふぞ。や。惠心の僧都の御下向にて御座候ふよ。ワキ「いかに仲光。扨も幸壽が事は候ふ。まづ某が參りたる由御申ーー候へ。シテ「心得申ーー候ふ。如何にらずや。先々此方へと申ーー候へ。シテ「畏つて候ふ。此方へ御入り候へ。ワキ「心得申ーー候ふ。滿仲「さて只今は何の爲の御いでぞ。ワキ「さん候ふ只今參る事餘の儀に非ず。美女御前の御事を申さん爲に參りて候ふ。滿仲「うの事にて候ふ。餘りにふ

惠心の僧都　寛仁元年七十六歳にて寂したる人。僧都は僧官の名。四位の殿上人に准ずと見ゆ。先々此方へ渡り候へ　美女丸に云ふ詞。

御下向　扨も幸壽が幸は候ふ次第なりと云ふ意。　京都より下る事。

ーざの者にて候ふ程よ。仲光に申ーー付け失ひて候ふ。ワキ「其事にて候ふ。まづ御心をーづめてきこーめされ候へ。美女御前を失ひ申せとの御使ーーきり刃りーに。仲光心に思ふやう。いかで三世の主君を手に懸け申すべきと思ひ。我子の幸壽が首を切り。美々と申ーて御目にかけて候ふ。されば我子に代へて思ふ程の。御前にこそ參りけれ。滿仲詞「さればこそ猶未練なる美女なりけり。幸壽の佛事と思ーめーー。美女を助けていや諸事をさーー置きて。地「猛き心もよわ〳〵と。たび給へと。涙を流しーー申しければ。仲光餘りのうれーーさよ。御盃や菊の酒。はや領掌を申ーけり。仲光餘りのうれーーさよ。御盃や菊の酒。仙家よ入りーー身の。七世の孫よ逢ふ事も。たとへならずや親と子の。一世のちぎりの二度逢ふそうれーーき。シテ「親子鸚鵡の盃

三世の主君　君臣の縁は過去現在未來の三世に渡ると云ふ。

引きぐし　引きつれに同じ。

領掌　承諾に同じ。これは猛き心が承諾するの意。

仙家に入りし身の　もろこし漢の末に阮肇と云ふ人天台山に入りて女子に逢ひたるが、のち家に歸りて見れば既に七世と經たりと云ふ古事。

鸚鵡の盃　盃の名。たゞ遠の文字と云ひかけたるのみ。

の。いく久〳〵さの　酒宴かな。ツキ詞「いかゝ仲光。目出度き折なれば一指御舞ひ候へ。地「いく久〳〵さの酒宴かな。シテツキ「鶯の。友なき水ゝうきゝ〳〵づみ。地「下安からぬ思ひこうあれ。シテ「あゝれやげゝ我子の幸壽が有るならば。美女御前と合舞せさせ。仲光手拍子囃〳〵。只今の涙を感涙と思はゞ。いかゞはうれ〳〵かるべき。地「思ひは涙　よろめは舞の手。袂るは袖の。上露も下露も。れくれ先だつ憂き世の習ひ。昨日は歎き。今日はよろこびの都ゝか〳〵る。是までなりと　惠心の僧都は。美女を伴ひ歸りければ。仲光も遥ゝわきごゝ〳〵参り。此度の御ふゝ〳〵ん人爲ゝあらず。かまひて手習學問ねんごろゝれは〳〵ませと。御暇申〳〵て歸りけるが。無慙や幸壽が御供ならばと。ゐばゝは御輿を見送り申〳〵て。うちををれてそとゞまりける。

一調　一曲と云ふに同じ。

上露も下露も　狩衣水干などの袖と袂ちたる糸の垂れたる處と云へば。袖のさ云ひかけて。其露の先に消ゆるも後に消ゆるも遂に留まらぬ世ぞさなり。

都にかへるれば云ふ。　比叡山は都の方なり。

わきごし　奥の脇と云ふ。

かまひて　屹度かならずの意。

むざんや　悲しやに同ト。

前ジテ　僧形光
ツレ　同胡蝶
後ジテ　頼光の郎等
ワキ　前は京都
後は大和
ワキツレ　頼光の郎等
アイ　同

光の病中に土蜘蛛の精魂来りて悩ませんとせしと。枕辺なる膝丸も切り拂にれ其塊は立ち退きしかば。郎等うの姉と認め行きて遂に葛城山の巣窟に至り。之を退治せし昔語りと作れる。

浮きたつ雲の行方とやせんと云ふと風のゆ地に云ひかけたり。雲と風に任すえは身の行末のたにつかなき意。風は病の名。

頼光　人名と音調するわけば仲光に云へり。病仲の註を見るべし。

典薬頭　醫官の名。今薬取にゆきて歸路なると云ふ。

いかに誰か御入り候ふ　主人の留守前ゆゑ案内と乞ふなり。

御機嫌を以て　御機嫌の好き拵と見合せての意。

こゝに結ぶ水の泡のうき世にめぐる身にこそ有るが無きかの世に。めぐり來ぬ身のはかなさよとなり。

人知れぬ　「さらねだに風きさよ衣」などの上のさよ衣云ふ古歌によりて。病苦の風きさよ衣にかけ。裏さ云ひ袖と云ひてつゞけたり。

土蜘蛛　つちぐも

作者未詳

ツレ次第「浮きたつ雲の行方をや。風の心地を尋ねん。サシ「是は頼光の御内ゝ仕へ申す。小蝶と申す女にて候ふ。詞「さても頼光例ならず惱ませ給ふにより。典薬の頭より御薬を持ち。唯今頼光の御所へ参り候ふ。いかに誰か御入り候ふ。トモ詞「誰にて御座候ふぞ。シテ「典薬の頭より御薬を持ちて。小蝶が参りたるよ〳〵御申〳〵候へ。トモ「心得申〳〵候ふ。御機嫌を以て申〳〵あげうずるにて候ふ。

頼光サシ「こゝゝ消えかこゝゝ結ぶ水の泡の。うき世ゝめぐる身なこそありけれ。げゝや人〳〵れぬ。心はれもき小夜衣の。恨みん方もなき袖を。かたゝきわぶる思ひかな。トモ「いかゝ申〳〵上げ候ふ。典薬の頭より御薬を持ちて小蝶の参られて候ふ。頼光

「こなた〳〵來れと申〳〵候へ。ト云「畏つて候ふ。此方〳〵御參り候へ。ッレ「いか〳〵申〳〵上げ候ふ。典藥の頭より御藥を持ちて參りて候ふ。御心地は何と御入り候ふぞ。頼光「昨日より心もよわり身も苦〳〵みて。今は期を待つばかりなり。ッレ「いや〳〵それは苦〳〵からず。病ふは苦〳〵き習ひながら。療治よりてなほる事の。ためしは多き世の中よ。頼光「思ひもすてず樣々よ。地「色を色と盛して。品を盛して。種類

今は朝と待つ　死期と待つと云ふ。

わがせこが來べき宵なりさゝがにの蜘蛛のふるまひかねて（しるしも）　日本紀には「わがせこが來べき宵なりさゝがれの蜘蛛の

むこなひこよひしるしも」と有る。古今集序の古註に右の文句に直して引きたり。是は允恭天皇の御寵愛ありし衣通姫と云ふ女の。君の御幸を待つ心にてよまれしなり。わが夫の君の今宵來給ふべき前兆は蜘蛛の所爲にあらはれたりの意。蜘蛛のふるまひと見て待つ人の來べきを知る古の當時にありしならん。

五体頭　二手二足。

太刀の名。

膝丸　袋と見する處となり。

うむくる處と　足もためず　足も止まらせずの意。

得たりやたう　勝ち誇りたる聲。しめたさいふ位の詞。

御聲の高く　前の得たりやたうを指す。

いしくも　いみ〳〵くもに同じ。

りさ〳〵がよの。頼光「蜘蛛のふるまひかねてより。知らぬといふよ猶ちかづく。姿は蜘蛛の如くなるが。シテ「かくるや千筋の糸すぢよ。頼光「五体をつゞめ。シテ「身を苦〳〵むる。地「化生と見るよりも。枕よありー膝丸を。抜きひらきちやうと切れば。うむくる所をつゞけさまよ。足もためずなさふせつゝ。得たりやれうとのゝーる聲よ。形は消えて失せよけり。

ワキ詞「御聲の高く聞え候ふほどよ馳せ參じて候ふ。何と申〳〵たる御事よて候ふぞ。頼光「いー〳〵くも早く來たる者かな。近う來り候へ。語つて聞かせ候ふべー。扨も夜半ばかりの頃。誰とも知らぬ僧形の來りわが心地をとふ。何者なるぞと尋ねーよ。我せこが來べき宵なりさゝがにのふるまひかねてーるーもといふ古歌をつらねね。即ち七尺ばかりの蜘蛛となつて。我に千筋の糸をくりかけーを。枕にありー膝丸にて切りふせつるが。

御太刀つけたる跡。此血とたんだへ　太刀にて切り付けきの意。　此血と認め行

土も木もわが大君の國なればいづくか鬼の（すみかなるべき）太平記にある歌。但し初句は草も木もさわり。

一人武者　圖一の武者。

下知　命令に同じ。

化生の者とてかき消すやうに失せーなり。是と申すもひとへに劍の威徳と思へば。今日より膝丸を蜘蛛切と名づくべー。なんほう奇特なる事にては無きか。ツキ「言語道斷。今に始めぬ君の御威光劍の威徳。かた〴〵以てめでたき御事にて候ふ。また御太刀つけのあとを見候へば。けーからず血の流れて候ふ。此血をたんだへ化生の者を退治仕うずるにて候ふ。頼光「急いで參りつて候ふ。

神國王地國なれば。神の御國。天皇の御治すべきの意。　其御威光により退

都へとてこそ　葛城山は大和なれば京都の賴光の館に歸るとこそ云ふ。

候へ。ツキ「畏つて候へ。ツキ「一聲」土も木も我大君の國なれば。いづくか鬼のやどりなる。其時一人武者すゝみ出で。彼塚にむかひ大音あげていふやう。是は音にも聞きつらん。賴光の御内にて其名を得たる一人武者。いかなる天魔鬼神なりとも。命魂を斷たん此塚を。崩せや崩せ人々と。呼ばゝりさけぶ其聲に。力を得たるばかりなり。地「下知に從ふ武士の。塚をくづー石をかへせば。塚の内より火焔をはなち。水をいだすといへども。大勢くづすや古塚の。あやーきの。劍にあたつて惱むのみかは。命魂をたゝんと。手にて手を取り組みかゝりければ。蜘蛛の精靈千筋の糸を繰りためて。投げかけ〳〵白糸の。手足にまとはり五体をつゞめて。斃れ伏ーてぞ見えたりける。ツキ「然りとはいへども。地「ふかりとは云へどもも。神國王地のめぐみを賴み。彼土蜘蛛を中にとりこめ。大勢みだれかゝりければ。劍の光にて少ーれうるゝ氣色を便りに。切りふせ〳〵土蜘蛛の。首打ちれとー悦びいさみ。都へとてこそ

歸りけれ。

小鹽 をしほ

氏信作

前シテ 翁
後シテ 在原業平
ワキ 男
ワキヘ 山城
山城
大原野
山城國乙訓郡。
花も都の
大原野のあたり長岡に都し給ひし事あり。故に處がら云ふ。又花の都さいふ詞あれば名にし負ふと云ふ。其名に花の文字を持ちたる意なり。
木綿花
木綿と云ふ織物ともて作れる花。木綿付け神に手向くるものなれば手向につけ。花のごとく奏しき意にて花とば袖につづけたり。
手向の袖
神に手向しに行く袖。
參詣人と云ふ。
神もまじはる
和光同塵とて神は塵世に交りて人間を救ひ給ふ事。
しとりして
しとりとは木の枝などと立てゝ。再び來る時迷はざらん爲に。花の本へゆく道の
印目とすると云ふ。
かざすとは頭にかざしの挿すと云ふが本にて頭に上ぐる事にも用ふ。こゝは花を鬘に添へて戴く事。袖はかざしの緣のみ。重き意なし。
老木の榮
老木と鬘にしたると。云ふれば。齢は老いぬれば物思ひもなし。老も忘れて花に對する意。
白雪を戴くまで
白髮に爲るまでも君恩に將る意。
光りにあたる
古今集に「春の日の光りにあたる我なれど頭の雪と取る爲ぞわびしき」と云へるなから身の白髮になるがわびしき意。
情の道
人倫と云ふ。歌などよみて花を賞する事。
老なる厭ひ
老人なりとて厭ふ意。
勿れ花の心
忠賢の心よの意。
嵐を云ふ。
こう山のかせきに似たりとも
夫木集
花になさばならめや
かせきは鹿を云ふ。身のなりはひをかせぎと云へばかけたるなり。
杣ちは果てしなや
杣ちは果てゝも果てゝも無きやにかけて云ふ。
知る人ぞ知る
色も香も知る人ぞ知るなら
ば問ひ給ふなにかけて云ふ。

大原野の花の名にし負へる由承り及び候ふあひだ。若き人々を伴ひ申し。唯今を盛りの花を見候ふ者は。下京邊に住居する者にて候ふ。扨も大原野の花。今大原山へと急ぎ候ふ。サシ「面白やいづくはあれど所から。花も都の名にし負へる。大原山の花櫻。歌「今を盛りと木綿花の。手向の袖もひとしほ。色そふ春の時を得て。神もまじはる塵の世の。花や心にまかすらん。

シテ一聲「あをりして。花をかざしの袖ながら。老木の柴と人や見ん。サシ「年ふれば齢は老いぬしかはあれど。花を一見れば物思ひも。なしと讀みしも身の上に。今白雪を戴くまで。光りにあたる春の日の。長閑けき御代の時なれや。歌「散りもせず。咲きもたる春の日のどけき御代の時なれや。歌「散りもせず。咲きも殘らぬ花ざかり。四方のけしきも一しほよ。にほひ滿ち色よそふ。情の道にさうはるよ。老な厭ひそ花心。

ワキ詞「ふしぎさやな貴賤群集の其中に。ことに年たけたる老人花の枝をかざし。さも花やかよ見え給ふは。うも何くよりきたり給ふぞ。シテ「思ひよらずや貴賤の中よ。わきて言葉をかけ給ふは。さも心なき山賤の。身にも應せぬ花ずきぞと。れ笑ひある姿ころ山のかせきよ似たりとも。心は花よならばこそ。なさばならめや心からよ。地「をかしとこそは御覽ずらめ。よしや此身は埋木の。朽ちは果てし無や心の。色も香もある人よも誠よは腹立ち給はじ。いか樣故ある心言葉の。奥床しきを語り給へ。シテ詞「何と語らん花盛り。いふよ及ばぬけしきをば。

里は軒端のたるにかけて云ふ。里は遠く立ちのきあかれさす　日の枕詞。雲霞の重なると九重の都にかけて云ふ。雲霞は花の形容。

大原や小鹽の山も今日こそは神代の事も思ひ出づらめ　古今集に伊勢物語にも出づ。業平の歌。伊勢物語には「むかし二條の后のまだ東宮の御息所と申しける時。氏神に詣でて給ひけるに。近衛づかさにさむらひける翁。人の祿たまはるついでに御車によりて給ひてよみて奉りける」とて此歌あり。氏神とは藤原氏の祖神と崇れる大原野の社と云ふ。近衛づかさの翁とは近衛の中將なりし業平を指す。祿とは賜はりものゝ名。歌の意は。御息所もむかし業平と馴れ睦びたる中なりしと今日は思ひ出だし給ふならんとなり。御息所と山に擧へ昔の關係と御代の事に擧へて云ふ。この時まだ東宮なりしかば行幸とは云ひがたく。后行幸とも申されねど。後の詞ともて稱へたるなり。

いかゞは思ひ給ふらん。ワキ「げにゝ〳〵妙なる梢の色。うつろふ陰も大原や。シテ詞「小鹽の山の小松が原より。煙る霞の遠山櫻。ワキ詞「里は軒端の家ざくら。シテ「匂ふや窓の梅もさき。ワキ「あかねさす日も紅の。シテ「かすみか。ワキ「雲か。シテ「八重。ワキ「九重の。地「都邊は。なべて錦と爲りにけり。櫻を織らぬ人ゝ無き。花衣着にけりな。時も日も月もやよひ。逢ひにあふ詠めかな。げゝや大原や。小鹽の山も今日こそハ。神代も思ひ知られけれ。ワキ詞「かゝる面白き人ゝ參りあひて候ふ物かな。此まゝ御供申ゝ花を詠めうずるゝて候ふ。又唯今の言葉のすゑゝ。大原や小鹽の山もけふこそは。詞「神代の事も思ひいづらめ。今所から面白う候ふ。是は如何なる人の御詠歌ゝて候ふぞ。シテ詞「事あたらゝき問ひ事かな。此大原野の行幸に。在原の業平供奉ゝ給ひしも。かたじけなくも后の御事を思ひいでゝ。神代の事とはよみゝとなり。申すゝつけて我ながら。空れそろゝや天地の。神の御代より人の身の。妹背の道は淺からぬ。地「名殘をゝほの山深み。のぼりての世の物語り。かたるも昔男。あはれ舊りぬる身の程。歎きてもかひなかりけり。歎きてもかひぞなかりける。ロンギ地「げに山賤のさゝもげに。ゝわふるびとゝ見ゆるゝも。心ありける姿かな。シテ「心知られば疾くも身の。姿ゝ恥ぢぬ花の友に。馴れてさらばまじらん。地「まじれやまじれ老人の。心若木の花の枝。シテ「老隱るやとかざゝゝん。地「かざゝの袖を引きひかれ。このもかのもの陰ごとに。シテ「貴賤の花見。地「興車のめぐる盃の。花のながえをかざゝつれて。よろほひさそらひ。とりゞゝの。人の面影。ありと見えつゝ失せゝけり。

ワキ詞「ふゝさや今の老人の。唯人ならず見えつるが。扨は小鹽

のぼりての世　昔の世に同じ。昔男　伊勢物語に業平の事を「昔男ありけり」と書き出だせるによりて云ふ。

しわふろびと　老人を云ふ。翁と共にかけたり。老さくろやと　若木の花をいざさば其陰に老も隱されやせんとの意。こゝのもかのこ　あちこちらの意。奥や車。ながえは車とのみ受けたり。右近に云へり。車の前に出でたる轅。之を長枝の意にかけてかざしつれとかけたり。よろぼひ　酔てよろめく事。さまよふに同じ。ぶらつき歩く事。日のかげるなど云ふ。影になりて消ゆる事。和光の影　神の光を世に交ふる事。光の字に就き影と云ひ。影に爲りて消ね意を業平にかけたり。業生濃度　人間を救ふ爲に神と爲りて顯はれしを云ふ。やわらぬ春や昔の春ならぬ我身（ひとつばもこの身にして）古今集にも伊勢物語にも出でたる業平の歌。意は。月も昔の月。

春も昔の春。わが身も昔のわが身なるに。去年あひたる人に再びあはれぬと云ふ感慨と含めたり。

花見車のやごとなき　車の心と輪との間を支へたる木と「やごと」云ふ。故にやごとなきにかけたり。やごとなきは貴き事。

他生の縁　他人の近づきに為る縁。

けふ來ずはあすは雪とぞ降りなまし消ぬればありとも花と見まし　やごとなこれも兩書にある業平の歌。今日わが來ざりしならば雪と散つて仕舞ひしならん。明日まで消ねずに居ても花とは見らるまじきに。今日來しこう幸なれの意。なほ餘意あり。本書に眺きて見るべし。

花見車くるくると音を重れてあやさす。　車とくるくるより月夜の花。月前の花よ。

月の花よ

にもふ事いはでたゞにや止みぬべき我にひさしき人しなければ。これも業平の歌。我と同じ心の人なければ思ふ事いはずには止まれずさなり。

思ひ内より　内心にある思ひの外に洩れたるを云ふ。

春日野の若紫のすり衣しのぶの亂れ限り知らずも　若紫は紫の若草なるべし。

若紫の歌。

こゝに。今はさながら花も雪も。皆白雲の上人の。櫻

上。花の姿はよも知らじ。詞「有りし神代の物語り。姿顯はすばかりなり。ワキ「あら有り難の御事や。他生の縁は朽ちもせで。シテ「ちぎりし人も樣々に。ワキ「思ひぞいづる。シテ「花も今。地「今日こずは。あすは雪とぞ降りなまし。消ねずはありと花と見まーやと詠ぜしに。今はさながら花も雪も。皆白雲の上人の。櫻かざしの袖ふれて。花見車くるくより。月の花よ待たうよ。地クリ「それ春宵一刻價千金。花は清香月は影。惜しまるべきは只

の形容と見るべし。

みちのくのもぢずり誰故に亂れんと思ふ我ならなくに　古今の巻の歌。伊勢物語に「春日野の若紫の歌。の親歌に次ぎて「みちのくの云々と云ふ歌の心ばへなりにより」とあるによりてこゝにも並べあげたり。しのぶもぢずりは前に云へる名産。其摺りかたの入り亂れたると心の亂るゝに云ひかく。我には非ず。誰故なればこうの意。

紫の色に染みき意なし。上よりのべ來れる詞の縁に云ひて色の文字と形容す。

唐衣きつゝ馴れにし要しあればはるゝ來ぬる旅をしぞ思ふ　これも業平の歌。京都には馴れたる妻を殘して來ぬれば遠路のこの心細さと思ふさなり。委しくは杜若に云ふべし。

陸奥に云ひかく。

都の奥や東山　わが旅行する土地は東國なれば。都にやあらん。

ひき出づるさなり。都の東山も云ふ位の意。

この東國の山もこの東國の果てなきと續ぬ。

はてしなき武藏野は今日はな燒きそ若草のつまもこもれり我も（こもれり）

例の岡崎に出でたる歌。業平の。

つまもこもれり我も　女のよめるなり。

武藏野に　武藏野は野守も燒き給ふなの意。委しくは本書を見るべし。

今集には初句かすがのはと有り。古若草のはつまの枕詞。

此時なり。シテサシ「思ふ事いはで唯よや止みぬべき。地「我よひとゝき人ゝなければ。思ひ内より言の葉の。露ゝなゝゝよ洩れけるぞや。ツレ「春日野の。陸奥の忍ぶもぢずり衣。ゝのぶの亂れ。限りゝらずもと詠ぜゝよ。色に染み香にめでゝなり。または唐衣。着つゝなれにゝつまゝゝあれば。はるゝゝきぬる旅をゝぞ。思ふ心の奥までは。いさゝら雲のくだり月の。都なれや東山。是もまたあづまの。はてゝなの人の心や。シテ「むさゝ野は。今日はな燒きそ若草の。地「夫もこもれり我もまた。こもる心は大原や。をゝほゝつゞく通ひ路の。ゆくゝはれなし戀草の。忘れめや今も名は。昔男ぞと人もいふ。

シテ「むかゝかな。ツカ「昔かな。花も所も月も春。地「ありゝ御幸

こもる心は　心中に思ひのこもる意に云ひかく。
繁草　繁の繁きを草に譬ふ。忘草と云ふ草あれば其意にて忘れめやにつゞけたり。
夢かうつゝか云々　これも雨盛の歌に。君や來しわれや行きけん思ほえず夢かうつゝか寢てか覺めてか。また。ひにき夢うつゝとは世の人さだめよ。などある句を取りてつゞけたり。前の歌は女。後の歌は業平。

シテ　源仲國
ツレ　小督殿
トモ　侍女
ワキ　勅使
アト　山城

小督局は少納言信西が孫。樞町中納言成範卿の女にて禁中第一の美人なりしが。清盛の爲めに忌まれて遂に嵯峨の奥に隱れたりしと。仲國勅を奉じて多月の夜ひそかに尋ね至る事と作れり。實には小督と借りて主上御心中のあはれなると戰き。裏には清盛の權柄。君の御寵姬をさへ逐ひ失はむるに至る怒慨を含めてなれば。味さらに深かるべし。
中宮　御后に同じ。
相國　太政大臣の異名。清盛を指す。
世の譯りを　小督が今の世の中すなはち平家に譯り給ひしにや。
夜のおとゞ　夜たやすみになる御殿を云ふ。
南殿　紫宸殿を云ふ。夜は又罷

を。シテ「花も忘れじ。地「花も忘れぬ。シテ「心やを〜ほの。地「山風ふき亂れ。散らせや散らせ散りまよふ。木のもとながらまどろめば。櫻と結べる夢かうつゝか。世人定めよ。寢てか覺めてか春の夜の月。あけぼのゝ花とや殘るらん。

小督

こがう　古名　仲國　氏信作

ワキ詞「これは高倉の院に仕へ奉る臣下なり。さても小督の局と申〜て。君の御寵愛の御座候ふ。中宮は又まさ〜き相國の御息女なれば。世の憚りをれほ〜めて〜けるか。小督の局暮れと失せ給ひて候ふ。君の御歎き限りなし。晝は夜の大殿に入り給ひ。夜は又南殿の床と明かさせ給ひ候ふよ〜聞〜めし及ばれ。急ぎ彈正の大弼仲國をめ〜て。小督の局の御ゆく〜へを。尋ねて參れとの宣旨とま

もせずして起き明かし給ふの意。
嵯峨野　山城國葛野郡。嵐山の麓にあり。
宣旨　天皇の仰せ。

折戸作れる月を折戸と云ふ。其片開きなるを片折戸と云ふ。
竹柴の類を折りまげて

禁中に左馬寮右馬寮ありて良馬を繫ひ置く役所あり。
其御馬と云ふ。
やがて出づるや　仲國の出づるを月の出づるやと。
秋の夜の月毛の駒よ　心して雲井に歸れ時の間も見ん。源氏物語の歌。月を月毛にかけたり。
月毛　月毛には薄桃色の毛ある馬と云

かせ。唯今仲國が私宅へと急ぎ候ふ。いかゝ仲國の渡り候ふか。シテ詞「誰〜て渡り候ふぞ。ワキ「是は宣旨〜て候ふ。さても小督の局の御ゆくへ。嵯峨野の方に御座候ふ由聞〜めし及ばせ給ひ。いろ〳〵尋ね出だし此御書をあたへよとの宣旨〜て候ふ。シテ「宣旨畏つて承り候ふ。さて嵯峨〜ては如何やうなる處とか申〜候ふ。ワキ「嵯峨〜ては唯片折戸〜あたる所とてそ聞〜めされて候へ。シテ「左樣の賤が屋には片折戸と申す物の候ふ。今夜は八月十五夜〜て候ふ間。琴ひき給はぬ事あらじ。小督の局の御ゆらべをば。よく聞き知りて候ふ間。御心安く思〜召せと。委〜くいろ〳〵申〜上げ〜れば。ワキ「此よし奏聞申〜けれぱ。御感のあまり忝くも。嵯の御馬を賜はるなり。シテ「時の面目畏つて。地「やがて出づるや秋の夜の。月毛の駒よ心〜て。雲井〜翔れ時のまも。いろ〳〵心の行方かな。